

史伝『仙台藩主伊達政宗と 官房長官 茂庭綱元』

政宗の官房長官と云われた吏僚・綱元

主君政宗の生涯を見届けた唯一の重臣

D 校正

2023 年 11 月

佐藤 正喜

目 次

はじめに

序 茂庭氏の出自

一 茂庭綱元と父・周防良直、姉喜多

二 政宗の誕生、綱元の伊達家出仕

○政宗の父・輝宗公

○政宗の誕生・元服・結婚

○綱元の米沢舘山城出仕の頃

三 戦乱の世、政宗の領土拡張の野望

○人取橋の戦い

○綱元奉行職に

○会津摺上原の戦い、葦名氏の滅亡

四 豊臣政権との対峙

○秀吉ににらまれた政宗

○小田原参陣

○政宗は弟小次郎を本当に手討ちしたのか

○秀吉による奥州仕置

○葛西大崎一揆の勃発

○一揆の経過

○第二次一揆討伐に向う

五 朝鮮出兵、秀吉との知遇

○政宗の岩手沢入城と朝鮮出兵

○秀吉愛妾「香の前」の下賜、綱元の隠居・出奔

○伏見伊達屋敷の造営、異母姉喜多の活躍

○関白秀次謀叛事件と政宗

○綱元の帰参、成実の出奔

六 戦国時代の終焉

○太閤秀吉の薨去、家康の野心

○関ヶ原の戦い、東北関ヶ原(慶長出羽合戦)

○徳川の天下、政宗の新しい国造り

○仙台城普請

七 仙台藩奉行・茂庭綱元

○政宗の仙台入城

- 六奉行執行体制
- 綱元岩ヶ崎城主後見を兼任

八 政宗の施政と「吏僚」綱元

九 仙台留守居の綱元、大坂の陣

- 国家老として留守を預かる
- 大坂冬の陣
- 秀宗君の宇和島入部、綱元が藩政補佐
- 大坂夏の陣、真田幸村子女との遭遇
- 綱元盟友・片倉小十郎景綱の死
- 綱元、元和偃武で多忙な日々

十 綱元高野山にて宗綱君の菩提を弔う

十一 政宗公と老臣茂庭綱元

- 将軍秀忠公から家光公への時代
- 政宗公の健康不安

十二 政宗公の薨去と綱元の隠棲

- 政宗公の最期
- 了庵綱元の隠棲
- 二代藩主忠宗公の治政

十三 了庵綱元の晩年

- 隠棲地文字での弔いの日々
- 茂庭了庵綱元の大往生

十四 その後の茂庭綱元周辺の情報

- 綱元三男実元家(文字茂庭氏)
- 綱元僚友成実の死
- 二代藩主忠宗公卒去

十五 その後の茂庭家

あとがき

参考文献

茂庭綱元略年表

関連地図

近世茂庭氏家譜

登場人物略記

はじめに

仙台藩初代藩主伊達政宗の三傑のひとりで「吏の綱元」と称された茂庭石見綱元のことには余り知られていない。政宗の官房長官という表現をする歴史家もあり、「武の伊達藤五郎成実」、「智の片倉小十郎景綱」とともに並び称される伊達政宗の三傑のひとりである。

伊達成実には自著『成実記』があり、片倉景綱と茂庭綱元には、夫々後に編纂され各家に伝来したという家史『片倉代々記』、『茂庭家記録、綱元君記』という記録が残されている。『伊達治家記録』という三者に共通の藩編纂の史料があるが、他の二人に比べて茂庭綱元のことには現代社会(歴史物、小説)に余り紹介されていない。ところが『仙台市史・史料編』には、茂庭綱元と政宗公との間で遣り取りした書状が、簡単な解説と共に年代別に整理して掲載されていることから、綱元の「当時の生の情報」を拾い出せることが分かり、自分の中にあつた「綱元に関する情報不足」は杞憂であることが分かった。これが、自分で綱元の記録を残そうという強い動機になった。

茂庭綱元は博覧強記にして、生来豪放磊落な偉丈夫と評されている。内政や外交に秀でていただけでなく、茶道、和歌、書も得意とする文化人でもあり、負け知らずの猛将でもあつたという。

実務の面では、一戦国大名の重臣として戦国期から藩政期に至るまで実戦よりも内政・外交(交渉)を主とし、戦役にあつては兵站という地味な仕事を完璧にこなした。こうして、「仙台藩伊達政宗の官房長官」とも称された「吏僚 茂庭綱元」は、政宗公の信頼が厚く、慶長期の仙台の国造りと藩政機構の確立に多大な貢献をした。政宗の名執政としてだけでなく、豊臣秀吉、徳川家康からもスカウトされたほどの逸材であつたが、二君に仕えずと誘いを断つたことを記憶にとどめておきたい。

加えて政宗公の出生から七十才での薨去までを看取り、更に四年のあいだ菩提を弔い、同じ祥月命日に九十二才で身罷つた唯一の家臣としての彼を忘れることはできない。

筆者は、綱元が江戸幕藩体制に移った慶長九年、五十六才の頃から領主の守役後見として単身赴任し、隠棲後には九十二才で大往生するまでを過ごした彼の領地(旧陸奥国栗原郡)に生まれた関係で、「風土記書上」などの地元の文献も調べて茂庭関係文書を書き溜めていました。

今回、上記の三大史料と筆者のメモを元にして、史実に沿いながら解説し感想を加えて、茂庭綱元を主君政宗の家老として現代の表舞台に引き出して、その事跡と魅力を歴史好きの読者に知っていただきたいとの思いで書きました。

以降、『伊達治家記録』を「治家記録」又は単に「記録」、『茂庭家記録 綱元君記』を「茂庭記録」と略記することがある。

序 茂庭氏の出自

茂庭氏は、源平合戦に平家方の武将として白髪を染めて出陣したことで有名な斎藤別当実盛の後裔とされる。

山城国に住んでいた実盛の後裔実良は奥州へ移住し、伊達家初代の朝宗に仕え、伊達郡茂庭村(現在の福島市飯坂茂庭)を領して鬼庭と称した。

以後、代々伊達氏に仕えて戦国時代に至った。

鬼庭実良を初代とすると、伊達植宗に仕えた左月斎良直は十一代目、その子が茂庭綱元である。改姓については後述する。

初代実良から十代元実までの墓は福島市飯坂茂庭の初代土着の地、十一代良直の墓は福島県本宮市青田字茂庭の人取橋古戦場跡地(文政十一年に子孫が建立)、茂庭綱元の墓は、主君伊達政宗の霊を弔い隠棲し九十二才で没した地(宮城県栗原市栗駒文字)にある。綱元は藩政期の仙台藩主伊達政宗に仕え奉行として活躍したが、その子孫は仙台藩の家格「一族」として奉行職を担うことになり、十三代良元以降は松山に一万三千石の領地(所拝領)を得て、石雲寺茂庭家霊屋(宮城県大崎市)に祀られている。

一 茂庭綱元と父・周防良直、姉・喜多

＊茂庭綱元が鬼庭から茂庭へ改姓したのは文禄元年、名護屋在陣中の秀吉の命によるが、それ以前でも便宜上茂庭の表記で通す。

◇父鬼庭周防良直は、永正十年に伊達郡赤館城主・鬼庭元実の子として生まれた。二十七才の時、父の隠居に伴い家督を継いだ。

天文十一年に勃発した伊達家の内乱(天文の乱)では、父と共に伊達晴宗方に属して植宗方と戦い、その功績を買われ天文十八年には長井郡川井城主(山形県長井市)となり、所領を二百貫文に加増された。

永禄七年、伊達家当主輝宗の元で評定役に抜擢され、遠藤基信と共に輝宗政権の中核を担い、輝宗の信任によく応えていた。

最初の妻との間に娘・喜多を設けたが、男子に恵まれずに離縁し、後妻に伊達郡福島城主牧野刑部の娘を迎えている。

◇茂庭綱元は、天文十八年、良直三十七才の嫡男として奥州伊達郡鬼庭村赤館(福島市飯坂町茂庭)に於いて誕生した。姓は藤原氏、鬼庭のち茂庭と改めた。通称は左衛門と称し、後に石見に改名。諱は綱元。

◇永禄十一年、綱元は二十才で、室・新田氏(新田遠江守景綱の息女)を迎え、翌年、嗣君が誕生した。後に、左衛門安元と称したが二十四才で早世している。

綱元の岳父・新田景綱は、父良直と同じくらいの年令で米沢の舘山城主であった。

新田景綱は、天文の乱では晴宗方の有力武将であり、輝宗の元では執政職を勤めていたから、良直とは執政職どうしの付き合いがあったことが頷ける。

◇綱元には十一才年上の異母姉・片倉喜多がいた。

喜多の母は鬼庭良直と離縁後、喜多を連れて米沢の神官片倉家に再嫁した。

永禄十年(1567)に伊達政宗が誕生し、片倉喜多が乳母を拝命した。

喜多は独身であり実際は養育係であった。藩の記録には「保姆」と書かれている。

喜多は戦国にあつて女ながら文武両道に通じ、兵書を好み講じるほどであったというから、政宗の信頼も厚く、養育に当り人格形成に強い影響を与えたとされる。

喜多の母が片倉家に再嫁して生まれたのが片倉小十郎景綱である。

片倉景綱は、喜多の十九才も年下の異父弟で、綱元にとっては八才年下の義理の弟であった。

政宗の家臣としての片倉喜多、茂庭綱元、片倉景綱の三人は、身近で特別な間柄で結ばれていたのである。

◇天正元年(1573)、父良直は伊達氏の家格「一族」になった。

天正三年、良直(六十三才)が輝宗公へ隠居をお願いし左月斎と号した。

父良直は隠居したとはいえ政宗本陣にあつては、輝宗の五弟・政重の国分氏入嗣に際して事前の折衝にあたる(天正五年)など、引き続き輝宗公の側近にあつて政務に従事し、信任厚い老参謀であった。

二 政宗の誕生、綱元の伊達家出仕

○政宗の父・輝宗公

『伊達治家記録』から、政宗に相続する迄の輝宗の軌跡を簡単に記す。

天文十三年九月、晴宗の第二子として伊達郡西山城に生まれ、弘治元年三月將軍足利義輝の片諱を受け輝宗と名乗った。永禄八年に父・晴宗の隠居に伴い伊達家を相続した。天正十二年に四十一才で政宗に相続し、翌年十月安達郡高田原において畠山義継の謀略に遭い四十二才で横死した。

この間、現役二十年余に相馬氏、最上氏と領土合戦で均衡を保った他、中央の政治情勢の変化に対応し、落ち目になった足利將軍との誼みを解消し、織田信長に接近した。十四代植宗、十五代晴宗、十六代輝宗と、三代続けて足利將軍から偏諱をもらってきた伊達氏にとっての方向転換といえる。

天正元年十月、使者を初めて織田弾正忠信長の許に遣わし、書信を通じて鷹を献上した。翌年二月、織田信長に派遣した使者が、信長の返書と祝弥三郎(織田家臣で伊達氏窓口)より執権遠藤元信に宛てた書状を持参して帰国した。

天正三年十月には、鷹師に馬や鷹を持たせて信長の許に遣わした。遠藤元信も書信を通じ黒毛一匹を献上した。十一月に使者は帰国した。信長からの返書とともに虎

皮五枚、豹皮五枚、段子(どんす)十巻、縮羅(しじら織)二十端の進物と、松井有閑からの書状を持参したと、返書の写しとともに「治家記録」に残されている。
天正五年五月にも「鷹を献上した、返書は伝わらず」との記述がある。

足利幕府に早くから見切りをつけ、織田信長の将来を買ってこれに接近した輝宗の眼力は、今日では大いに評価されるであろう。

また、この時代の輝宗公と徳川家康との交流についても触れておく。
天正七年七月、輝宗公三十六才のとき、徳川家康(三十七才)より初めて書状が到来した。九月に北条氏と同盟を結んでいるからその直前のことである。
輝宗公及び執権遠藤基信宛のものであった。去る天正五年の鷹献上のあと、徳川家康の鷹師中川某を下向させて鷹御用を学ばせた折に、遠藤基信が親切に取り持ち協力したことに対する返礼と今後の懇ろなお付き合いを願うというものであった。

遠藤基信は家康の名声が遠国に聞こえていることに鑑み、将来を見据えて鷹師中川某を懇切丁寧に応対した。既に織田信長と誼を通じていた伊達家にとり、徳川家康との鷹外交を発展させ広く天下の情報交換とより懇ろな誼を結べるよう、遠藤基信が画策したのであろう。

これが契機になり、十年後の政宗の時には今まで以上に懇ろな関係になっていた。
天正の末、秀吉の関東奥州の討伐、葛西大崎一揆掃討の頃には、徳川家康、前田利家、浅野長政らの旧織田家(秀吉政権)との関係にスムーズに移行できたのは、「是専ら基信、中川某を馳走するの事より起これり」と、「治家記録」は称賛している。

○政宗の誕生・元服・結婚

天正三年、茂庭綱元は二十七才で家督を相続した。
置賜郡川井村(米沢市)の川井城主として伊達輝宗に仕え、嗣子政宗の近侍となった。同年、片倉小十郎景綱十九才も、姉の喜多の引きで政宗の近侍となった。
片倉小十郎景綱の才能を見出したのは執権遠藤基信であるといわれている。

綱元は、川井村、鬼庭村(福島市飯坂茂庭)を合せて領し、知行は二百貫文(二千石)であった。この頃、まだ幼かった伊達政宗を置賜や茂庭の山野に誘っては鷹狩りを遊び、十八才も年下の若君養育で異母姉の喜多を助けていた。

天正七年

この年の冬、政宗は奥州三春城主田村大膳大夫清顕の長女愛姫を正室に迎え、祝宴の儀式をあげた。この時、政宗十三才、愛姫十一才であった。
政宗の養育係の喜多は嫁いできた正室の愛姫付きとなった。

ここで、伊達政宗の出生から元服までを簡単に触れておかねばならない。
政宗は永禄十年(1567)八月三日、伊達十六代輝宗の長男として生まれた。
『伊達治家記録』から引用すると、「八月三日午前八時頃、置賜郡長井莊米沢居城に於いて嗣君誕生。御母は北御方最上氏源義姫。実に是 伊達氏第十七世権中納言

従三位兼陸奥守政宗君なり。御童名は梵天丸。義姫は出羽国山形城主最上修理大夫殿源義守の女なり。今 御年二十。御乳付は廣田氏、増田摂津藤原貞隆の妻・・・」と。

母は輝宗の正室義姫といい、山形城主最上義守の娘である。
なお、義守の長男で義姫の兄が最上義光である。

政宗の誕生に関して伊達家に伝わる、政宗の幼名である梵天丸の名前の由来を伝えるエピソードがある。

義姫は「文武の才、忠孝の誉」ある男児の誕生を願い、信仰していた行者に湯殿山への祈祷を依頼したという。行者の長海上人は湯殿山にて祈願し、幣束を湯殿の湯に浸し、義姫の御寝所の屋根に安置させた。

その後で義姫は懐妊し男児を産み、梵天丸という名を授けたのは長海上人であるという。因みに、修験道では幣束のことを梵天と呼んでいる。
こういう出生のエピソードは、普通の子供とは生まれながらにして違うという伝説を生んだ。また、幼少時の政宗に影響を与えた人物としてふたりがいる。

ひとり守役の片倉小十郎景綱。

一緒にある寺を訪ねたときのこと、梵天丸五才の頃で生まれて初めて不動明王像を見た。「不動明王は仏か」と梵天丸は質問した。

梵天丸がそれまで見た仏はいずれも柔和な顔つきをしていたからであろう。

僧は梵天丸の質問の本質に気が付き、全ての仏が柔和な顔をしている訳ではないこと、世の中には悪人がいるのでそれを懲らしめるために不動明王のような恐ろしい顔をした仏もいることを説いたのであった。

話を聞き終えた梵天丸は「不動明王というのは、大名の手本になる仏だな。外には強く、内には優しくということか」といったという。

この通りのことを言ったかどうかは疑わしいが、政宗の非凡さを説明するために誇張した話かもしれない。

この片倉小十郎景綱の他にもう一人、虎哉宗乙という臨済宗妙心寺派の禅僧がいる。享禄三年(1530)、美濃国に生まれ、甲斐国で快川紹喜に師事した後、元亀三年(1572)に、政宗の父・伊達輝宗の叔父で伊達氏の菩提寺東昌寺(伊達郡)住職の大有康甫(政宗曾祖父・植宗の子)と親交があった縁から東昌寺に移り、輝宗の招聘を受けた。

一度は固辞したものの再度梵天丸の養育を懇願され、伊達郡から米沢に下り、近郊(山形県高畠町)の資福寺に入り、梵天丸の師となった人物である。

このとき虎哉宗乙は四十三才、梵天丸は六才で、以後、師弟関係は慶長十六年の宗乙の死去まで約四十年も続いた。

政宗は、仏教、漢学を学び、『六韜』や『三略』など兵書も学んだという。

なお、快川紹喜は天正十年(1582)に織田氏による焼き討ちに遭い、恵林寺において焼死したとき、「安禅不必須山水 滅却心頭火自涼」(安禅必ずしも山水を須(もち)い

ず 心頭滅却せば火も自づから涼し)の辞世を残したといわれている有名な禅僧である。

政宗の元服は天正五年(1577)十一月十五日、この年十一才であった。元服は普通十五才前後という通り相場よりもやや早く、しかも輝宗は梵天丸に政宗という名乗りを与えた。十一才で梵天丸という童名から政宗という諱(実名)を名乗らせたのである。なお、史料には「正宗」とするものもあるが、誤記であり「政宗」が正しい。

伊達氏歴代は、曾祖父植宗は十代将軍足利義植の“植”の字を、祖父晴宗は十二代将軍足利義晴の”晴“の字を、父輝宗は十三代将軍足利義輝の”輝“の偏諱をもらうことを常としてきたのであったが、すでに室町幕府は滅亡してしまっていた。

そこで父輝宗は、伊達氏中興の祖といわれる九代の政宗の名を襲名させることにしたのである。おそらく、それは、弟の竺丸(小次郎)擁立派への最後通牒の意味を持たせた、家督をめぐる内紛を終息させたいという輝宗の強烈なパンチだったのだ。

政宗の婚姻を「治家記録」は、天正七年のこととして次のように記している。

——此冬、奥州高野田村莊三春主田村大膳大夫殿坂上清顕ノ嫡女愛姫御入與御祝儀調エラル、板屋(谷)雪深キ故ニ、小坂路ヲ経テ到リ給フ、
愛姫御母ハ小高相馬殿顕胤ノ女ナリ、清顕御夫婦共ニ、植宗君ノ外孫ニシテ、愛姫ハ政宗君ノ再従兄妹ナリ。——

植宗の婚姻という外交政策の結果で、愛姫の両親は植宗君の外孫、つまり植宗の直系の曾孫に当る政宗と、外曾孫に当る愛姫との結婚であった。

田村氏は遠く平安時代に征夷大將軍として奥州に下った坂上田村麻呂を祖とする家系と云われている。田村領は東に相馬氏、南に石川氏、常陸の佐竹氏へと繋がり、西には二階堂氏、会津の葦名氏に続く仙道の要地に位置し、四方のこれら有力勢力や畠山義継、大内定綱など小豪族が田村領を狙っていた。

田村清顕は同盟を伊達氏に求め、一人娘を政宗に嫁がせようとしていたのである。

輝宗公は、仙道へ進出する第一歩として、この田村氏と手を結んだのであった。この頃、伊達領は、相馬・田村領のすぐ北の阿武隈川沿いの伊具郡(現在の宮城県南部)まで伸びており、角田城(角田市)、丸森城(伊具郡丸森町)などが、仙道への前線基地であった。

○綱元の米沢館山城出仕の頃

天正七年、綱元に二男が誕生、幼名を小源太、後に、主水良綱と称した。後の良元である。

天正九年(1581)、綱元は領地置賜郡川井より米沢の館山城へ出仕した。この頃、政宗は鷹狩りを始めていたらしく、綱元を召出して鷹狩りをするうちに「御獲多かりしとなり、この後段々鷹のこと御指南を受け玉ふ。君(綱元)は鷹のこと御巧者にて」

と、綱元は政宗の鷹狩りの指南役になったことを、『綱元君記録』は記している。

同五月、相馬義胤が亙理郡に戦闘を開始したので、輝宗は嗣子政宗とともに出陣した。政宗十四才での初陣であった。二本松城主畠山義継は輝宗の出馬を聞き援軍として馬上五十騎、足軽鉄砲百挺を出動させ、後に自身も陣所へお見舞いとして来陣した。後に馬脚を現わす伊達の仇敵畠山義継は風見鶏であったのである。

天正十年

五月、安土の織田信長を訪れていた徳川家康と、家臣の松平家忠とが音信を遣り取りした中に、伊達輝宗が信長公に「背丈が当時の普通の馬より一尺八分(三十二センチメートル)も高い、「浪かけ」と名付けられた馬を進上した」という噂が『松平家忠日記』に書き留められている。当時の馬の背丈の表し方は四尺(一二〇センチメートル)を標準とし、それより一寸(三センチメートル)高いものを「一キ」と表現するので、「丈十キ八分の馬」、即ち「丈五尺八分の大きな馬」であった。

輝宗は信長が武田氏を滅ぼしたことへの祝儀の意味で、大きな馬を進上したのであろう。天皇や将軍に珍しい動物を進上するのは以前から行われてきた慣習であり、輝宗の進上行為は信長を将軍同様に認識し、信長に従う意志を示したものであろう。また、平安時代から奥州は朝廷などに馬の献上を行なっており、その伝統を受け継ぎ輝宗が奥州の代表者であることを誇示するものでもあった。

これ以前にも、天正元年に鷹を献上して以来、三年、五年、七年と、信長に誼を通じていたことが『信長公記』、『伊達治家記録』などの記録に残っている。

この直後に起きた本能寺の変について「治家記録」は次のように触れている。「六月二日京都に於いて明智日向守光秀謀反し、前右大臣殿信長公及び其御子従三位左中将信忠卿を弑す。羽柴筑前守殿秀吉是を討し、同十四日光秀首を斬り、本能寺に曝すと云々。」

本能寺の変以後の政局に対して伊達輝宗は、十二月小田原城主北条氏政・氏直父子に使いを派遣し、遠藤基信も北条氏照へ書状を通じた。織田氏が滅亡したので、関東の雄北条氏と改めて関係を密にする必要を感じたのである。

書状には「信長公御生害以後、上方が騒動、諸国共に静まらず。故に北条殿と前々御懇切の因みを以って、以後の儀、御隔意なく互いに・・・」と、要請している。

天正十一年

三月、北条氏照より遠藤基信に書状が到来した。昨冬の伊達家からの書面の趣は北条家にとっても「本望である」として、伊達・北条両家は今後連絡を密にして無二の昵懇を重ねることを申し合わせた。この同盟は輝宗からの内意を申し送り北条氏と同意したもので、輝宗・基信の積極外交であった。

天正十二年

三月、北条陸奥守氏照より遠藤山城基信に書状あり。「一年余の御無音は特に問題がなかったからで、徳川家康と北条家の間が上手くいっており、上方のこと(織田政権の後の豊臣政権との関係)を、静謐に為すべく候」と結んでいる。

書中に「去年七月、家康姫君を北条氏政へ嫁した」縁組のことが記されていた。

十月、主君政宗は父輝宗から家督を相続した。

この時、政宗は十八才であり、父は四十一才とまだ隠居する年ではないと辞退したが、輝宗は頑として譲らず若い政宗を説得したのである。

輝宗は、二男小次郎を溺愛する母義姫が何を考えているか承知しており、家中が二つに分裂する前に家督をはっきりさせておく強い意思があったのだ。

義姫は、嫡男政宗が疱瘡を患い醜い顔になり、何かと暗い性格になっているのを厭い、二男小次郎に相続させたくて動いている雰囲気在家中に伝わり、家臣間で政宗派、小次郎派に分裂しかかっていた。家中が分断するのを何よりも避けるべく、輝宗は相続問題に蓋をしたのである。

この頃、後で伊達氏を悩ます二本松の畠山義継、塩松の大内定綱が伊達氏帰属を装って米沢城の輝宗・政宗に接触してきた。大内定綱は一旦伊達臣下に下ることを約束して塩松に帰ったが、それっきり米沢には顔をみせず葦名氏側に寝返った。

仙道の前線に構える大内定綱が葦名氏に付けば、その後ろには佐竹氏が控えており、伊達氏にとっては大きな脅威になる。

米沢城では、政宗が側近の片倉小十郎二十八才、伊達成実十七才、原田左馬助宗時二十才など若手の重臣たちを集め、父輝宗とその側近の遠藤基信といったごく限られた者だけで仙道方面の作戦について談合していた。

三 戦乱の世、政宗の領土拡張の野望

○人取橋の戦い

天正十三年(1585)

八月、家督を継いで一年弱の政宗十九才は、大内定綱勢が守る小手森城(二本松市東和町)を攻め、葦名・二階堂の援軍を含む相手に鉄砲八千挺を撃ちならし、城に籠もった女、子ども、犬までも撫で斬りしたが、大内定綱は脱出した後だった。

その後、伊達軍は小手森城周辺の小城、要地を一つひとつ落とし、月館城、岩角城、小浜城に入城し、塩松一帯の大内の領地を伊達領に帰属させた。

政宗は小浜城に入って二本松城主畠山義継に宣戦布告したが、狡猾な義継は名門畠山家の温存を狙い、輝宗に伊達家臣として畠山家の丸ごと召し抱えを願い出た。政宗はしぶしぶ義継帰属の条件を提示した。

義継はそれを受諾し十月八日、宮森城に居た輝宗に挨拶に訪れた。政宗は、狡猾で弁舌利口者の義継の顔など見たくないので近くの山野に鷹狩りに出かけていた。

挨拶に訪れた義継と輝宗との会話は弾まず、気まずいうちに帰り際、畠山義継は玄関まで送って出た輝宗を馬上に拉致するや二本松めざして走り去った。

成実、留守政景はじめ家臣は武具をつける暇もなく追跡したが、安達郡高田原に到り政宗も掛けつけたところで悲劇が起こった。

父を助けたい一心の政宗だったが、政宗軍の放った鉄砲玉に当たり義継もろとも輝宗まで打ち落とされてしまったのだ。

父輝宗の高田原における横死、いわゆる「栗の巢の変事」であった。

義継の遺体は政宗により斬り刻まれ、その上、藤蔓で繋ぎ合わせて無残に吊るされたという。

この悲劇は、父輝宗の口から「俺に構わず義継もろとも撃ち殺せ、奥州の覇権を取るのだ」との強い命令が発せられたとも、政宗軍の銃百挺に狙いを付けられた義継が輝宗と刺し違えて死んだとも云われているが、真相は分からない。

政宗は二本松城を落として父の仇を討ち、南に領地を拓ける基礎を築こうとした。十一月、政宗の南下政策を阻止しようとして三万余(実際は五千余)と云われる佐竹・葦名・岩城・石川・白川らの軍勢が石川郡須賀川に集結し安積郡に攻め入った。

政宗は七千余(実際は三千余)を率いて出陣し、安達郡本宮の観音堂山に本陣を敷いて北上する連合軍を迎え、十一月十七日、人取橋の激戦となった。

人取橋付近は、一大乱戦場となり、伊達軍はしばしば苦境に立ったが、遂に連合軍の突撃を阻止できた。仙台伊達家の浮沈を決する最も重大な戦いであった。

綱元の父良直は七十三才ですでに隠居の身であったが、手勢を率いて参陣した。老齢のため重い甲冑をつけず、水色の法被に黄綿帽子をかぶり、政宗から賜った金の采配を手に指揮に当たり、嫡男綱元とともに殿軍を務め首級二百を挙げ、主君政宗を逃がすために奮戦したが乱戦の中で父良直は討死した。

法名は「自光院殿劔外参心大居士」、墓は人取橋(安達郡本宮町青田原)の戦場跡にある。文政十八年(1828)に子孫によって建てられたものである。

この戦で討死した茂庭家の家来、今野彦次郎、弟の小三郎、舟生八郎左衛門の墓はその両側にある。

『茂庭氏記録』では、「敵は、余所は無視して、黄綿帽子だけを討ち取れと呼び合い、大勢が競って向かって来た。此に岩城の士卒窪田十郎某が打つ太刀が頭を切り付け、主君(良直)は痛手を負い落馬した。式部(鈴木重安)、源左衛門(早川景里)が

翔んできて十郎を討ち捕ろうと追いかけて、その隙に畑中新助儀定が主君を肩にお懸けし、草履取りの竹蔵がこれを補助して退く・・・」と記されている。

十七日の人取橋激戦の様を「治家記録」では次のように記している。
——観音堂山の本陣にいた茂庭綱元の父良直は士卒若干を率いて人取橋方面の視察に出かけ、荒井辺りで敵と遭遇し挑み戦ったが、大軍に押し立てられて人取橋に退却した。勇士十余騎がここで引き返して、敵中に突入したが、中村八郎右衛門盛時、大町清九郎高綱の二人のみが無事だったが、他は皆討ち取られた。

七十三才の左月良直は、そこらに散開している敗軍に下知し殿軍にて引退いた。左月良直は老齢だったので甲冑をつけず、黄綿帽子をかぶり敗軍を手足のごとく指揮した。敵は他人を目がけることなく、ただ、黄綿帽子を討ち取れといって、大勢が競って良直に襲い掛かり、遂にここに於いて討ち死にした。行年七十三才。従者は左月良直を肩に担いで退いた。この時、味方は百余名が戦死した。

連合軍は勝ちに乗じて観音堂山の本陣に向かって一斉に進撃してきたが、亘理父子(元宗・重宗)や留守政景・国分政重(のち盛重)らはいずれも突撃し、片倉・原田の隊も前進して人取橋付近は一大乱戦場となった。
伊達軍は度々苦境に立ったが、遂に連合軍の突撃を阻止した。しかし、大町三河・その子源四郎・布施備後・その子弥七郎らは討死した。

高倉城下を北進した連合軍は、小山に陣を取っていた伊達成実の陣地に襲いかかった。その頃は、人取橋付近も激戦で、本陣と成実隊との間が戦場になっていたの
で、孤立した成実は討死を覚悟して本陣方面からの敵陣に突入して奮戦した。
その隙をついて政宗を逃がすことができたといわれる。

そうこうしている内に人取橋方面の戦も終わったので、成実は人数をまとめて戦場を引き揚げた。政宗も岩角城に引き揚げ、人取橋の戦いは終わった。——

実はこの戦い、もし翌日に持ち越されていれば、伊達方はどうなっていたか分らない。三万余(実際は五千余)の連合軍と七千余(実際は三千余)とされる伊達軍の戦いで、十七日の戦さでの味方の損失と疲弊が影響し、只でさえ寡兵の政宗軍が勝っていたとは思えない。ところが、その夜のあいだに、伊達軍にとって予想もできない天の恵みというべきことが起きたのであった。

佐竹義重の陣に本国からの飛脚が思いがけない情報を持ち込んだのだ。
義重が出陣して留守中に、ライバルの水戸城・江戸重通が里見義頼と示し合わせて常陸に侵入し始めたというのであった。
これを聴いた義重はどれほど焦ったであろうか。

翌朝、夜明け前に佐竹軍は単独で兵をまとめて、本国常陸をめざして帰ってしまったのである。残された葦名、岩城・石川・白川氏らは狼狽して慌てふためき、てんでんばらばらに夫々の国に引き揚げってしまった。

この事情を政宗が知ったのは三日後のことであったという。

こうして政宗は、いわば「濡れ手で粟」のように九死に一生を得たのである。

「治家記録」は、「そうこうしている内に人取橋の戦も終わった」と、何事もなかったように記録しているが、政宗にとって実戦においては「生涯における最大の苦戦」と云われているのだが。

際どい合戦で敵の攻撃を何とか食い止め政宗を逃がすことができた伊達成実は、自身の著作『成実記』では、次のように記している。

——新井から進んできた敵と対陣していたが、味方は総くずれで成実の陣所の下を後方へと退却し、成実の隊はまったく孤立した。家来の下郡山内記というものが馬を乗りかけて来て「観音堂の本陣は崩れた。急ぎここを退却したまえ」と大声で叫びながら小旗を取って歩卒のものに渡した。

しかし、成実は内記から小旗を奪い返し「こうなったらたとえ退却したところで敗れることは同じだ。ここで討死するのが本望だ。退却はしないぞ。」と退かなかった。

この戦いは武分かれ(引き分け)に終わったが、一陣地も取られなかった。しかし、成実の家中の伊庭野遠江、北下野はじめ十四人が討死した。敵の首も九つ取った。——

伊達勢が総崩れする中で、成実ひとりがふみとどまって敵を退けた様子をよく描写している。

十倍近い敵を相手に激烈な戦いで一時は敗色濃厚となりながら、辛くも勝利したこの戦いのあと、岩角城に引き揚げた政宗が、山路淡路を使者に立て自筆の書状を以って伊達成実に与えた感状が『成実記』に載っている。

——抑て今日観音堂に於いて戦ひ、敵を後になし荒井より又観音堂へ助来りける大勢と、貴殿小勢を以て合戦に及び、比類なき処却て大利を得名誉の働き、又有間敷くと耳目を驚す、御辺一身の扱に依りて、諸軍助かり喜ぶこと斜ならず、尔と雖も家中に手負死人数多あるべきこと笑止の至りなり、明日は敵軍本宮へ近陣なすべき由其間あり、逆も彼地へ出られなば本望たるべし、伊達上野政景へも、其旨同意に申付候、十一月十七日亥の刻、成実参る政宗」、とぞ書かれける。——

要旨は、「今日の合戦は敵を後ろに廻した比類なきものであったが、敗軍しなかったことは前代未聞のことであり、その方の働きがなかったら味方に大勢の死傷者がでたことであったろう」と、政宗が伊達成実を褒めたたえている。

さて、戦況外の挿話をひとつ。

父を討ち取った敵の兵士に対する茂庭綱元のノーサイドの精神を伝える逸話が残されている。戦いの後、父である左月斎(茂庭良直)を討ち取った岩城氏家臣の窪田十郎が捕らえられると、綱元は「捕らわれながらもいささかも臆せぬ素振り、さすがは我が父を討ち取りし者よ」と感服し、「捕虜を切るは士道に背く、解放してやれ」と。

政宗には「解き放して戦場にてこの勇士を討ち取る機会をお与えくだされ」と願うと、政宗はその場で許したという。

呆然としていた窪田十郎はその場に平伏し、「伊達の御大将にお願いがござります。それがしをぜひとも、綱元殿の家来にしてくださりませ。この方のためなら、この命喜んで差し出しとうございます」と。以後、窪田十郎は綱元の家臣になった。彼は綱元の戦場に赴くところ、常に随従し武名を轟かせ、五千石を領したという。

人取橋での最後の迎撃戦で果敢に戦った成実軍は、伊庭野遠江広昌(家老職)、大町三河、布施備後など、多くの重臣、忠臣が落命した。

○綱元 奉行職に

天正十四年(1586)

綱元三十八才は、政宗公より奉行職を命ぜられた。

この頃、石見と改め、石見綱元と称した。

さて、茂庭綱元という人物であるが、『伊達治家記録』に現れるのは、これが初である。元禄十六年、四代綱村のとき、田辺稀賢により編纂完成したとされる、性山公(輝宗)、貞山公(政宗)、義山公(忠宗)の治家記録を精査したが、綱元奉行就任前の記事は見当たらなかった。本書で触れた出生、元服、結婚の記事は、『茂庭家記録』による。

『伊達治家記録』には、天正十四年の条に「此年鬼庭石見綱元ニ奉行職ヲ命セラル三十八歳。周防良直入道左月嫡子ナリ。凡奉行職ヲ命セラル、其歳月ヲ知ラサレハ不載者多シ」とあるから、奉行職を輩出する家の人間であっても、それ以前の個人情報 は藩の正式記録には載らないことが理解できる。

三月、政宗(二十才)は越後の上杉喜平次景勝(三十二才)へ書状を以って「今後、互いに仰合わせ(相談し合うこと)ができるように宜しくお願い申し上げる」旨を申し送った。十九日付けの景勝と家臣の直江兼続の両者より返状が届いた。

(初対面の)上杉景勝と政宗の年令差で、直ぐに返状があったことを考えると、人取橋合戦の情報が越後に伝わっていたとみられ、上杉氏にとって政宗は侮れない敵と映ったのであろう。返状の要旨は「その時々適切に連絡を保つという点では、忙しいため時機を失することがあろうが、相談し合うことは大慶に候」というものであった。

政宗は伊達十七代当主になって、輝宗・基信の外交を受けての初ヒットであった。

天正十八年の小田原参陣のとき、四月十五日に黒川を出発したが、北条領を通過できずに一旦黒川に戻り、五月九日黒川から上杉家の越後に入り、信濃、甲斐を経て六月五日に小田原に入ることができたという史実を思い起こすとき、政宗と上杉家の誼が生かされたというべきであろう。

この年、伊達軍は、人取橋の戦さでは辛うじて負けはしなかったが、政宗は今度こそ父の仇、名門畠山家を根絶やししたいと本気で計画し、四月に二本松城に攻め入った。予想以上に堅固な守りで、兵糧攻めしかあるまいと一旦は退いたのである。

相馬義胤は伊達成実の父実元を通して名門畠山の嗣子国王丸とその母の助命嘆願を申し入れて来ていたが、政宗は七月遂に受け入れた。

実元は義胤の大叔父に当たり、且つ実元の末妹が義胤の正室という姻戚関係があり、政宗にとっても大叔父の実元の立場を考慮せざるを得ないというよりは、奥州の覇者たるには「根絶やしするのではなく、人を生かして家を絶やす」選択が見えてきたのであった。

名門畠山家と婚姻関係があった伊達実元の立場を通して時代は変わり、奥州覇者としての伊達一族の隆盛を目指す方策を探っていた(対外担当)奉行茂庭綱元は、伊達、相馬、畠山のパワーバランスを熟慮して、主君政宗公に献策した結果なのであると推察される。

畠山の側では約束どおり、相馬義胤の斡旋により七月十六日、二本松城本丸に火を放ち、国王丸とその母、家臣らは会津の葦名氏を頼って落ちていった。

こうして、源姓足利氏の系統で名門二本松畠山氏は十五代義継で二本松の地から消えた。畠山氏は二本松城を無血開城したのである。

この時、葦名氏を頼った国王丸はその後、会津で元服して義綱と名乗った。天正十七年に葦名氏が政宗に摺上原の戦いに敗れて滅亡に追い込まれると、実家・佐竹氏の下へと逃れる葦名義広に同行して常陸国江戸崎に移ったが、同地で義広の命によって殺害され(佐竹領への敗走途中で足手まといで殺害とも)、ここに戦国大名二本松氏の嫡流は滅亡した。

戦後の論功行賞は、白石城主の白石宗実塩松を与え宮森城主に、畠山氏の居城であった二本松城には片倉景綱を城番に入れた。続いて、大森城にいた伊達成実に二本松三十三郷を与え二本松城主に、城番であった片倉景綱を大森城主とした。

政宗は八月上旬、米沢に戻り、郊外の資福寺の近くに覚範寺を建立した。資福寺の虎哉宗乙を開山とし、遺骨を資福寺から改葬して父輝宗の菩提寺とした。

輝宗が非業の最期を遂げた昨年十月、遺骸は資福寺虎哉和尚を導師として信夫郡佐原村(現福島市佐原)の寿徳寺で荼毘に付され、遺骨は長井莊夏刈(現高畠町)の資福寺に葬られていたのである。

この覚範寺は、政宗の移封に従い岩出山、仙台愛宕山を経て、現在地仙台市北山に移ったが、二度の全焼に遭い現在に至っている。

政宗公の母堂・保春院の墓と、三男で黒川城主・宗清公の供養塔がある。

この冬を迎える頃、仙道地方の情勢に新たな動きがあった。三春田村家当主及び会津葦名家当主の死亡による、両家の家督問題である。

一つは、嗣子ができないまま三春城主の田村清顕が死亡した。田村清顕は、一人娘の愛姫を伊達政宗の正室として嫁がせ、伊達氏の援軍を得ることで独立を保持していたが、当主の死により、その後釜をめぐって田村家中、及び伊達氏と清顕正室の実家である相馬氏の間で争いが起きた。

二つは、葦名家の嗣子で父・盛隆が黒川城内で暗殺されたため、わずか生後1ヶ月で当主になったこの年三才の亀王丸が突然疱瘡により死亡した。会津葦名氏の内部は、後継の嗣子をどこから迎えるか、伊達派と佐竹派に分かれて対立が浮かび上がって来た。伊達政宗の弟・小次郎派と佐竹義重の次男・義広派との対立である。

もともと葦名氏と伊達氏との関係は強く、政宗の曾祖父植宗の正室が葦名氏十五代盛舜の娘で、十六代盛氏の嫡男盛興が祖父晴宗の娘を迎えていた。血縁の濃さを重視する伊達派と、佐竹や越後の上杉を通して関白の威光にすがりたい佐竹派の葦名家内部の対立が顕著になって来た。

天正十五年(1587)

正月、政宗は米沢城で迎えた。年始めの慶事として何時の頃から始めたか不詳とした上で、政宗公二十一才の節目となるこの年、元日から十四日迄の慶事が「治家記録」に箇条書きされているので紹介する。鉄砲撃始め、法螺吹き始め、御野始め(狩の行事)、弓稽古始め、御連歌、心経会(除災招福)、御茶会、御談合始め、乱舞始め等々である。

政宗は田村氏、葦名氏の家督問題のその後が気がかりで、特に葦名と佐竹との間の養子取りの情報を気にしながら、政宗の弟小次郎十三才をいかにして葦名家の嗣子として押し込むか腐心していた。

小次郎が葦名氏を継げば、仙道は一気に安定し、すでに誼を交わしている相州小田原の北条氏とともに挟撃し、常陸の佐竹氏の野心を封じ込めできるのであった。

二月、佐竹側では義重二男の義広を、前年に三才で疱瘡により死去した亀王丸の異父姉に迎えて葦名氏の跡目相続させることが決定的になった。

即ち、葦名氏の二十代当主の座を巡り、伊達政宗の弟・小次郎と佐竹義重の次男・義広のいずれを養嗣子に押し込めるか、佐竹、伊達両家対抗の最終局面を迎えた。

葦名氏は伊達氏に対抗し続け、佐竹氏とは同盟したりして、圧倒的に佐竹派が多く義広を迎えようとした。結局、三月に義広は葦名氏二十代の家督を相続した。ここに至り政宗は、期を見て会津葦名氏を攻め滅ぼすことに思惑を固めた。

然し乍ら、政宗の周囲ではこの年、様々な重大事件が起こり、政宗は解決に奔走しなくてはならなかった。

その一、政宗の伯父に当たる最上義光(母義姫の兄)と大宝寺氏との不和に係る和睦斡旋である。

結局和睦になったが再び大宝寺氏を攻め当主を自殺に追い込んでしまったという、策士義光らしからぬ訳が分からない行動であった。

その二、重臣鮎貝宗重と嫡男宗信との不和の調停である。宗信は逃亡し、二男宗益が家督を継いだ。

「治家記録」は、「乱を武力鎮圧し鮎貝宗信を自落させた後、政宗は鮎貝日傾斎(宗重)の忠義の志に感謝し、柴田郡の内に采地を与え、二男の七郎宗益を家督に命じ、もとのように伊達家中では家格一家の上座においた」としている。

その三、最上と同族で陸前の大崎氏当主大崎義隆と重臣氏家弾正との不和を契機にした問題。この年、岩手沢城主であった氏家弾正は同じ大崎氏の家臣である新井田隆景と対立して、政宗と内通し始めた。政宗はこの大崎家内訌に介入して傘下に収めんと画策するようになる。

その四、政宗正室の実家田村家の後継家嗣の問題が起こった。重臣の間で伊達派と相馬派との対立が激しくなり、この機をとらえた佐竹義重連合軍勢(葦名、二階堂、白川)は、二万余で伊達方へ進出し、郡山城を包囲した。

一方、伊達軍は伊達成実・片倉小十郎の四千余の軍勢しか割けず対陣を続けざるを得なかった中で、戦鬪に至らぬまま岩城常隆、その伯父石川昭光の必死の和睦斡旋があり互いに兵を引いた。

調停した石川昭光からみれば、政宗、佐竹義広、岩城常隆の三人は甥に当たり、佐竹義重は妹婿であり、親族間の消耗戦ともいうべき無駄な出兵であった。

こうして、会津葦名氏との一大決戦に照準を当てた政宗であったが、これらの些末な問題に奔走せざるを得ない時期であった。

三月、茂庭石見綱元、松木伊勢に安積宿普請の使命が下り、半月後に帰城した。

この年、茂庭左月良直一周忌の頃に、政宗は先の人取橋での左月良直の討死を悼み、良直隠居分の知行を終生その妻へ与えたとの朱印状を与えた。「左月斎後家江」与えた朱印状が茂庭家に伝わっている。

九月、政宗は京都への使者伯蔵軒(氏不知)、道蝸斎(船生氏か)に関白殿への御口上を仰せ付け、御書、御馬等の進物を託して上らせた。関白への音信の始めであった。

天正十六年(1588)

伊達領の北に拠る旧奥州探題・大崎氏は、伊達氏から離反して独立する動きを見せていた。その大崎氏内部で、当主・義隆の寵童同士による争いが家中の内紛へと発展した。正月早々、重臣の岩手沢城主氏家弾正は政宗に援軍の派遣を要請した。大崎氏内紛の鎮圧という名目を得た政宗は、大崎方の本城である中新田城に向けて、留守政景・泉田重光を両将として五千の兵を差し向けた。兵が少ないうえ両将の意見が対立し、一致した作戦が取れなかったりして、二月の大雪も影響して敗退する結果となった。大崎での敗軍が聞こえると、大内定綱は伊達氏に帰服を求めていたにも拘わらず、葦名氏に加担して安達郡に侵入した。

しかも、最上義光が公然と大崎義隆を支援し、前年三月に家督を嗣いだばかりの葦名義広も義光と組み、政宗の動きを牽制するようになっていた。

こうして、最上義光－大崎義隆－葦名義広－佐竹義重(葦名義広の父)という、伊達政宗包囲網が出来上がっていた。

大崎攻めの失敗は、政宗にとって自らを苦境に立たせる結果となった。それまでの破竹の進撃と、急速な領国の拡大を見せつけられ、風になびくように政宗に服属していた諸豪族のうち、敵方に走る者が現れ始めたのである。

二月中旬、葦名義広は大内定綱を先鋒とする四千の兵を伊達領に進め、南方押さえの伊達成実が守る二本松城を攻めてきた。片倉景綱、白石宗実の援軍を合わせて六百余りで何とか耐えながら、成実は政宗の許しを得て「保原、懸田の所領を与える」という判物を以って、定綱の伊達家帰参を持ちかけた。

定綱は葦名家における旧佐竹家臣との待遇差に不満を抱いていたのか、成実の調略に応じて三月に伊達に帰参を認められた。

この時、定綱の弟・片平親綱は葦名の軍事圧力から伊達への帰参を見送った。

大内定綱は節操のない人間で、政宗は何度か煮え湯を飲まされており、一旦政宗に降参した後、父・義綱死没後に葦名氏側に走っていたのである。

以前の政宗であれば、このような無節操な男は殺すところであったが、殺さないばかりか、家臣に迎えているのである。「ひとを生かしてその資質を活かす」という言葉があるのか知らないが、政宗は自分と同質のところがある定綱の武将としての資質を見出し評価したのだろうか。

その後大内定綱は、摺上原の戦いや葛西大崎一揆鎮圧、文禄・慶長の役にも従軍して功績を上げた。天正十九年、政宗が岩出山城に転封されると、胆沢郡におよそ二十邑(一千石)の所領を与えられ、前沢城主となった。関ヶ原の戦いの折には京都伊達屋敷の留守居役を務めた。子の重綱の代にはこれらの功績により、一族の家格を与えられた。定綱の末裔は江戸時代を通して伊達氏の重臣として遇されている。

三月、関白殿へ遣わした使者伯蔵軒、道蝸斎が半年ぶりに京都より帰着した。関白並びに羽柴筑前前田利家からの返書・進物を持参して来た。関白の返書は伝わっていないが、利家から政宗への返書には、「貴殿の思召しは当方にとっても本望である。頂戴した黒毛黒駿の馬二頭は殊に見事で、私から関白にくれぐれも申し伝えた」由が記され、小袖五と鞍二口が進物として託された。

五月になって、大崎氏に肩入れした政宗の伯父最上義光と政宗が、最上・伊達領の境目にあたる中山(山形県上山市)で睨み合いが始まった。

そのとき突如、政宗の母・義姫が輿に乗って両軍の間に割って入って来たという。

「兄義光、子政宗が戦いをやめるまではここを動かない」と居座ってしまった。そして、八十日間、義光も政宗も折れて、戦いは回避されることになったという。

実家と婚家の争いを見事に調停したということで特筆されるが、向こう見ずというか政宗の気質に通じる母・義姫であった。

茂庭石見綱元は、この年不惑で、安達郡百目木城(現二本松市百目木字本館)を賜り、置賜郡川井から移った。

百目木城は磐城・相馬境の要地であり、知行高は加増されて五千石になった。

この年に、二男小源太(良綱、後に良元)十才を八幡藤八郎宗実の養子とし、いずれ宗実の息女に配して家を継がせる約定がなった。

政宗の周辺でまたも重大事件が起きた。

正室愛姫の実家である三春領田村家での事であった。

田村家の相馬派重臣による内紛で、清顕未亡人(相馬義胤の伯母で政宗正室愛姫の母)と組んで、相馬義胤を家督不在の三春城に迎え入れようとするものであった。

田村顕康の居城・宇津志に相馬氏の兵が攻めかけたとき、茂庭綱元は百目木から駆けつけ加勢に入り、相馬義胤の兵、馬上の四騎を討ち落とし首級を献上したとある。「治家記録」六月二十日の条による。これは、「治家記録」に記載された綱元の数少ない武勇の最初であろうか。その後も、田村領から相馬への道で草調議(境界線での小競り合い)し、討ち捕らえた首二級を献上している。

八月、政宗は三春城に乗り込み、清顕未亡人を隠居させ家中相馬派の三春城への出仕を禁じ、清顕の甥(孫七郎)に宗の字を与え宗顕と名乗らせ三春城主に据えた。宗顕の父は清顕と同母の弟であるため、宗顕も伊達氏の血を引いていることになる。こうして田村の家は伊達一色となり、政宗の支配下に入った。

政宗は周囲で起きた事件を次々と処理し、その目は会津葦名氏に照準が絞られていった。

九月、家康より政宗に音信があり、縮羅三十端が贈られた。「是 公御代に至りて初めての御音信なり。御書伝わらず。」と記録されている。十年前の天正七年に、政宗の意を受けて遠藤基信が家康に書を送って以来の初めての家康の書状だけに、「記録」に収録されていないのは残念である。

綱元が奉行を命ぜられて以降、出先の城(この頃は安達郡百目木城)に居ることが多く、政宗の奉行として談合・評定の場に綱元の名が久々に見える。

一方、中央の政局も大きく動いた。

この年、四月、後陽成天皇の聚楽第行幸が実現し、豊臣秀吉は徳川家康や織田信雄ら有力大名に自身への忠誠を誓わせた。

同年には刀狩令や海賊停止令を發布、全国的に施行した。

関白秀吉の天下統一は、関東北条氏、奥羽の諸大名を残すのみとなった。

前田利家らは、関白にまだ伺候しようとしないう政宗に頻りに上洛を促す書状を送り付けていた。

私見であるが、政宗が上洛を拒み続ければ秀吉の怒りは爆発し政宗の領地没収、即ち、前田らの領地拡大につながるチャンスもあるというこの時代、政宗に頻りに上洛を促したことは、単に政宗と懇意の関係だったことから発したとは思えない。

冷静に考えれば、政宗は関白と利家に音信・音物を送り始めた時期であり、利家らの武将としての同じ琴線に触れあい、近い将来の天下統一と静謐の実現を異榻^{いとう}同夢(同床異夢の対義語)で目指していたと想像するのは甘い期待であろうか。

○会津摺上原の戦い、葦名氏の滅亡

天正十七年(1589)

この年、綱元に三男誕生、正次郎、後に実元と称した。

二月、政宗は米沢で「落馬し左足を骨折し療養に入った」と、「治家記録」にある。米沢の谷地小路という米沢城に近いところでの出来事らしいのだが、仔細は不明。「晩、谷地小路へ乗馬で出かけ、馬が俄かに驚き立ったので、政宗は飛び降りたが少し御足を傷いたまう」と、簡単な記述がある。なお、昭和四十九年に政宗の遺骨を調査したときに左足腓骨の骨折跡が確認されているので、左足の骨折事故は確かである。

この頃、大内定綱は、弟・片平親綱の政宗への帰参願いを伊達成実^{い達成実}に打診してきた。昨年三月に葦名の圧力で一旦は帰参を見送った親綱の帰参の打診である。三月四日、会津黒川城留守居の新田左衛門義綱は当事者大内定綱を伴い米沢城に参上し、弟・片平親綱の奉公に当っての起請文を奉じて誓約した。

伊達成実、片倉小十郎は、片平の内応により安積から猪苗代に通じる道が開けるので、片平城が戦略上会津攻めには好都合になるとの判断で、彼らの帰参受け入れを政宗に進言した。

大内、片平兄弟には散々煮え湯を吞まされてきた政宗は、伊達成実、茂庭石見綱元、七宮伯耆、原田左馬助宗時、片倉小十郎景綱を加えて談合した。結局、この談合で大内・片平の兄弟は臣下に下ることを許され、来る葦名・佐竹連合軍との摺上原の戦いでは、その武功を立てるべく左翼・右翼を務めることになる。

三月二十七日、湯治として置賜上長井荘の小野川(現在も温泉地)に出かけた。小梁川泥蟠斎、伯蔵軒ら長老をお供にし、御不断組の鉄砲訓練を見学した。翌日は、旅亭にて新田左衛門義綱の饗膳を囲んだ。原田左馬助宗時、遠藤文七郎宗信らも加わり、お供した輩の全員が饗膳に預かったとの記録がある。

四月二十一日、政宗骨折は全快とはいえなかったが、米沢を出発し、二十二日、信夫郡大森城に着いた。葦名・佐竹連合軍との合戦の始まりである。

二十七日、政宗は伊達成実に申し付け片平親綱を同道させて初めて接見した。翌日は、飯坂温泉より運んで温めた痛み治療の湯でいっときを慰めている。五月三日、本宮着。四日、阿古島落城、五日、高玉落城と、軍を進めた。

十七日、佐竹義重・葦名義広父子が須賀川に入り、田村領に押し寄せたとの知らせがあった。

政宗は、葦名方攻略から反転して相馬方へ攻め入り、十八日、十九日と、相馬領の新地、駒ヶ嶺の両城を落とし、翌日は、伊達美濃重宗の領地亘理郡に移り、「俄かの小屋を立て、海に数多の漁り舟を浮かべ、網をおろして魚をとり、軍勢を慰め奉る(伊達便覧誌)」と、余裕の政宗であった。

一方、田村領に侵入した佐竹軍には、伊達軍の信夫・刈田・柴田の大兵を対峙させ、成実、景綱を猪苗代城に派遣し、敵情の偵察、戦略の策定を命じた。

葦名氏家臣の猪苗代盛国は、嫡男盛胤に譲ったはずの猪苗代城ごと伊達氏に寝返り、政宗軍は本宮から会津への道を確保し、猪苗代城に入ることができたのである。

六月三日、葦名義広が黒川城に入ったとの知らせがあった。
伊達成実、片倉景綱は、戦場偵察に摺上原に出た。敵兵が家を焼き払っていたが、二人を見て慌てて引き上げていったという。
政宗は、阿古島城から夜を徹して馬を走らせ、四日未明には猪苗代城に着いた。

明くる五日、猪苗代城において老臣を集めて軍議を開き、次の軍立てを整えた(伊達便覧誌巻七)。

案内者 猪苗代弾正盛国、二番手 片倉小十郎景綱、三番手 伊達安房成実、四番手 白石若狭宗実、五番手 大将政宗と旗本、六番手 浜田伊豆宗信、左軍 大内備前定綱、右軍 片平親綱。総勢二万三千余で本陣を八ヶ森に敷いた。

対する葦名・佐竹連合軍は、富田将監(兵五百)を先鋒に、佐瀬種常、松本源兵衛、佐瀬常雄ら、総勢一万六千余で高森山に本陣を敷いた。

伊達軍の第一陣は猪苗代盛国、第二陣は伊達成実と片倉景綱、第三陣は片平親綱、後藤信康、石母田景頼、第四陣は屋代景頼、白石宗実、浜田景隆、鬼庭綱元ら、とする説もある。

南奥州の覇権をかけて雌雄を決する戦いは、猪苗代湖の北岸、磐梯山の裾野である摺上原で行われた。

開戦当初は西からの烈風が追い風となり、また先鋒・富田将監隆実の活躍もあって、葦名軍が有利に戦っていた。

暫くして正午を過ぎ風向きが東風に変わった頃、成実は突出した敵の側面を強襲して序盤の劣勢を跳ね返し、伊達軍が逆に圧倒し始め、葦名・佐竹連合軍の遁走・退却を誘い、葦名軍は総崩れとなった。

遁走する葦名軍は日橋川に架かる橋の破壊(猪苗代盛国の工作)によって黒川城への帰還を妨げられ溺死者を多く出した。

黒川城を包囲された葦名軍は、城内の伊達派の重臣は降伏し、葦名義広は実家である佐竹氏を頼って常陸国へ敗走した。

ここに、室町時代には京都扶持衆として、自らを「会津守護」と称していた三浦義明の子義連を祖とする名門葦名氏は、二十代にわたる四百年の歴史の幕を閉じ、累代の所領悉く皆、政宗の掌中に移ったのである。

六月十一日、伊達軍は辛くも勝利して三橋の陣所より会津黒川城に入城した。

そのとき、小雨が降っていたという。政宗の一族亙理重宗(亙理城主)が、

——音もせで茅野の夜の時雨来て袖にさんさと濡れかかるらん——

と即興で歌った。これが東北民謡として有名な「さんさ時雨」の元歌になったと言われている。結婚式などのお目出たい席で歌われることが多いが、伊達軍の勝利の喜びと感慨が込められていた。

余談であるが、旧葦名氏家臣で生き残った子孫が多い地域では、結婚式などのお目出たい席でも絶対に「さんさ時雨」を歌わないところがあったという。

六月十八日から三日間は、家臣への屋敷配当の吟味を行い、米沢から会津黒川に根拠地を移そうとする下準備を行なった。葦名氏を滅亡させたあとの政宗は、旧葦名重臣で帰服した者を饗応し安心させ、反抗する者は武力で制圧し、会津・越後の境には後藤孫兵衛信康を派遣し仕置させ、関白秀吉とその側近には会津攻略の事情を説明する使者や書状を送り、細かな配慮を巡らしていた。

こうして政宗は、現在の福島県の殆ど、山形県と岩手県の一部を領する、全国でも屈指の戦国大名領を成立させた。政宗はまだ二十三才の若さであった。

七月三日の晩に関白秀吉の使者として上郡山右近丞仲為が参着した。

関白より政宗宛の御朱印状(治家記録には伝わっていない)を持参した。

治家記録には「政宗の会津攻略について、隣国の上杉景勝から秀吉に注進があり、関白は政宗個人の恨みから一戦に及んだと断じ、惣無事令の威信を傷つけたものとして政宗を非難した上で、仲為に真相を聞き届けさせるために下向を命じた云々。政宗公の御請(返答)、仲為の帰京日は不知」とある。

上郡山氏は伊達の庶流の者で、仲為は伊達氏から京都に派遣されていた者が、秀吉に召出され秀吉の使者として今回帰国したのであろうと、上郡山氏を描写している。

この頃、小田原参陣を督促する秀吉に政宗は鷹を献上し、返礼として秀吉は名刀「鉏^{はばき}国行」を贈ったとされる。秀吉は政宗が飼っていた鷹が目赤鶴を捕まえたという話を聞いて秀吉がその鷹を所望したことから、政宗は獲物の鶴とともに鷹を贈ったという。この名刀は鎌倉時代後期、山城国来派の実質的な祖である刀工・来国行によって作られた刀であり、政宗は本作を大いに気に入り、登城時の差料として用いていたと伝わる。

この名刀は秀吉から下賜された際の礼状とともに仙台市博物館にて収蔵されている。

黒川城に入城して一段落した七月七夕の夕べ、「唐人三人が参上し政宗公に拝謁。花火を揚げて見せ、その後、謳歌す。」という記述がある(治家記録)。

七月十六日、遠藤若狭不入斎(彦兵衛)が京都から帰着し、関白の怒りの様を知るようになった。二十六日には関白の使者伴清三郎が下着し富田知信の書状を持参して来た。

八月十四日、京都に派遣していた修験年行司良覚院栄真が帰国し、前田利家・施薬院全宗の返信・書状を持参した。

富田知信・前田利家・施薬院からの書信の趣は「葦名家を討ち滅ぼし会津に移住するのは関白殿御前宜しからず」として釈明を求めたものであった。

ここに至るまで、秀吉の詰問を受けるまえに会津攻略の弁明をするため、伊達家譜代の良覚院栄真を京都に派遣し、富田知信、前田利家、施薬院全宗を介して「会津葦名方年来ノ御意趣ニ依リテ攻メ取り玉フ」として、年来の奥州探題としての権限で葦名氏を攻めたにすぎないと主張したのであったが、到底納得されないものだった。

そこで、政宗は片倉以休斎景親・遠藤下総(諱不知)入道不入斎(彦兵衛)・原田旧拙斎らを召出し、京都への返答に関して合議を行い、関白への釈明使者として遠藤不入斎を立て、十七日に出発させた。

注)遠藤不入斎は、「記録」には遠藤若狭不入斎(彦兵衛)、遠藤下総不入斎(彦兵衛)、遠藤下総(諱不知)入道不入斎(彦兵衛)と異なる表記が見られるが、通称彦兵衛が共通なので同一の人物である。他に書物を調べたが、人物を特定できない。

天正十三年に輝宗公に殉死した遠藤不入斎基信とは全くの別人である。

政宗は秀吉の怒りを解く努力をする一方、佐竹氏の強敵北条氏とも連絡を取り、使僧を派遣していたが、八月二十九日、北条氏照の返書を持って帰国した。南北から佐竹氏を挟撃する提案に賛同するものであった。政宗にとっては、佐竹氏攻略は秀吉の奥州統一に貢献することでもあったと考えていた節がある。

軍勢を関東に繰り出すには会津から仙道に出る咽喉部に位置する二階堂氏が邪魔であった。二階堂当主盛義が没した後、室で政宗伯母の伊達氏が政を執っていた。この後、室は和順を拒否したので戦闘に及んだが、遂に須賀川城を攻略され十月末に落城した。伊達夫人は、甥の岩城常隆に保護を求めて生き永らえた。

九月に入り、上郡山右近丞仲為より、彼が帰京後に浅野弾正小弼長吉に差し出した覚書写しなどを送ってきた。政宗の会津攻略について、「一、葦名氏は輝宗の時代に政宗弟を会津の嗣子とする約束を堅く取り交わしておきながら、これを反故にして佐竹義重二男を入嗣させ、そのうえ奥州・出羽・関東諸将の軍勢まで引き出し連合して、伊達を討ち果たそうと計略した。葦名との争いは今に始まったことではなく、今回これを討滅したに過ぎない。二、奥州五十四郡のことは前代から探題として伊達が取り仕切ってきたので、是を守護するのは伊達の任務であり、政宗はこの任務のために行動してきたのである。」これが政宗の釈明の根拠であった。

また、同封された和久又兵衛宗是の書状によれば、京都で奥州仕置の担当者であった浅野長吉らが、政宗を秀吉の立腹から救うため奔走してくれている様が述べられていた。

年末迄に関係各氏から九通の書状が届いたが、関白が政宗の言い分を認めた情報は一切なかった。

富田左近、浅野弾正より伊達左京大夫宛の十一月十日付け書状では、「会津侵攻は関白の立腹以外の何ものではない。葦名義広の会津支配は関白の上意であり、会津のことを葦名に申し付けた以上、政宗の存念だけを聞いて判断できない。双方の申し分を聞いて、誰に会津の支配を仰せ付けるかを決定したいというのが関白の御意である」として、いわば「会津は関白が葦名に安堵したもの」という理を引き出して意見している。

同じ廿日付け、関白の祐筆・和久又兵衛宗是、上郡山仲為連名の書状(片倉小十郎ら三名宛て)では、「小田原北条氏の上洛違約に対し秀吉が激怒している。会津のことなど二の次になっているこの機会を逸せず使者をおくり、政宗公の御書を奉じ上洛すべし」と懇切に薦めている。

天正十七年末までに関白秀吉からの沙汰は決まらず問題は越年することになった。一方、家臣に対する論功行賞であるが、政宗に内通した猪苗代盛国が軍功顕著につき五百貫文の地が加増され、「準一家」の家格を許された。

重臣たちの配置替えも行われた。

政宗自身が米沢城から黒川城に入ったので、米沢城には一族の伊達宗清(植宗八男)が留守居として入るなど、若干の手直しが行われた。

ここで、この合戦を総括してみる。

伊達政宗は人取橋の戦い以降、葦名氏・佐竹氏との対決姿勢を強めながら、仙道筋(現在の福島県中通り)で勢力を拡大しつつあった。

一方、それに対する葦名氏・佐竹氏の危機感が高まっていた。

政宗は葦名氏の本拠会津を奪うべく行動を開始した。

だがそれは豊臣秀吉が出した「惣無事令」を無視する行動であった。

政宗は猪苗代盛国の内通で本宮から会津への道を確保すると猪苗代城を拠点にし、一方の葦名義広は須賀川城から猪苗代湖南岸を進み、軍を黒川城へ集結させた。

高森山に布陣した葦名勢は民家に火を放ち伊達勢を挑発した。

伊達軍は二万一千人、葦名軍は一万八千人とほぼ互角であった。

しかしながら葦名軍には葦名盛氏の死去以来主家に不満を持つ者、伊達氏に内通する者、佐竹氏より送り込まれた当主・葦名義広に対し不満を抱く者などがおり、その様々な思惑から団結力に乏しかったことから、葦名軍は最後には内部から瓦解し黒川城を開城したのである。

四 豊臣政権との対峙

○秀吉に睨まれた政宗

政宗が昨年六月に宿敵葦名氏を滅亡に追い込んだとき、秀吉の天下統一は完成一步手前にあり、秀吉は葦名氏攻略を非難する書状、「大名同士が戦い合うのは、今後私戦として禁止する」という、いわゆる「私戦禁止令」を政宗の許に届けたという(歴史学者藤木久志氏)。伊達氏は近視眼的に奥州で版図を拡げるのではなく、中央の政局を見据えて政宗の父輝宗が織田信長に鷹を贈ったりして誼を通じていたことは、『信長公記』の天正五年七月三日の条に「奥羽の伊達輝宗が鷹を献上してきた」(新人物文庫、文庫版現代語訳、二百九十二頁)とある。

政宗もその外交姿勢は継いでおり、『伊達天正日記』の天正十五年八月には、関白殿へ奥州産の名馬を贈ったことが記されている。

政宗が秀吉に睨まれたのは、「私戦禁止令」を無視して領土を拡大していったからだと云われている。いったい、「令」の形をとって発令されたものか調べると、「惣無事はあれども、惣無事令はなし」という、京都大学藤井教授の論文(平成二十二年、「学術情報リポジトリ 史林 九十三巻三号」)に巡り合った。

惣無事令は、天正十三年十月に九州地方、同十五年十二月に関東・奥羽地方に向けて制定(発令が正しいと思う)されたとする藤木久志氏の提唱(豊臣平和令)になるものである。が、天皇の命令(勅定)若しくは関白の命令という形をとったのではなく、個別の書状の形で個別の相手方に発令されたものであって、厳密に言えば正規の「惣無事令」の制定とは言い難いものである。「惣無事令の発令」は、九州征伐や小田原征伐の大義名分を与えた、と筆者は理解することにした。

例えば、秀吉が政宗の重臣片倉小十郎景綱に宛てた、十二月三日付けの書状があり、宛名は景綱だが、実質的には政宗宛であろう。

——富田左近将監に対する書状披見し候、関東惣無事の儀、今度家康に仰せ付けられ候の条、其の段相達すべく候、若し相背く輩これ有るにおいては、成敗を加うべく候間、其の意を得べく候也、

十二月三日 秀吉(花押) 片倉小十郎とのへ

書状に年号はないが、仙台藩では天正十八年と考えている。

しかるに、藤木久志氏は天正十五年と推定している。何故ならば、次の佐竹氏家臣の多賀谷修理重経宛の文面と比較すると、日付は同じ十二月三日、殆ど同じ文章構造であり、その発給年代を天正十五年とした上で、これら秀吉直書の要旨を仮に惣無事令と略称し、停戦命令としての独自の意義を持たせた藤木氏の提案である。

——石田治部少輔に対する……………、関東奥両国迄惣無事の儀、今度………、異儀有るべからず候、若し……………、成敗命すべき候、

猶治部少輔申すべき候也、

十二月三日 秀吉(花押) 多賀谷修理進とのへ

——

難しいことを抜きにして、「豊臣政権のもとでは、許可なく領地の取り合いの合戦をやってはならない。関東と奥州の両国(陸奥・出羽)に「惣無事」を命ずる」ということを、天正十五年頃に秀吉は個別の書状で命じているのであると理解して先に進む。

かくして、天正十七年六月の政宗の摺上原での葦名氏討伐は「惣無事」違反として、厳しく糾弾されることになるのである。

○小田原参陣

天正十八年(1590)

正月、「昨年は仙道を考えたそのままに退治し、まずは慶賀あるべき春なれば」と、「若松黒川城での初めての年始の儀式を行なった。七日の御連歌の会、十一日の御事始め、十四日の歌謡儀式、……」と例年通りの儀式に加えて、「今年は、会津仙道の人々、新規に党参の方々、予想以上に多い方々が宴席に招かれて、密かに楚を奏し、越を吟ずる人もあり、……、賤しくも、先君葦名盛氏の庇護も忘れて余りのハシャギように、眉をしかめる者も多かった」と、儀式を描写している(「治家記録」)。

連歌の会では、政宗は昨年仙道七郡を手に入れた喜びを込めて「七種ヲ一葉ニヨセテ摘む根芹」と発句した。

二月十四日、昨夏に釈明のため京に派遣されていた遠藤不入斎が帰国した。葦名問題に対する秀吉の怒りは、利家・長政らの執り成しで一応おさまったが、秀吉の小田原動座は三月なので、その前に上洛するのがよいといって来た。

更に、良覚院栄真が持参した利家書状には「秀吉の小田原討伐軍は東海道は徳川家康を先手として五日に京を出発し、利家の北陸軍は廿日に出発する。

政宗にとり絶好の機会であるから、会津口から下野に出馬し、我らと協同して忠勤することが肝要である」と、忠告してきた。

先年末に後北条氏に宣戦布告状を送っていた秀吉が、三万二千の直属軍を率いて京都聚楽第を出発したのは三月一日であった。

政宗が秀吉から小田原参陣を命じられた後で、浅野長政、前田利家、和久宗是など政宗と親しい秀吉側近衆からは度々書状を以って参陣を促された。

二月付けの書状で三月までに会津黒川城で受け取ったのは「治家記録」によると、凡そ四通が確認されている。

浅野長政書状には、「秀吉殿は会津のことは不問に付す、すぐ小田原へ参陣するがよい」とあり、二十万ともいわれる大軍を擁しているという情報を掴んでいた政宗は、と

でもそんな大軍と戦う戦力をもたないながらも悩んだ末に、三月末、小田原参陣の態度を表明した。

四月一日、黒川城に重臣を集めて評定を行った。

評定場で、伊達藤五郎成実は開口一番主戦論を展開し、国分盛重が反論した。一族長老は参陣派(片倉景綱・茂庭綱元・原田宗時・白石宗実など)、若い側近派は主戦派に分かれた。

政宗は熟考し、いよいよ限界であることを悟り、小田原参陣に向け六日に出発することに決した。参陣を伝える使者として守屋守柏斎と小関重安の二人を遣わした。

出発前夜の五日、母の馳走に応じた政宗は毒を盛られて嘔吐し、自ら解毒することで、二、三日床に就いただけで回復した(様々な異説あり)。

母方が弟小次郎を家督に立てんとする意志が強いことを察し、このままでは伊達家の安泰に支障ありとした政宗は、涙を吞んで罪のない小次郎を手にかけた。

小次郎は騒がず、従容として従ったという。

「治家記録」では弟小次郎殺害を、「七日戊寅。公弟小次郎殿ヲ殺シ給フ。一昨日西館ニテ毒殺ヲ謀ル何者ノ所為ナリト糾察セラル。御母公ノ命ナル由ヲ白状ス。是小次郎殿ヲ御家督ニ立テ給フヘキ御謀ナリト云々。……御母公ノ事ハ兎角ニ計ラヒ給フヘキ様ナシト仰セラレ、小次郎殿ヲ御前ヘ呼ヒ給ヒテ…即チ御手撃ニ為シ玉フト云フ。」と、誰を糾弾して白状を得たのか触れずに曖昧に記述している。

また、異説(或記ニ云ク)として、政宗は近臣の屋代勘解由らを連れただけで、小次郎の守役筆頭の小原縫殿之助の屋敷に出かけた。

呼ばれて部屋に入ってきた小次郎が正座し挨拶を始めたところ、政宗は立ち上がりざまに切りつけ二太刀で刺し倒し、小原縫殿之助をも成敗したという。

その後、仕切り直して参陣すべきか、数次に亘り一族で協議した。

「ハエは追い払っても、すぐにまとわり付くもの」との小十郎の一言で、政宗は参陣を決意した。遅れることひと月、片倉小十郎、白石安綱、高野親兼、片倉意休斎(片倉景綱の伯父)など重臣十名に、会津・磐城の降臣おおよそ百騎を従えて五月九日に会津を出発した。

留守中の領国警固に会津黒川城に伊達藤五郎成実を残し一切の後事を託した。伊達成実が武の留守居、茂庭綱元は国家老としての留守居という体制であった。譜代の家臣大部分を残したことで、万が一の場合には、成実に思う存分に秀吉と戦って「奥羽の覇者」たる伊達の名誉を守って欲しいとの思いがあったのだ。

会津の南山大内宿以降の街道は敵地で交通が遮断され、若松に一旦戻り、越後、信濃、甲斐を經由し、六月五日、小田原に参着した。

その後は、幽閉地のような底倉という山中で待機させられた。

関白の口から発せられる言葉はおそらく「生か死か」の何れでしかない。

こんな中で、平然と座禅三昧に終始した政宗の落ち着きぶりに、小十郎は不気味な思いにとらわれた。

二日後、秀吉は、前田利家、浅野長政、施薬院全宗ら五人の詰問使を底倉の政宗の許に遣わした。詰問使は、

「上洛御礼言上が遅れたのは何故か」

「秀吉麾下の輩名氏を討伐したのはどうしてか」

「なぜ親類である諸家と戦うのか」

といったことを詰問した。

政宗はすでに書状で申し開きしているので、一つ一つ丁寧に申し開きしている。詰問使からの報告を聞いた秀吉は、会津攻めより以前のことは不問に付すこととし、会津攻めの罪を責める態度に決め、その結果、会津、岩瀬、安積の三郡を没収することになった。

秀吉が本領に加え、二本松、塩松を安堵した背景には、秀吉が政宗の器量を見抜いたことが挙げられる。その一例が、底倉に幽閉中、政宗から前田利家に「千利休殿に茶の湯の教授を受けたい」と依頼した件である。危機に臨み、そのような申し出をする度量の大きさ、田舎育ちに似ぬ風雅の心を誉め、死一等を減じたのである。

詰問使のメンバーとは近親の仲であり、書状の遣り取りを行なっていたこと、度々の贈り物によって心証をよくしていたことも幸いした。

政宗は九日になって、やっと陣所普請場に召された。

政宗以下、片倉小十郎景綱、白石安綱、高野親兼、片倉以休斎ら側近五人、揃って出頭せよとの命が下った。

政宗は死に装束(白麻の陣羽織)に髻を解き、水引で髪を後ろに一つに結び、異様ないでたちで臨んだ。既に死を覚悟しているとの意思表示でもあるのか、側近たちでも息を呑むありさまであった。

この時秀吉は曲げ縁に腰をかけ、家康が側に伺候し前田利家らが列座した。

政宗は秀吉の前に膝行して深々と頭を下げた。

秀吉は手にした杖で政宗の首筋をトントンと叩き、「さてもその方は愛い奴だ。良いときに参った。いま少し遅くきたならばここが危なかった」と甲高い声で言い、くると背を向けて自分の後ろに付いてこいと、すたすた歩き始めた。

眼下に小田原城が見渡せる場所に案内し、陣立てを説明し、「明日、そなたに茶を進ぜよう」、事も無げに秀吉は言った。

翌日、秀吉自身が亭主を務め、寸分のよどみもなく、ごく自然な緩急のあるお点前に、政宗は目を見張らせた。

茶席を終える寸前に、秀吉の口から直接に、「本領米沢三十万石は安堵する。

会津と安積、岩瀬は召し上げ、黒川城から即刻退去せよ」との申し渡しがあった。

会津など新たに取り入れた仙道地方を召し上げられたが、何とか命は許されたのであった。

政宗の関白秀吉に対する応対は、「流れのごとく、気後れすることなく実に優れて見えたので、秀吉始め列侯も、あっぱれ真の雄飛かな」と、皆、感嘆したとか。

秀吉は、かくも遅れて参陣しながら堂々と対応する度胸、茶の湯を求める風雅の心も有している若い政宗に、人物、その器量を認めて許したのであろうか。
いや、それだけではない、これからの奥羽平定に政宗の力を利用したいとの思惑があったのだ。だからこそ、度重なる上洛要請の拒否、小田原参陣遅れを不問にして会津領の接收だけに留めたのであろう。

一方、秀吉謁見前の政宗の心の迷いを、天正十八年六月九日付け、茂庭石見綱元宛の手紙(亙理家文書)に見い出せる。

「関白とのことさえうまくいけば一無事に済めば一、他にはもう何も心配はないのだが。もし、関白と行き違いがあれば、切腹は免れまい。勿論、関白に対し討死、切腹は本望である。只々、明けても暮れても、このことで頭が一杯だ」と。

綱元は、二十四才に似合わず肝が据わった主君政宗の達観ぶりに目を細めたであろう。なおこの年、綱元は政宗より十八才年長の四十二才であった。

同日付けの会津黒川留守居の伊達藤五郎成実宛の、秀吉謁見後の政宗の報告とされる書状がある(『伊達政宗の手紙』より)。

政宗の、謁見前の緊張した段階での石見綱元への心情吐露と、謁見後の最悪の結果を免れた成実への吐露との対比から、政宗の心情の変化を読み取るべく、長くなるが全文を以下に現代語訳で記す。

——今日九日巳の刻(午前十時頃)関白様の元へ伺候したが、事が全てうまく進んで何も言うことはない。関白様直々のご懇意は、言葉には言い表せない程である。とてもこれほどまで懇切なもてなしを受けようとは、そなたも想像できなかったであろう。よって、明日十日は茶の湯に招待され、明々後日は黒川へ帰国を許されることになった。奥州五十四郡の仕置も、大方こちらの希望通りに調いそうである。皆もきっと満足するであろう。この手紙の写しを、方々の関係者に送ってほしい。何とも急いでいるので、早々恐々謹言。

追伸、忙しいので、送り先を記した名簿を添える。これらの人々に、この手紙の写しを送り届けてほしい。このほか色々親切なもてなしを受けたが、書面には書ききれない。以上。——

切腹覚悟で臨んだ秀吉との謁見が、想像以上にうまく進んだことに心が躍るさまが、この長文に溢れている。

また、謁見が済んだ直後の十四日付け(宛名不明)で、留守を預かる家臣にその時の状況を報告する、政宗自筆のものと判定された書状が仙台市博物館に所蔵されている(令和二年伊達家文書千四十六通が国の重文に指定され、特集展示された)。「秀吉との対面後、茶の湯に誘われ、名品の茶器などを拝見したこと、花押を書き損じたけれども自身の書状に間違いなこと」、が記されている。

謁見直後の九日付けのホットな心情吐露の書状が成実宛なので、十四日付けの宛名不明の書状は家臣代表の綱元宛と推察されている。

六月二十日、政宗は秀吉公にお暇して小田原から会津に向けて出発した。

二十五日、黒川城に入ると即、城明け渡しのための準備に入った。

七月中旬、政宗は黒川城を木村弥一右衛門清久、浅野六右衛門正勝(長政家臣)に引き渡し、置賜郡長井荘米沢城に移った。

早速、木村弥一右衛門から、関白奥州下向時の出迎えの件、白河から会津までの道・橋の整備ほか準備に抜かりないようにとの書状が届いた。

一方、旧葛西・大崎領の戦国大名は小田原参陣を拒み不穏な動きにあった。

七月、政宗は、葛西晴信、同家臣で鶴丸城(岩ヶ崎城)主・富沢日向貞運に宛て、自分を信頼し妄動を慎むよう要請した書状を送っている(「治家記録」)。

秀吉の小田原攻めであるが、この年三月、自ら小田原城を望む早川対岸の石垣山に本営を構え、籠城策をとる北条方を陸海から包囲して武威を示した。

三月末から約百日に及ぶ攻撃により、北条軍の士気は阻喪し、とくに重臣松田憲秀らの内応もあったため、六月末についに北条氏政以下が降伏した。

小田原城を包囲して三ヵ月、北条氏は小田原城を開城した。

七月六日、北条氏政・氏照は切腹し、家康の婿である氏直は高野山へ追放となった。戦後、秀吉は北条氏の旧領をすべて家康に与え、駿河、遠江、三河の旧領から絶縁させて江戸に移らせた。この戦陣中、伊達政宗の参陣・屈服もあり、この戦さによって天下統一が完成した。

○政宗は弟小次郎を本当に手討ちしたのか

政宗に同母の弟が存在したことを『寛政重修諸家譜』によって確認すると、政宗のあとに「某 竺丸 小次郎 母は政宗に同じ。故ありて兄政宗に殺害せらる」と記されているのみで、実名や生年月日は記されていない。

「政道」と名乗ったと言われているが、一次史料では確認できない。

また、天正十六年十一月二十六日、政宗の弟は元服して小次郎と名乗ったと、「治家記録」の記載によっても裏付けられるので確かなものであろう。

天正十八年には、小次郎と保春院は政宗と黒川城で正月を迎えている。

小田原出陣前の四月五日、母の保春院から館に招かれた政宗は、別れを惜しんでともに食事をした。ところが、政宗は「油いりのお菓子」か「膾」を食べ終えたところ、突如として気分が悪くなって吐き出した。一説によると、政宗の毒見役が食すると、たちまち吐血して絶命したともいわれている。屋代景頼と片倉景綱に背負われて帰城した政宗は、医師の錦織即休斎が調合した「撥毒丸」を服用すると、その解毒作用の効き目によって回復に向かった。

保春院は、実家である最上氏を頼りに、その夜のうちに山形城へと逃亡した、というのが通説になっている。最近の発見による虎哉禅師の書状では、保春院が最上の本拠山形城に向かったのは、四年も後の文禄三年(1594)十一月とされる。

これとは別に、事件直後に政宗が側近(茂庭綱元か)に宛てたと思われる手紙が残されている(亙理家文書)。その中で政宗は、母から毒の膳を勧められたが一命は取り留めたこと、これは弟小次郎を擁立する一派の陰謀であること、母を殺すことはできないので弟を手討ちにしたこと、これは内部抗争を未然に防ぐやむを得ない処置であったこと、などを打ち明けている。そして最後に、このことは他人に話せないのも、そなたの方で斟酌して世間へ口説き広めて欲しい、と述べている。

小次郎側に斬り殺されるに仕方がない事情があったとすれば、保春院が黒川城に留まっても不思議はないのだ。事件後の政宗と伊達軍団、さらには重臣達の行動にちぐはぐな点があることを考え合わせれば、小次郎擁立側の謀反は事実あったのかも知れない。背後に、保春院の兄・最上義光や小田原参陣に批判的だった成実の影もちらつくのであるが、真相は分からない。

こうした、竺丸こと小次郎の存在と、母・保春院による政宗暗殺未遂事件の概要(異説あり)を前提として、父輝宗の高田原における横死を目の当たりにしている政宗が、跡目が自分と弟小次郎の二人しかいない戦国の世の伊達家において、内紛を防ぐためとは云えそう簡単に弟を殺すだろうかという疑問を、誰しも抱くと思う。

後の元禄時代に編纂された「治家記録」には、四月五日「母義姫から小田原陣立ちの祝い膳に招かれた政宗への毒盛り事件」、同七日「母とその背後の最上家の陰謀を察知した政宗が、伊達家の分断を避けるため、元凶である小次郎とその傳役・小原縫殿助を手討ちにした」ことが記されている。

一方、その編纂の拠り所となった史料に事件当時の伊達家の日記『伊達天正日記』がある。

それによると、四月七日「政宗の黒川城の屋敷に参上した小次郎の傳役・小原縫殿助が、政宗に手討ちされた」ことが記されている。

しかし、小次郎手討ちについては記述がなく、この日以降の日記には小次郎の名はでてこないという。

このような不自然な記述が残る一方で、宮城県登米市津山町横山の長谷寺そばの小山の山頂に、小次郎の立派な墓と傳役の小原縫殿介の墓がある。

説明版に「小次郎の母・義姫の内密の命をうけた小原縫殿介は、文禄元年に会津のある寺からこの地に小次郎の遺骸を改葬して自らも自害して果てた。

現在の墓碑は明治二十六年建立のもので、三百年祭の大法要を行った」とある。

しかも墓がある長谷寺の領地は、「母公の化粧領地となった地」と説明がある。

こうしたことから、政宗による小次郎の殺害は、伊達家内紛で弟擁立派を一掃するための芝居ではなかったか、という巷説が真実味を帯びてくる。

下記に根拠を列举するが、政宗は小次郎を殺害したように装い、実は伊達家ゆかりの高僧、寺院に手厚く保護を願い、小次郎は僧籍のキャリアを積み、最後は江戸中野の明王山宝仙寺の十四代住職として生涯を終えたというのだ。

同寺の歴代住職の墓地に眠る墓碑銘「当寺第十四代 法印大僧都秀雄」とある、寛永十九年七月二十六日没・享年未詳の人物であると断定してもいいのではなかろうか。

筆者は平成三十一年初春に中野区中央二丁目(中野坂上)にある真言宗豊山派の宝仙寺を訪れ、墓碑を探し当て確認したとき、その考えを強くした。

専門家による最終的な結論を調べてみたが未だ見当たらず、結論を待ちたい。

小次郎生存説の根拠とする史実を列举する。

- ・天正十九年(小次郎殺害の翌年)、大悲願寺に武蔵国多摩郡秋留郷横沢のうち二十石を与えた、家康朱印状写が寺に残っている。

政宗から相談された家康は、増上寺の観智国師を通じてその甥である大悲願寺住職海誉上人に小次郎を託したとする指摘は可能性が高い。

- ・東京都あきる野市横沢の真言宗の古刹大悲願寺に伝わる伊達政宗の書状である『伊達政宗白萩文書』に、「秀雄が伊達左京大夫輝宗の末子で、政宗の弟であり幼名を鶴若と称した」とある。秀雄は大悲願寺の僧、十五代住職として生きた。

最後は同じ真言宗の明王山宝仙寺に移り、十四代住職として一生を終えた法印大僧都秀雄が、その人であると推察しても無理はない。

- ・同寺第二十四代住職の如環が整理した過去帳に「・・・寛永十三年五月二十四日の政宗の命日には自ら回向を行ったこと、政宗のことを伊達左京大夫輝宗の嫡子、沙門秀雄の兄」と記している。

- ・『金色山過去帳』(東京都指定文化財)にも、「法印秀雄、俗世は伊達大膳大夫輝宗の二男、陸奥守政宗の舎弟也」とある。

- ・宝仙寺の歴代住職の墓地に墓碑銘「当寺第十四代 法印大僧都秀雄」の墓が現存する。

○秀吉による奥州仕置

七月、関白秀吉は諸大名の仕置を行うため小田原城を出て奥州に赴いた。

二十六日、関白は下野国宇都宮に着き、先ず、伊達政宗、最上義光向けの方針を決めて命令している。

- ・政宗、義光に仕置を命ずるので、五、六騎で宇都宮に出頭すること。
- ・仕置に当たり政宗の意見を参考とし、方針に従わない者には秀吉の使いを派遣。
- ・政宗の妻子の上洛を命ずる。

などであった。

真っ先に政宗・義光を呼び寄せた理由は、伊達が旧奥州探題家、最上が旧羽州探題家で、今後のためにも無視できないと考えたからであろう。

なお、政宗は二十三日、関白の出迎えに米沢を発駕し、宇都宮で出迎えた。

「秀吉公は茶亭を構え、政宗並びに片倉小十郎を饗応し、自ら茶を点じて終日対話に及んだ」と記録にある。

八月九日、秀吉は会津黒川城下で評定を行ない、諸大名の小田原不参を理由に領地没収の処分を下した。主なものは、葛西晴信、大崎義隆の領地は木村伊勢守へ、石川昭光、白川義親の領地は蒲生氏郷へ、和賀信親、稗貫輝家の領地は南部信直へ、それぞれ与えられた。

このとき、多少の抵抗はあったというが、大崎義隆は石田三成の指図により京へ上り、葛西晴信も遅れて京に上り、のち、越後の上杉氏を頼り寄寓したという。

旧、葛西・大崎の領地には、主君に逃げられた旧家臣、百姓が残され、新領主の木村伊勢守父子が配置された。

これ以降、政宗は奥筋仕置の案内として、関白、蒲生氏郷、浅野弾正、木村伊勢守らと、行動を共にすることになる。

また、秀吉は十二日には会津黒川において、「検地施行に関する四か条の朱印状」を発給した。「一人も残し置かず、なできりに申し付くべく候」「一郷も二郷も、悉くなできり仕るべく候」など検地に対する反対には苛烈な処分を認める強硬な姿勢を示した。

奥羽仕置の中心として会津に封じられた蒲生氏郷は、早速、政宗とともに大崎義隆の中新田城を接收し、八月末に黒川城に入った。黒川城とその城下町が会津若松と改称されたのは、この氏郷のときであった。

綱元の居城、安達郡百目木城は、この奥州仕置にともなう知行再編により、会津近辺とともに秀吉に没収され、綱元は柴田郡沼辺城(村田町)に五千石で移った。

○葛西・大崎一揆の勃発

葛西晴信が領地を失ったあとに入ったのは、豊臣秀吉の家臣・木村吉清と、その子・木村清久であった。木村吉清は、その前は明智光秀の家臣であったという。

太閤検地の奉行として活躍していた木村吉清と木村清久の親子は、小田原攻めにも参加し岩槻城を攻め、奥州仕置の際に武功を立てていた。

そのため、蒲生氏郷の与力として、五千石から三十万石の大名へと大抜擢され、旧大崎領と葛西領のうち胆沢・江刺・磐井・気仙・本吉・登米・桃生・牡鹿・栗原・遠田・志田・玉造・加美の十三郡を与えられ、蒲生氏郷にその後見が命ぜられた。

木村父子は小身であったから、新領地へは浪人上りの俄かの家来を連れて入国し、木村吉清は葛西晴信の居城だった寺池城に入り、子の木村清久は大崎義隆の名生城にて領内統治を開始した。

木村吉清はさっそく太閤検地の経験を活かして得意の検地や刀狩をおこなった。

三十万石の俄か大名になったことで家臣不足を補うため、足輕・中間などを武家として昇進させたり、浪人を大量に登用したことから、無節操な家臣が下女・下人を襲い、素娘を掠め取るなど、領民に乱暴狼藉を繰り返し、領民らの反感をかっていた。このような無能・無策と強圧的態度が葛西・大崎残党の一揆に火を付けたのである。

五千石の侍大將が一夜にして三十万石の大名になったのであるから、秀吉は一揆が起こるかもしれないと察し、氏郷にはくれぐれの後見を託していた。

この年、蒲生氏郷は三十五才の働き盛り(弘治二年生まれ)、木村伊勢守吉清は年令不詳(生年不詳、八年後の慶長三年死亡)であるが、おそらく少なくとも四十才超の熟年であつたろうと推定される。

その後、吉清は氏郷の客將となり、文禄元年(1592)に信夫郡(現在の福島市)五万石を与えられた。吉清は居城を大森城から杉目城へ遷し杉目を「福島」と改称した。今日の福島県の名付け親は木村伊勢守吉清ということになる。

歴史に「たれば」は禁物であるが、木村氏以外の領主であつてもこの戦国の世に、当時の宮城・福島の農民がここまで痛めつけられることはなかったと思うと残念である。また、福島(旧地名、杉目)の名付け親としての木村氏を知っている県民はいかほどであらうかと思うとき、寂しい思いをするのである。

木村氏のご子孫は、宮城県図書館所蔵の史料『木村伊勢守父子のこと(山田原三著、葛西史研究六、平成三年)』の他にも見当たらず、末裔の方は既にいらっしゃらないとして、敢えて個人の率直な気持ちを表現させていただいた。

慶長三年に蒲生氏が宇都宮へ移封になると、吉清は蒲生氏を離れて新たに豊後国に一万五千石を与えられ、再び大名として取り立てられたが、その年に死去した。子の清久は父の遺領を継ぎ大名となったが関ヶ原の戦いで改易され、大坂夏の陣では大坂城に入城したが討死したとされる。

〇一揆の経過

仔細は省くが、領内全土に拡大し各城が一揆勢により陥落したため、木村吉清は子の木村清久とともに佐沼城へ逃亡し籠城した。

一揆平定を託された蒲生氏郷軍は、雪の中を、現地に詳しい政宗軍の先導で木村父子の籠城している佐沼城に赴き、父子を救出して名生城に移った。

このとき、敵地の境界での茶会への誘い、敵地の地理を偽って教えたこと、政宗佯病による進軍延期、中新田の先の名生城からの鉄砲攻撃など、政宗に異心あるのを氏郷は看破した。

政宗は、氏郷の疑いを晴らすことができず、黒川城接收使として二本松城にあった浅野長政へ和睦の取り成しを願うべく、原田左馬助らを使いとして二本松城に遣わした。

長政は氏郷との間にあって宜しく取り計らってくれたが、氏郷は応ぜず、伊達方より人質を差し出せば、氏郷は名生城から立ち去るのではないかと、伊達彦九郎盛重(政宗叔父、国分改姓盛重)に浅野長政の一族・浅野六左衛門を添えて名生城に送った。

それでも氏郷は納得せず、伊達上野政景(政宗伯父、旧留守氏)、伊達藤五郎成実の何れかを寄こすのであれば応ずると云ってきた。

政宗は成実を名生城に遣わすことを二本松の長政に申し送った。

こうしているとき、政宗家臣の須田伯耆が、政宗が一揆方に配った自筆の鶴鴿の花押を押した書状を証拠品として持参し名生城に駆け込んで来た。

名生城在陣の氏郷の訴状によって政宗は一揆勢と共謀していると疑われ、秀吉に召喚されたのであった。

尚、この須田伯耆なる者は、天正十三年十月、政宗の父君輝宗が二本松城主畠山義継の謀略により拉致され安達郡高田原で横死したとき、殉死した須田伯耆道空という者の嫡男であった。

殉死の動機は子孫に恩賞を残したい一心の不純なものであったが、一応、殉死の扱いにしてその遺骸を米沢に召して、父輝宗、他の殉死者と共に法要を営んだ。

他の者には加増があったが道空の嫡男伯耆にはなく、それに不満を抱いた須田伯耆は、度々抗議を申し入れていたという。

十一月三日、政宗公は、奥州仕置きで没収された百目木城から柴田郡沼辺城に移っていた石見綱元に、大崎方面の一揆の情勢を記した書状を送り、二本松にいる浅野長政と接触して情報を整理し、しかる後京都の秀吉の近臣・近習と接触して、政宗の一揆勢との共謀の疑いを晴らすよう使命を与えて京に遣わした。

天正十九年(1591)

政宗は信夫郡飯坂城にて越年し、ここで年賀の御祝儀。

一月、伊達成実が政宗公の命により、伊達彦九郎盛重、浅野六左衛門と同行し名生城に参上して約定通り氏郷に面会した。

成実は同行の二人を残し、木村伊勢守父子を伴って名生城を出て浅野長政のいる二本松まで送ろうと申し入れたが、伊勢守は断り飯坂方面に帰参していったという。

一旦、収まったかに見えた政宗の一揆扇動という関白への反逆の評判が御前にて頻々と立てられていることを知ると、正月七日、政宗は近々の自身の上洛に備えて京の情報収集を早急に始めるべく、浅野長政と接触している二本松より直ちに上京するよう綱元に命じた。

政宗の家臣には秀吉公の近臣に懇意の者がいないので、雑説(根拠のない噂)があっても対処できないので、綱元の才知を以って秀吉近臣と懇意になるべしとの命を仰せ付けての綱元の上京であった。

綱元、上京以後、どのような才覚を働かせたのか不明であるが、雑説に申し開きができる首尾が整った。「綱元君記録」には、「天正十九年三月、関白秀吉公、御内証にて御目見仰せ付けらる。是より段々召出され、御物語を聞かせられ、或いは御料理を下さると云々」との記述があり、綱元は秀吉に召し出されて懇談したり食事を伴にする機会が増えていったことが窺える。こうして秀吉は、綱元の才と人柄に惚れ込んでいったと推察される。

このことが、後々の綱元のスカウト話・・・伏見の屋敷供与、賭け碁へと進展し、秀吉愛妾のお種(香ノ前)を綱元に与えることになったのであろう。

これからの度重なる政宗の危機に際して、綱元が前面に立ち秀吉の近臣と折衝することによって、主君政宗を危機から救って行ったと考えられる。

十九日、関白より上洛すべき旨の朱印状が到着した。

政宗に親しい列侯(家康、利家)より上洛然るべしとの催促が、浅野長政及び政宗に申し遣わされた。なお、浅野長政は奥州仕置きの現地責任者として会津方面に長期出張(二本松城)の形で派遣されていたのである。

関白祐筆の和久宗是からも一揆同心の疑いを晴らすべく上洛を促す書状が届き、同じ日に、尼孝蔵主(秀吉の正室・高台院付きの筆頭上臈)からの書状も到着した。これには「北の御方(政宗室)何事もなく無事にいます 時々 関白殿及び北政所より懇ろなお気遣いがあり ご安心ください。然し乍ら今度は 政宗公御心変わりとの注進があり 殿下に於いては政宗の別心は雑説(根も葉もない噂)であると固く仰っています

かような御恩を忘れ給えば天罰を被ります 万一別心あるときは お家滅亡すべしと人々は申しています 早速御上洛して疑いをはらすべきです」とあった。

政宗はギリギリのタイミングで秀吉からの召喚に応じて、二十一日、米沢城を出駕し上洛の途に就いたのである。

重臣留守政景(政宗の叔父)、片倉小十郎景綱、津田豊前ら三十騎余を同道し、米沢留守居には伊達成実、湯目景康を残した。

二十二日、二本松にて浅野長政に会い、これまでのお礼を申し述べた。

閏正月十九日、茂庭石見綱元が遠州掛川にて政宗公を出迎え、「ご機嫌うるわしく、殿(政宗)と清洲で会食を共にしたい」との関白の伝言をお伝えした。

綱元は、昨秋以降上洛していたが、十七日清洲で鷹狩に来ていた関白に馳走に預かっていたので、政宗を掛川まで出迎えたのであった。

政宗は二度と奥州へ帰れぬ覚悟を決め、死装束に金箔の磔柱を行列の先頭の馬の背に立てて上洛したのであった。同二十六日尾張清洲に到着、関白上使に「政宗別心ナキ事、心定カナル由」弁解して、翌日面会し御料理を賜わった。

秀吉は政宗が早速上洛したことに満足し、「今度の雑説は毛頭事実ではなかった旨」の上意を直々に伝えた。こうして政宗が上洛の途次、尾張清洲で秀吉に拝謁でき誤解が解けたのは綱元の根回しの結果であり、綱元が秀吉の近習に巧みに接近して取り入ったことによるのであろう。

とはいえ、秀吉公の誤解が完全に解けた訳ではなく、先ずはギリギリに上洛した政宗を認めた上でここは馳走し、後でジックリ尋問してやろうという秀吉の独特の戦術だったかもしれない。

突拍子もない行動でひとの気を引こうとする政宗なりの計算は、ある程度、図に当たったのであろうか。

政宗は安堵して清州を発ち、二月初旬、宿舎の京の妙覚寺に入った。四日、聚楽第の尋問では、秀吉に一揆煽動の動かぬ証拠として、政宗の花押の入った一揆首謀者への檄文を以って詰問された。

政宗は、「花押の鶴鴒の眼に針で眼を入れたるは政宗の花押、この偽書には眼が入っておりませぬ」と、証拠の檄文は偽書であると主張した。

秀吉は試みに以前、政宗から来ていた書状と比べると、政宗の申すとおりであった。政宗の見え透いた策略とは分かっていたが、普段から花押を使い分けている政宗の大將の器を認め、秀吉は召喚に応じた若僧政宗の度胸を許しお咎めなしであった。

おそらく秀吉は、政宗が陰で一揆と通じ、その一揆を蹴散らし、木村父子を追い落として、葛西大崎の領地加増を狙っていることぐらいは察知していたのであろう。

二月下旬に政宗は聚楽の御屋敷を賜った。

三月八日、政宗は、羽柴の姓を賜わり越前守に任ぜられ、これより「伊達侍従羽柴越前守政宗」と名乗ることになった。秀吉のぎりぎりの懐柔策と考えられる。

政宗は関白秀吉より、会津五郡、旧大崎五郡・葛西七郡・その他二十郡五十八万石を賜わり、葛西・大崎一揆を早々に退治すべく命を受け、六月、米沢に帰着した。

○第二次一揆討伐に向う

六月、政宗は会津黒川に着陣するよう諸軍勢に申し渡し、亘理、留守、成実、片倉、茂庭、原田ら、部下を率いて夫々の城から二十一日には着陣した。米沢城留守居には国分彦九郎盛重、伊達左衛門宗清入道鉄斎を命じた。「政宗公御陣所は西の沼地で足場の悪い所、その東に茂庭石見の陣所、片倉小十郎の陣所」を設けたと『成実記』に記されている。

七月、綱元、景綱らは三日かけて一揆勢が籠城中の佐沼城に攻め入り、四日めの明け方には本丸を残すだけになり、更に攻め続けて夜半には落城させた。武者五百人、百姓二千人全員を殺戮した。いわゆる「佐沼の撫で斬り」である。『成実記』に、「侍大將二、三千ばかり討ち果たし土の色も見えず、屍骸の上を歩いている有様にて」とある。

更に、登米城に攻め入り、政宗は降参を申し入れた諸将に対し、討伐軍大將の豊臣秀次の「身命助」を得てやるので、「八月十四日午の刻、桃生郡須江山の北、糠塚に集合するよう」沙汰を申し付けた。

八月六日、討伐軍大将の豊臣秀次が二本松に到着した。家康もこの頃に着いた。政宗は病をおして二本松にてお出迎えした。片倉小十郎景綱には名代として関東那須までお出迎えに参るよう書状で伝えていた。

十四日、一揆の武頭衆は糠塚に集まり待っていると、突然、周囲から武装した伊達軍が現れ、有無を言わず、全員殺されてしまった。これが「須江山の惨劇」である。

「治家記録」では、「政宗は、「ここに集めた武頭(首謀者)、何卒身命ばかりはお助けくださいますよう」討伐軍大将の豊臣秀次に訴え申し上げたが聞き入れられず、一揆の武頭は誅殺すべしとの沙汰が下り、深谷に留め置いた武頭二十余人を討ち果たし、首を塩漬けにして京に送った。」とある。葛西氏の研究で地元をリードし、多くの著作をものにしていく紫桃正隆氏は、葛西氏遺臣の末裔の家譜や墓銘碑などを丹念に調査した結果、「須江山の惨劇」の犠牲者は百名を下らないという。

政宗は秀次との最近の誼もあり、これからの自分の領地支配が上手く行くよう、一揆の首謀者を本気で助命してやろうと深谷に集合させたのか、或いは、今後の治政に邪魔とみて打ち殺そうと計画したのか、政宗しか知らないことではある。

これについては、旧葛西・大崎領をこれから領する政宗の領地として安穏ならしめるための邪魔者を、陰謀殺戮したとの疑い(後者の説)が強いという。

旧葛西領に伝わる伝説として、帰農した遺臣が門に「サイカチ」の木を植えたという(紫桃正隆『仙台領の戦国誌』)。サイカチは、「葛西勝つ」に引っ掛けたもので、葛西氏再興を願う同志たちの目印にしたものであるという。

八月十日、家康が二本松より岩手沢に到着し、実相寺を宿とした。この実相寺は、岩出山城主氏家弾正の菩提寺で応永十五年(1408)の開山とされ、家康が下向した際、約四十日間止宿し五百石の御朱印地を寄進したとされる。現在も東照公の位牌を安置し、家康の使った御椀を寺宝としている。

岩手沢城を政宗の居城とすべく、関白秀吉の命を受けた徳川家康が榊原康政に縄張り・修築を命じた。この頃、政宗は高清水城に逗留し病氣療養中であった。この城は、室町時代初期の応永年間、大崎氏の家臣・氏家弾正が築城したもので、堅固な山城であったが大分朽ちていた。

葛西・大崎一揆とは別に、南部氏に反旗を翻して挙兵した九戸政実(はつせ)は、蒲生氏二万の兵を相手に兵糧・矢玉尽き降伏した。

九戸政実ほか降将は、九月四日、栗原郡三迫に連行されこの地で首を刎ねられた。近くまで出張っていた奥州征討軍大将豊臣秀次の命令であった。この地は「九戸」と称され、「九戸神社」、「政実首洗い池」が今も残っている。

五 朝鮮出兵、秀吉との知遇

○政宗の岩手沢入城と朝鮮出兵

九月、政宗は米沢から岩手沢に減転封された。

米沢から一揆で荒廃した岩手沢に移るに当たり先ず心配なのは、これから冬に向う大勢の家臣の家屋の確保であった。米沢の家屋の木材を岩手沢で使用したいという希望を、討伐軍に伝えていたのであろう。次のような話が伝わる。

東磐井・気仙郡地方を担当していた石田三成からの書状に「当地の家を岩手沢に引いて行きたいという申し出は尤もなこと。但し、大将秀次からは全部破却せよと指図があり、その線に沿って、立木・壁は取り払ったが、自分の判断で家は破損しないよう申し付けている。御手前の人足の派遣ができないなら、当方の人足で家を壊し(解体し)、その材木をどこまでも運び届けてあげる故、遠慮なく承りたい」と云ってきた。三成の好意の申し出に対し政宗は、来し方の三成の挙措を思い浮かべてどのような感想をもったことであらうか。あの三成にして政宗の潔い身のこなしを快く思い応援したい気持ちになっていたのであらうか。

茂庭綱元は西磐井郡赤荻(一関市赤荻宿)を賜り赤荻城主となり、柴田郡沼辺(村田町)から移った。知行高五百貫文(五千石)余であった。

この年の九月二十三日、政宗は玉造郡(現大崎市)岩手沢城に移った。

秀吉の命を受けた家康によって縄張りが殆どなされていたので、政宗は自分で手を入れることなく入城したのであった。

政宗は入城後、それまで岩手沢城と呼ばれていたのを、岩出山城と改称し、城下町建設や農村復興に尽力した。

慶長八年(1603)に、完成した仙台城に移るまで十二年間の居城となった。

この間は、朝鮮出兵や十年の京都滞在とで、岩出山で政務を行ったのはわずかな期間であったが、その後の仙台藩へと続く基礎固めがされた時期であった。

この居城は、城郭は外堀をめぐらし、急峻な崖の上には土塁と内堀を備え、本丸・二の丸・三の丸も深い堀切で区画され、東西約800m、南北約700mの大規模なものであった。

十一月に政宗側室御新造方の飯坂氏が柴田郡村田城で男子を出産した。政宗の第一子で、童名兵五郎、後の宇和島侍従兼遠江守秀宗である。

十二月二十八日、秀吉は関白職を辞し、養子豊臣秀次が関白に補せられた。これからは、秀吉は太閤(前関白の尊称)と呼ばれるようになる。

文禄元年(1592)

正月、政宗は岩出山城にて初の正月を祝った。

五日、秀吉の朝鮮派兵に応え、政宗は留守居に奉行の屋代景頼二十九才を充て、一門歴々の三十人を引き連れ岩出山城を出発した。

秀吉の仰せには「遠国なれば小勢としても苦しからず、五百騎ばかり相具すべし」とあったが、「具足の化粧、田舎びて上方とは異なる。今度は異国での合戦なれば騎馬に華やかな具足三十領を賜わり。其の時の軍勢は、馬上三十騎、鉄砲百挺、弓五十張、槍百本、幟三十本、兵三千人」の規模であった。(兵三千人には千五百人とする異説もある。「治家記録」には「雑兵三千にて上京」とある。)

また、上洛途上には、「名取、国分、宮城、黒川、深谷、松山の勢子を召され、七ッ森(宮城県黒川郡)で猟に遊んだ。猪鹿三百頭、皆、群臣に分け与えた。その後、丸森を経て京へ向った(伊達便覧誌)」とある。英気を養ったのであろう。

二月十三日、政宗は京都聚楽の伊達屋敷に到着した。

三月朔日、一旦京都に集結した諸大名は隊列を組み出陣した。京を進発した諸侯の軍勢は次のごとくであった。

「徳川家康 一万五千人、結城秀康 千五百人、大和大納言秀綱 一万人、加賀宰相前田利家 八千人、越後宰相上杉景勝 五千人、大崎侍従伊達政宗 千五百人、常陸侍従佐竹義宣 三千人、会津少将蒲生氏郷 二千人、最上侍従義光 千人、(伊達便覧誌)」。京を発った政宗軍は三千人とする説もある。

先頭の一番隊・前田利家、そして二番隊の徳川家康の後に現れたのは伊達政宗隊。仙台笹の家紋の軍旗に紺地に日の丸をあしらった幟をなびかせ、黒色の具足で統一された兵士たち、脇差は朱色に銀の装飾がほどこされ、馬上の武者は金色の半月が描かれた黒の母衣で揃えた軍勢であった。

足輕は銀熨斗付の脇差、朱鞘の太刀をはき、尖った笠をかぶっていた。

仙台隊列の大將・伊達政宗は、黒の羅紗地に背中に大きな金色の家紋をあしらった陣羽織、袴も黒羅紗に金糸模様、そして兜はもちろん三日月の前立てという一段と華麗な装い。金をふんだんにあしらってはいるものの、決して派手になりすぎない上品な豪華さに、京の人々は「動く絵巻を見ているようだ」と絶賛したと伝えられる。

洒落者の代名詞「伊達男」という言葉は、ここで生まれたとされている。

三月十七日、政宗は京都を出発して肥前名護屋に着いた。この日は徳川家康、前田利家、佐竹義宣なども同時に着陣した。

茂庭石見綱元も京から軍に加わり、筑前国博多浦に着き、その後、肥前名護屋に着陣した(四月十九日)。

綱元は名護屋留守居を仰せ付けられ、兵站を一身に引き受けた。

六月、政宗は浅野弾正長政を通じ朝鮮渡海を秀吉に願い上げた。

名護屋在陣中、政宗は太閤殿下の陣屋に招かれ、綱元へも饗膳の相伴を仰せ付けられた。その後もたびたびお茶会等に召し出され、お相伴をも命ぜられた。この年は渡海することなく名護屋に滞陣することになった。

その間、茂庭石見綱元には、太閤秀吉が「鬼が庭にいるのは縁起が悪い」という理由で姓を改めるよう命令があり、鬼庭村の本名を以って茂庭に改めた。

同年、綱元の長男・安元が病死したため、綱元は八幡宗実(宗実)に養子に出していた二男・良綱(のち良元)を呼び戻して跡取りとした。

この年、名護屋陣所において、留守上野介政景へ一門の伊達姓を与え、以後伊達政景と称した。

文禄二年(1593)

二月、政宗は太閤より朝鮮渡海を仰せ付けられた。

今回の渡海命令は、進撃のためではなく自軍の退路を安全にするためのもので、一陣が政宗と浅野長政、二陣が前田利家と蒲生氏郷、三陣が徳川家康ほか関東越後勢であった。渡海の一陣となった政宗は、原田左馬助宗時、富塚内蔵信綱を先勢として先発させ、自身は三月十五日に乗船し、風を待って二十二日に壱岐に着き、壱岐・対馬にも二十日ほど風待ちで逗留する羽目になり、四月十三日、浅野長政らと釜山浦に着岸した。二陣、三陣は結局渡海しなかったという。

出船時の伊達軍主将、原田宗時、富塚信綱、伊達政景、石川昭光、伊達成実、片倉景綱、白石宗実も無事釜山に集結し、十八日、政宗公、浅野弾正父子らと共に釜山浦を出発し、二十一日蔚山へ着陣した。

手始めに蔚山城を攻撃し占領、普州城攻撃と転戦し、帰国の途中で古くからの重臣桑折政長、原田宗時を相次いで病気で失った。

特に、人取橋の戦い以来、戦場を疾駆してきた二十九才の若い原田宗時の死を悼み追悼の詩を詠んだ。

「吹きはらふ 嵐にもろき 萩のはな だれしもいまや おしまざらめや」

この原田宗時の孫に当たる人物が、後世、伊達騒動(寛文事件と云われる)で知られる原田甲斐宗輔である。

五月、政宗が朝鮮から綱元に宛てた書状には、名護屋で綱元が今井宗薫らと茶の湯を楽しみ、施薬院全宗ら秀吉側近と交わっていることを、留守居の仕事(情報収集・交換)として好ましいと、留守居の綱元を後押ししている。

九月中旬、太閤殿下より朝鮮在陣諸将へ帰国命令が出され、政宗軍は帰国した。政宗は京都に戻り、伏見城に於いて茶を賜った。

閏九月、伏見城下に屋敷を賜わった。政宗の朝鮮在陣は約一年半に及んだが、合戦らしい合戦は晋州城攻撃だけで、直接の戦闘で損傷は少なかった。大部隊での釜山陣所に駐屯した経費は莫大であったが、餓死者をひとりも出さなかった兵站は、名護屋留守居茂庭石見綱元の才覚であったと後に称賛された。

○秀吉愛妾「香の前」の下賜、綱元の隠居・出奔

綱元に対して秀吉が香の前を下賜したことが、政宗の怒りを買って綱元に隠居を命じ、遂には綱元が出奔するに至った経緯が、『綱元君記録』の同じ話題を繋ぎ合わせて読むことによりおぼろげ乍ら浮かんでくる。

文禄三年(1594)

正月、京都聚楽御屋敷にて年賀の御祝儀。

岩出山には兵五郎秀宗が世嗣として在城していた(四才)が、二月京都に上った。

六月、京都聚楽の御屋敷で、北の方田村姫が女兒を出産した。

五郎八姫と名付けられた。後に、家康六男忠輝に嫁した姫である。

太閤殿下より綱元に伏見に五町四方の屋敷を賜ったが固辞し、殿下の愛妾一人を賜われることになった。

実は、秀吉から屋敷の話をあきらめる代わりに賭け碁に誘われ、勝ったらどれでも一人女子をくれてやろうということになっていた。

綱元は、この頃、秀吉から家臣にならないかという執拗な誘いを受けており、賭け碁を断わりえなかったのである。賭け碁に応じたところ勝ってしまい、居並ぶ女子衆の中でも一番目立たない女子を指名した。

秀吉は逡巡し「何であんな汚い女子を選ぶのか」と、問い質したところ、「私めは田舎ものでございます。華やいだものは購ってやれぬ身とあつては、それに適う一番の女子衆があれでございます」と言ったとか。

結局、秀吉から綱元が指名した一人の女子を貰い受けた。

実は、十六人の御寵愛の一人で、しかも飛び切りの美女であつたので、指名されないようにわざと目立たぬ格好をさせて侍らせたのだという。

その名は種(お種)十八才で、伏見町に居住の侍、高田次郎右衛門の娘であつた。

『綱元君記録』では、「太閤殿下、君(綱元)へ御妾一人を賜う。是殿下十六人の御寵愛の一人なり。名は種、歳十八、伏見町に居住の侍高田次郎右衛門某か女なり」と記されている。

お種、のち香の前は、後に、津多(原田甲斐宗資に嫁ぎ宗輔の母となる、のち慶月院)と又次郎宗根(伯耆宗根、佐沼亘理氏)の二人を産んだ。

この二人は政宗の落胤であつたという。この後に又次郎宗根を婿養子に迎え、亘理氏の名跡を相続し亘理宗根と名乗ったが、『亘理氏略系譜』によれば、「宗根 実は茂庭石見綱元の季子(今でいう末子)、母は京都伏見の士高田次郎右衛門の女にして香姫と称す。文禄三年秀吉、香姫を綱元に賜い、慶長五年伏見邸に宗根を生む。

按(筆者注;遠慮がちな言い回しで「本当のところは」というほどの意か)香姫は藩祖政宗公の寵する所となり、宗根は公の落胤なるを、故ありて綱元の四男とせるなり」と記されている。

何時の頃かは不明であるが、秀吉が施薬院全宗に綱元の人柄をたずねたところ、

「故実にして記憶よく、面白き者なり」と答え、「茂庭家代々は九十才以上の長命。父良直のみ人取橋合戦により七十三才で討死にした」と話すと、茂庭氏が代々長寿の家系であると聞いていた秀吉は、その秘訣を探ろうとして綱元に日頃の暮らしぶりについていろいろ下問したという。

この時綱元が、日頃から米粉を湯に溶いたものを摂取していると答えたので、秀吉もこれを「石見湯」と名づけて摂取するようになったという。

文禄四年(1595)

二月、会津領主蒲生氏郷が京都で病死した。四十才の壮年であった。

辞世の歌に「限りあれば吹かねど花は散るものを心短き春の山風」とあり、この歌から氏郷はその才がゆえに秀吉に疎まれ毒殺されたとの俗説が伝わっているが、前年から病床にあり、十一月には秀吉が見舞ったというから、毒殺説は根拠が薄いと思われる。

この四月、政宗は伏見より国許岩出山への一時帰国を許され、綱元もお供した。文禄元年、肥前国名護屋へ向けて出国以来、ほぼ三年半ぶりの帰国であった。

岩出山転封、朝鮮の役参陣・渡海と息つく暇もない年月を送ってきたので、国の仕置きを済ませるようにとの、太閤殿下の仰せ付けであった。

岩出山へ一時帰国したのも束の間、留守居の屋代勘解由景頼から、茂庭綱元が秀吉の家臣になりたがっていると政宗に讒言する事件があった。

『綱元君記録』には、「文禄四年夏、政宗、岩出山に下向、綱元御供。屋代勘解由景頼、政宗に綱元を讒言」として「石見は太閤へ奉公の望みありて殿下の近臣に近づき、御妾と屋敷を賜う。必ずや旗本に召し出されべし。石見が旗本になれば御為にも善悪あるべし、油断あるべからずと申さる。公 聞こし召され、かの今井宗薫等の話を思召し出され、公の御為に殿下へ近づくと称して、実は御旗本を望みたるかと御怒り甚だしく、急に君(綱元)を召し給う」と、長らく岩出山の留守居として政宗留守中の実権を握っていた屋代勘解由景頼の讒言を、政宗公が信じて綱元を急に呼び出したことを記している。

これを知った片倉小十郎景綱は、綱元邸に出向き綱元を伴って政宗の前に出た。景綱は綱元を庇うように片膝立てになって政宗公に対した。景綱の様子を見た政宗は顔色を変え、腰物(刀)を取って奥方に入っていかれた。景綱は、このうえは仔細あるまじ(ここまでくれば政宗公も讒言と分かったはず)と城を退かれた。こうして綱元を手打ちしようとする政宗を片倉小十郎景綱が思いとどませたのであった。

○隠居命令と出奔

この後すぐに、「御使を以って今日より召仕はれざるの間、隠居いたすべし。家督は嫡子小源太(良元)に仰せ付けらるの旨なり。小源太君へ仰せ付けらるは、君への御隠居分十貫文に限るべし。もし御意を違背し御隠居分十貫文に過ぎたるは、御知行残ら

ず召し上げらるべきの由、仰せ渡さる」として、綱元は、政宗公より隠居を命じられ、嫡子・主水良元十七才に家督を相続させた。

政宗は、綱元が秀吉に接近しその家臣に召し出されるとの噂を真に受け、綱元に突然隠居を命じた恰好になった。

このとき、隠居料は百石を超えないこと、隠居料以外の収入を得た場合には、良元が相続した茂庭氏の本領五千石をも没収するという条件であった。

憤激した綱元は百石では生活できないとして、香の前を同道して出奔した。

『綱元君記録』では、この出奔を「君、隠居分十貫文にては御相続成りかね給うについて、種子御同道にて伏見へ登り給う。高田氏を頼み給いて伏見に御住居あるべきためなり。御供には十人ほど召し連れらる。」とも記している。

綱元の人柄、手腕を買っている政宗が、家臣の噂や誹謗中傷に惑わされたとは考えにくく、中央情勢を探るために綱元の伏見滞在の理由を忖えたものと云われる。

百石では生活できないとした綱元が、香の前の故郷なので生活が楽になるかもしれないとして、京の伏見に移り隠居するとは考え難いことで、政宗の意図をもってした隠居・伏見転居(調査活動)という筆者の推察は妥当なところであろう。

何よりも御供に十人ほどを同伴したのは、調査の手足になる綱元家臣を中心にした仙台藩士であったと思われる。

綱元は伏見への西行途中、江戸に立ち寄り、本多正信に馬一匹を贈り、家康からは出仕の誘いを受けたが、二君に仕えずとして断った。

政宗の発した奉公構いにより破談となったという説もあるようだが、これは違いうだろう。家康は、当座の資金として関八州伝馬十匹の朱印状と永楽銭二百貫文を与え、道中行装の具として中白鳥毛槍・虎の皮の鞍被・紫縮緬の手綱を贈った(茂庭家文書)。徳川家康公からも出仕の誘いをうけるほど有能な綱元であったことが窺える。

中白鳥毛槍(胴白)は後に伊達家臣行装具随一の名物となった。

中白鳥毛槍は現存し、昭和四十八年(1973)に松山町から文化財指定を受けている。

今回の三年半ぶりの岩出山への帰国に際して、実は政宗公への嫌疑がもう一つ掛けられていたのであった。

関白秀次公より栗野木工助秀用を通して、「御鞍十口、御帷子二十、御餞(餞別)として賜う」とあるが、この餞別を秀吉に報告しなかったことで、後の秀次公の切腹事件のとき、太閤秀吉より嫌疑を掛けられる一因になった。帰国には浅野長政と同道したが、これは会津仕置きのため長政が下向するのと同じ時期なので同道したのであった。

○関白秀次謀叛事件と政宗

七月になって、太閤秀吉は関白秀次に謀反の嫌疑をかけて高野山に送り、自害を命じた。秀次二十八才であった。青巖寺殿と号した。

この嫌疑というのが、石田治部少輔の讒訴であったと、「治家記録」は次のように記しているのがおぞましい。

「関白殿、鹿猟を好み、唐犬数多集め、網を山中に張切り、人数を以って猪鹿を追い入れ、・・・此の如しの狩猟に興ぜられ、山中に御出であり、五日、十日と留連したまう。石田殿是は御謀叛調議のために山々に在留せらるるの由」として、石田三成は「関白の鹿猟好き、山中連泊」を謀反策略の場であると太閤殿下に讒訴したのである。

関白秀次の自刃後、その妻妾、子女三十九名は三条河原で斬首され、側女にとられていた政宗の伯父・最上義光の娘お駒はわずか十三才のいたいけな命を無残にも奪われた。

この事件が起きたときは、まさに上京したばかりで秀次の寝所にも入っていなかったもので、前田利家、徳川家康らが助命嘆願したが、叶わなかったという。

太閤秀吉が我が子・秀頼への権力委譲のためとはいえ、病的なまでの権力欲のなせる仕打ちであったと、現代人は考えるだろうが、よく考えると戦国の世においては「一族皆殺し(族誅)」により自家を守るのが当たり前であったのだ。

暫くして関白秀次の自害が、政宗に思いもかけぬ事件をもたらした。

久しぶりに岩出山城に帰り、寛いでいた政宗に秀吉から思いもせぬ召喚命令がきた。政宗が秀次の謀反に加担していたというのである。『伊達治家記録』では、「上方御懇意の御方より、公(政宗)も関白殿(秀次)へ党与の由(与すること)申し唱えるの間、御上洛に於ては必ず切腹に及ばるべきの旨、告来る」として、政宗公が召喚に応じて上洛すれば必ず切腹の沙汰が下りるだろうという、驚愕の観測情報が寄せられた旨が記されている。

秀吉の嫌疑は、政宗が秀次と猪鹿狩りに出かけていたこと、その折、密かに太閤暗殺の計画を練ったというのである。

また、政宗がこの四月、国に帰る際に秀次のもとに挨拶に参上し餞別を貰っているが、何ら、報告もなかったという三点にあった。

事の重大さに政宗は驚愕し直ちに岩出山を出発し上洛した。

後で判明するが、場合によっては伊達家が廃絶する危険をはらんでいた。この辺の状況を「治家記録」を参考にして記述する。

政宗は会津より帰る奥州仕置出張中の浅野長政と白河で出会い、同道して京都に急ぎ、八月上旬に大坂に到着し、直ちに施薬院法印全宗の邸宅に入った。浅野長政と同道した故は、最上義光は息女のことの原因で秀吉の不興を買い屋敷に籠居することになったが、秀次の相婿の浅野幸長も石田三成の理由なき讒訴によって大原に籠居するはめになり、父長政も至急の上洛となったのである。

石田三成は幸長の父長政と不和であった。

この機に乗じて浅野長政を失脚させようとして、相婿という関係だけで、彼の子息幸長と秀次との謂れなき関係をでっちあげて秀吉に訴えたとされる。

京では政宗も秀次のいわば与党であり、上洛のうえ秀次同様に切腹になるだろうとの噂が流れていたもので、綱元が出奔して不在な状況で政宗はまず、父輝宗の代から伊達家に仕えた老臣の白石宗実を施薬院の元へ先発させた。

秀吉の側近で政宗とも親しい施薬院法印全宗に相談させ、自身もともかく京には行かず、大坂の全宗宅に入ったのである。

最上義光が買った秀吉の不興とは何か、具体的には不明である。

秀次が一揆討伐軍の大將として奥州に下向した際、義光の息女を見染めて側女に差し出すよう義光に命じた際に、秀吉に断りもなく秀次に差し出したことではなかろうかと推量する。

政宗が秀次与党であるという雑説が発生した理由は、秀次の寵臣に栗野木工助秀用という者がいたことが起因したと考えられる。

この男は、もと伊達氏の家臣で政宗が弟小次郎に近侍させていたが、小次郎事件があったとき、逐電して越後に逃亡して後、秀次に仕え、名を木工助と改め恩寵を受けていた。

政宗が秀次に参向のおり、秀次を通して詫びがあり、それから木工助も政宗の所に参上し、木工助の執り成しで秀次との間がより懇意になっていった。

このことが仇となって、世上の雑説が出てきたのであろう。

勿論、政宗の一切関知しないことであるが、秀頼の出生以後、孤立化の形勢にあった秀次としては、与党となる大名をつくる必要があり、木工助も旧縁を求めて積極的に政宗と秀次を結び付けようと計ったのであろう。

秀吉の意を受けて政宗を尋問した施薬院全宗以下四人の使者が、政宗親近の人であり、うまく取り繕ってくれたので、秀吉も四人の使者の奉答を了承したようだ。

八月上旬、査問の結果、秀吉は、「政宗の子息兵五郎(秀宗)は秀頼の被官であることから家督は秀宗に譲らせ、政宗を配流に処すること、在所の家臣どもを上洛させ、兵五郎秀宗に奉公致し、政宗方とは行き来をしないこと、家臣どもには誓詞を出させること、家臣が上洛しない間は政宗は聚楽屋敷に居住することを下知し」、伊達家が廃絶することの危機だけは免れたのであった。

石田三成の根拠がない讒訴、秀吉の猜疑心と異常なまでの権力欲が、政宗にとって思いも寄らない災難となったのである。

政宗には全く身に覚えがないので潔白を主張し飽くまで譲らなかったこと、政宗近親者による運動、中島宗求と湯目景康による政宗に逆意なきことの目安状を秀吉に路上で直訴したこと、重臣十九人からの連判の誓詞の提出などが、何とか功を奏して冤罪事件は落着いた。

この重臣十九人には、伊達成実、片倉景綱、伊達政景など一門衆の名はあるが、茂庭綱元は出奔中であり知る由もない。
秀吉と丁々発止の交渉を経験した綱元ならば、一連の対応をどうしたか、仮定の話を想像してみたくなる。

また、これまでであれば、直ぐに綱元を秀吉の元に弁明に走らせることができた政宗の心境はいかばかりであったろう。

政宗はこれまで二度、小田原参陣の遅れと葛西大崎一揆扇動の嫌疑とに際して、秀吉の面前に引き立てられた。白装束を着用するなど若干の心理的余裕はあったようだが、今度ばかりは秀吉に追い込まれたが、しかし冷静に分析しながら行動した。

一方、秀吉をしてここまで政宗を追い込んだのは、秀吉が政宗の潜在能力(地力)を余程恐れていたというべきか。

別の観点から識者は「秀吉は政宗の冤罪を知りながら、事を表沙汰にして恩を売り、秀頼への忠誠を公約させたのではあるまいか」としている。

戦国の世の頭脳戦であれば、この識者の見解のほうの的を射ていると思われる。

○伏見伊達屋敷の造営、異母姉喜多の活躍

八月末、政宗の嫌疑が晴れたとして赦免された。但し、家老の妻子ら千人を在京させて秀吉に奉公せよ、家中に屋敷を与えるので伊達町と名付けよと申し付けられた。これにより、政宗は秀吉から伏見に屋敷地を与えられ屋敷を普請することになった。現在の海宝寺境内を含む「桃山町正宗」という地域には伏見上屋敷、上屋敷の南西と深草の二ヶ所には下屋敷を造営した。

この造営の様子は、「治家記録」には「伏見作事のことは伝わらず」と簡単に記されているだけで、規模、建屋の数などは分からない。

政宗の手植えと伝わる樹齢四百年を超えるモッコクの木が現存する現在の海宝寺は、政宗の伏見上屋敷があった所なので、凡その想像はできるであろう。

「秋冬の間、国元より一家、一族、家老の輩の妻子を伏見へ相登らせ在府せしめらる。政宗公 御氣遣い御免(秀次事件の嫌疑が晴れたこと)の時、仰せ出されし趣を以ってなり」とあり、京で奉公する千人以上の重臣やその妻子などが伏見に移った。

屋敷一帯は人々から「伊達町」と呼ばれたという。

政宗自身も上屋敷に一年くらい住み、慶長六年に上洛した時も一年間をここで過ごしたという。

深草の下屋敷付近には、現在も「深草東伊達町」「深草西伊達町」の地名が当時の名残を留めている。また、海宝寺門前の道路は「伊達街道」と呼ばれている。

ここで、綱元の異母姉喜多の伏見での奉公に触れねばならない。

彼女は父・鬼庭良直の血を受け継ぎ、政治や軍事向きの話も語れる女傑であり、伊達屋敷の留守を預かる執事長、いや、弟綱元が伊達政宗の官房長官なら、伏見屋敷のいわば官房副長官であった。

政宗成人後の喜多は天正七年(1579)に嫁いできた正室の愛姫付きとなり、後に秀吉の人質となった愛姫と共に前年(1594)上洛し伏見の伊達屋敷にて奉公していた。そのころ喜多は五十才を超えていたが、豊臣秀吉に拝謁しており、秀吉は喜多の才智を愛でて「少納言」といって賞揚していたという。

政宗も喜多の才能を認め留守中の采配を任せきっていた。
ところが、その後に政宗の勘気をくらい、国許で蟄居を命ぜられてしまう。

国許で蟄居を命ぜられたのは、次の事件であったと伝わる。
喜多は上洛した政宗に従い仙台から伊達家の京都伏見屋敷に落ち着き、しばらく経った頃のこと。
政宗の留守中に太閤秀吉が訪ねて来たとき、好色な秀吉は色白で美しい侍女に目をつけ、その侍女を譲ってくれと難題を突き付けた。
政宗留守中につき、喜多はこの厄介な要求の処理に困ったが、秀吉が好色であり気に入った若い女を召し上げていることを知っていた身としては、時の権力者には逆らえずやむなく彼女を太閤秀吉に渡してしまった。
帰宅した政宗が激怒し、「主人の儂に断りもなしに、秀吉に渡すとはどういう了見か」と、喜多に刃を向けようとした。

その時、喜多は平然と「あの好色な太閤秀吉様の要求と侍女への情け、お家にとってどちらが大切ですか。咄嗟の判断で侍女を渡した私が間違っていると思うならお斬りなされ」と、毅然として反論したという。
さすがの政宗もこれには「……」反論できず、彼女に蟄居を命じたという。

以後、喜多は異父弟の片倉景綱が城代となっていた佐沼城外に一旦は籠居し、次いで城主に異動した景綱に従い亙理城外に移った。
慶長七年(1602)、景綱が白石城主を拝命されると、共に従って移住した。
そして刈田郡蔵本邑勝坂に喜多庵を構え、そこで喜多は余生を過ごした。
喜多は慶長十五年七月に七十二才で没した。
墓は宮城県白石市の片倉家墓所にある。円同院月隣妙華大姉と号した。

後に、愛姫の願いにより愛姫の従兄弟である田村宗顕が白石に移ると、その縁により伊達忠宗公の命をもって宗顕の息子・田村定広が喜多の名跡を嗣いで「片倉定広」と称した。

のち定広の正室となるのが真田信繁(幸村)の娘、阿菖蒲で、片倉小十郎重長の後室阿梅の妹である。この片倉家は仙台藩士として生き永らえて現在に続いている。

慶長元年(1596)

四月、政宗御曹司の兵五郎、太閤より諱を一字賜り秀宗と称せられた。

従五位下に叙し、侍従に任ぜられた。

閏七月夜半、伏見を中心にした大地震で伏見城が倒壊し、多くの死者を出した。太閤は十町ほど北東の木幡山に築き直すことを命じ、諸大名に諸役が仰せ付けられた。

十二月 政宗も参加していた木幡山伏見城の普請が完成した。

城普請中に政宗の伏見屋敷にて秀吉を饗応した。

この日は普請中なので、秀吉は礼服を着用せず、広袖の羽織、赤裏の小袖を着て入来し、御数寄屋で饗膳、御茶を差し上げ、書院において七五三の盛膳を饗した。秀吉は老松を舞い、政宗は太鼓を打った。茶湯の御相伴は前田利家であった。

この日、政宗は従四位下に叙し、右近衛権少将に任ぜられた。

○綱元の帰参、成実の出奔

慶長二年(1597)

政宗は伏見屋敷で年賀を祝った。

太閤殿下から政宗公へ「茂庭石見の顔が久しく見えないが京へ上らせていないのか。登城してわしに顔を見せろ」との催促があった。太閤は政宗に伏見屋敷定詰めの中千軒を立てるよう命じていたので、綱元もその中に入っていると思っていたのだ。

政宗は、綱元の出奔を明かす訳にはいかず、「このたび上るよう命じたので御目見えにお出しする」と答えるしかなかった。

政宗は、今井宗薫を高田氏宅に寄留中の綱元のもとに遣わし、登城するよう命じた。だが綱元は、勘当された者が登城する理はないと承知せず固辞した。今井はこの旨を伝えると政宗は、「何分罷り出るように頼みいる」と伝えた。今井は再び綱元を訪ね、「御出でなきは政宗公のために宜しからず、譜代の臣として主人の落ち度を目前に見るべきではない。ここは了簡あるべきところ」と申し出ると、綱元は「是非なく」政宗公の屋敷に御出でになって公と対面した。

政宗の指示により、綱元は太閤に熊皮十枚を献上して殿下に御目見えし、殿下の懇ろの御意をいただき懇談し食事を賜った。

太閤への御目見えは首尾よくできたが、政宗公よりは勘気御免の沙汰はなかった。ある夜、伏見中に騒動があったとき、綱元はすぐに屋敷に駆け付けて次の間に控えた。公が仰せには、「御家中大勢なりと雖も思し召しの通りに届けたる者少なし」と。「今夜も騒動に就いて勘当の内なりと雖も、御次の間まで相詰めたる様子なり」と御悦喜あり。今井宗薫より、近々御勘当御免あるべき旨が遣わされ、十日ほど後に、御勘当御免が綱元に伝達されたという。

こうして、太閤の取り持ちによって、綱元は政宗に帰参を許され、再び政宗の片腕として手腕をふるうことになった。

綱元は帰参にともない、香の前を政宗に献じた。

「京女の香の前は私めには相応しいおなごではござりませぬ。御屋形様の元にお預け致しますので、何卒お側に置いてやってください」とでも言上したのか。

綱元と香の前との間で事前にどのような会話があったか、今となっては知る由はないが、女子がいとも簡単に遣り取りされる時代であった。

政宗に献上された後、香の前は伏見の伊達屋敷で暮らすことになった。

後に、香の前が政宗の落胤付きで綱元に下げ渡されたあとは、綱元は生まれた子供二人を実子として大事に育てあげ世に出したことは後の記録に出てくる。

慶長三年(1598)

政宗は伏見屋敷で二年続けた正月を祝い、三月は秀吉の醍醐の花見を楽しんだ。

茂庭石見には、長女・津多が伏見屋敷で誕生した。

茂庭石見の子供として育てられたが政宗の落胤であった。

津多は、後に原田甲斐宗資に嫁ぎ、寛文事件で知られる甲斐宗輔を産むことになる。

この年、伊達成実が出奔した。

時期、理由には諸説あるが、「治家記録」によると次のようである。

——伏見において出奔し、相州小田原の粕谷邑(伊勢原市)というところに退去した。

理由は、成実が毎度の戦陣に武功があったにも拘わらず、領内において伊達政景、石川昭光より小身であったことを「連々不快ニ思ハレ、且ツ故アリテ伏見ヨリ紀州高野ニ引キ退カル」とあり、待遇上の不満があって出奔したのである。

成実の父は十五世晴宗(政宗祖父)の同母弟の実元であり、政景と昭光は十六世輝宗(政宗父)の同母弟である。

共に伊達一族であり、家柄としては同等であったが、政景と昭光は政宗からすれば直接の叔父であるから、血縁関係は成実より深い。

かつ政景は留守家の当主、昭光は石川氏の当主で、半独立の外様大名的家臣である。政宗としては、身内(いとこ違い)の重臣である成実よりも知行を多くしたのであって、成実を軽視したのではなかった。——

成実の出奔については、自身の回想録『成実記』でも明らかにしていないので真相は不明なところが多い。

出奔に至った他の理由として、待遇問題の延長にある席次問題が挙げられる。秀次事件で伊達氏が太閤秀吉に誓紙を差し出す際に、石川昭光の席次が成実よりも上だったことがきっかけとされる。

政宗は在所の重臣の妻子を召し連れ、昭光の嫡男・義宗もまた京都伏見屋敷に上っており、この時在京した伊達家重臣十九人の連判誓詞文を提出したのであった。

連判誓詞文を見れば、御一門筆頭として石川昭光の嫡男・中務大輔義宗の署名が始めにあり、成実は二番手であった。

成実にとっては、石川氏、しかも嫡男で十才も若造の義宗が筆頭署名したことに我慢がならなかったのではあるまいか。

——政宗は桑折点了齋・蟻坂丹波をして二度も成実を説得したが聞き入れなかった。其の使者三度に及んだ時、成実の家老の羽田右馬助に、家中の者を角田の城から退去させるように命じ、自身も角田に赴いて後始末をして行方をくらました。

因って政宗公より、岩出山留守居屋代景頼に、「成実家中に引き退くよう下知すべし、若し異議に及べば討ち果たすべし」と仰せになられたので、景頼は人数を率いて角田に赴き下知した。右馬助は私宅に籠り、右馬助以下男女三十余人は討死し、残りの者は景頼の下知に従い主君政宗に奉公を続けた。

右馬助に同意の者は、皆出奔して角田遂に落去す云々。成実出奔セラル、年月不知。蓋シ此年(慶長三年)ノ事ト見ヘタリ。角田落居マノ事モ委シクハ不伝。——

毛虫の前立て兜と同様に、決して後に引かない頑固で意志が強い成実に対して、政宗は何度も成実に戻るよう、小十郎などを使って帰参命令を出していたが、成実の決意は固く、ついに政宗も成実の角田城を召し上げてしまったのであろう。

六 戦国時代の終焉

○太閤秀吉の薨去、家康の野心

慶長三年(1598)八月十八日、太閤秀吉が伏見城で六十三才の生涯を終え、洛東の阿弥陀峰に葬られた。

若君秀頼が幼少であったので、天下の仕置は徳川家康・前田利家・毛利輝元・浮田秀家・上杉景勝の五大老の合議で執行されることになり、執事としては前田玄以・浅野長政・増田長盛・石田三成・長束正家の五奉行が任ぜられた。政宗は、太閤秀吉の遺物として脇差の鎬藤四郎を賜った。

太閤の死によって、朝鮮に渡っていた日本軍は密かに兵を帰した。結局、朝鮮出兵は何ら得るものがない無謀極まりないものでしかなかった。豊臣政権を支える国際感覚のある参謀がいなかったというべきで、文治派石田三成ですら、老耄(耄碌(もうろく))が昂進した秀吉を諫めることはできない言いなりの参謀であり、むしろ豊臣政権を崩壊へと導く契機になったともいえよう。

朝鮮の役での武功派の功績を矮小化して報告したこと、秀次事件で根拠のない推測に基づき讒訴したこと、これが、文治派石田三成が武功派に対して超えることのできない劣等感のなせる業だったと筆者は考えている。

秀吉の死によって、武功派と文治派の対立が顕著になり、満を持したというべきか武功・文治に長けた狡猾な、いわば政治屋の徳川家康が一枚絡んだ、日の本の歴史上新たな展開が始まったと見ることができる。

政宗にとって秀吉は、自分にな「人たらし」の妙など惹きつけられるものを多く持っていたが、秀次との一件では、厭な面ばかりを見せ付けられた格好になった。三年前の事件当時、秀吉の詰問使が政宗のところにやって来た時、「いかにも自分は秀次公と親しく付き合ってきた。だが、聡明な太閤にして関白職を譲る際に、秀次公にお目がね違いで譲っており、遂には自害させたのであるから、独眼の自分が見誤って親しく交わったのは道理ではないか」と、開き直って言上したというのである。

現代でいえば、「謀反を起こすような甥御の秀次さんを関白に据えたのはどこのどなたでしたっけ」という痛烈な皮肉になる。

この通りに言ったかどうかは別として、元禄九年に平戸四代藩主の松浦鎮信が残した『武功雑記』に逸話が載っており、政宗の言い分に一理あるのではないかと思う。

慶長四年(1599)

政宗と正室愛姫との間に生まれた長女・五郎八姫は、この頃、六才になっていた。男児が欲しかったとみえ、五郎八という字を与え、姫ならば「いろは」と読ませようとしたというのが、専らの巷の説である。

徳川家康が太閤秀吉の法度を破り、大名家と勝手な婚姻を結び始めたのはこの頃であった。

家康は政宗の正室の娘・五郎八姫を迎えることで今後の結びつきを強めようとし、正月、今井宗薫を介して家康の六男忠輝(後の松平忠輝)との婚約を成した。五郎八姫は文禄三年生れであるから、当時六才で完全な政略縁組であった。この頃、政宗の男子は兵五郎一人であり、秀吉の養子となり秀宗と名乗り、大坂城で秀頼付きとなっていた。

十二月には、政宗と愛姫との間に待望の嫡男虎菊丸が生まれた。後の徳川二代将軍秀忠の諱の一字をもらい、忠宗と名乗るようになる。後の伊達家第十八代当主、伊達忠宗である。

○関ヶ原の戦い、東北関ヶ原(慶長出羽合戦)

慶長五年(1600)

正月、大坂屋敷にて正月の御祝儀。

七月、政宗の重臣伊達成実が二年振りに相州小田原より戻り、政宗にお目見えし帰参を許された。最後は大久保忠隣に寄寓していたらしい。

浪人生活の間、成実が徳川家康や上杉景勝から高禄で遇すると招かれたが、一切これに応じていなかったのである。

帰参に当ってどのような遣り取りがあったのか仔細はわからない。片倉小十郎が相州糟谷の小さな禅寺に逗留していた成実を訪ねて説得するなど、

小十郎が政宗との間に立って奔走したようだ。あつけない帰参であった。
遺恨のあった石川昭光との仲も回復して石川軍に加わった。

この頃、秀吉亡きあとの中央政局は大きく動いていた。
太閤秀吉亡き後、五大老のひとり、徳川家康が天下を篡奪しようと野心を露わにし、己の勢力固めに乗り出した。

家康は対抗勢力の前田利家をまず籠絡し、会津に帰国し戦備を固めていると噂がある上杉景勝には上洛を催促していた。

また、政宗は、会津に留まり家康に従わなかった上杉景勝を牽制する命を受け、六月十四日帰国の途についた。

相馬路へかかった頃、屋代勘解由景頼が五百騎を従えて相馬境まで迎えに出た。そこから名取郡北目城(仙台市太白区郡山)に帰着した(七月十二日)。

七月二十四日、政宗は上杉の所領刈田郡白石城を攻撃し、翌日、降伏させた。
白石城は、元々、伊達氏家臣となった白石氏が古く鎌倉時代から居住し、秀吉の奥州仕置で没収されるまでは伊達領であった。

政宗が白石宗実に預けていた城で、蒲生氏郷を経て、上杉領となっていたのである。

この時の上杉軍の白石城代は、上杉二十五将に数えられる甘粕景継であった。

二十四日に政宗は川向うの平山に本陣を構え攻撃を開始した。

屋代勘解由は城下町や外曲輪、三の丸に火をかけて炎上させた。

もともと支配していた城だったため、伊達軍は城の地理に明るく、翌日午前までには本丸を除く全城を支配した。

石母田大膳は騎下の兵士六人と一番乗りで討ち入り、伊達藤五郎成実、石川昭光が兵二千を以って攻め入り降伏させた。

政宗は叔父の石川昭光に守備を任せて北目城に引き揚げた。

実は、白石城の攻撃に際して、天正末期の一揆以降消息が知れなかった葛西氏のことが「治家記録」に記載され、今日に知られることになった。

「上杉軍の白石城守備隊に葛西長三郎、その家来で富沢吉内という人物がいて、二人は二千石という高禄で召し抱えられていた」というのだ。

加えて、「葛西長三郎は葛西没落後、上杉景勝ニ属シ居レリ」との記述もある。

葛西氏系譜から長三郎は葛西氏最後の当主晴信の子・長三郎と分かる。

富沢吉内は、仙台藩士熊谷氏の家譜に「拙者養祖父熊谷伯耆儀、先年富沢吉内家来ニ御座候」とあり、一揆後行方不明であった、三迫岩ヶ崎の五代城主にして葛西氏家臣の富沢日向貞連と推察されるのである。

家康が上杉景勝を討つことに決し大坂を発したとの知らせが届く中、上杉軍も臨戦態勢を整えつつあったが、徳川本隊が七月二十四日、下野小山より引き返しているとの耳を疑うような知らせが入った。

「治家記録」八月三日の条に「大神君小山御陣所より政宗へ、石田治部少輔三成謀反の旨、御朱印の覚書を賜う」とある。
徳川勢が上方を留守にしている隙に石田三成が決起挙兵したことが分かった。
いわゆる関ヶ原の戦いの勃発である。

こうした中で家康は、その後も政宗を味方に引き付けておくためにお墨付きを与えた。八月二十二日付けの「百万石のお墨付」の判物である。
その文面は次の通りである(家康領知覚書(仙台市博物館所蔵))。

—— 覚 一 刈田、一 伊達、一 信夫、一 二本松、
一 塩松、一 田村、一 長井 右七ヶ所 御本領之事候間
御家老衆中へ 為可被宛行進之候 仍如件

慶長五年八月廿二日 家康 (花押) 大崎少将(伊達政宗)殿 ——

この合計知行高四十九万五千石余に、当時の所領約五十八万石を加えると百万石を超すことになる。そのために「百万石のお墨付」と呼ばれる。
花押があるが明確な「知行宛行状」ではなく、さらりと「覚書」としており、「メモなので必ずしも保証はしないよ」といっているようにも思われるのである。
政宗をどうしても味方に付けておくための家康の深謀遠慮というところか。

上杉軍の直江兼続は、この隙を利用して、徳川方と意を通じた最上義光を叩き潰しておこうと図り、九月九日、二万の大軍を率いて米沢城を発ち山形城に向った。

途中十一日、畑谷城を攻め焼き払ったあと、次々に最上方の小城を落とし、あとは長谷堂城、山形城を残すのみとなった。

十七日頃、長谷堂城も本丸を残すばかりとなり、水も乏しくなり、義光は嫡男義康を北目城の政宗へ派遣し援軍を願った。

政宗は伯父の最上救援を決して援軍を送った。

援軍の大將は伊達政景、侍大將には湯目信康はじめ三百余騎を添え、二番大將に津田豊後、三番大將に斑目太郎左衛門、総勢三千五百人で長谷堂城に向かい、二十一日には山形城の東方に布陣した。

茂庭綱元は、家督を次いだ良元とともに第一陣の留守政景の指揮下に入り、政景の命により別働隊を率いて長井方面へと進攻した。

二十五日、茂庭石見綱元の別働隊は足軽二百人を増員され、上杉領の刈田郡湯原・新宿を攻略すべく遣わされた。

二十六日に湯原城を落とし、最上氏加勢に赴くべく高畠城へ向けて兵を進めていた。この時の軍勢は、馬上九十騎、長柄二百本、弓譜百張、鉄砲二百五十挺。

一方、政宗自らは上杉から奪い返したばかりの白石城から出陣した。

伊達・信夫口に進出、叔父・伊達政景には直江勢のいる山形城を、片倉小十郎・石川昭光には梁川城、桑折城を攻めさせていた。

二十九日より合戦が始まり、伊達の援兵は剛の者ぞろいで一步も引かず、須田というところで打首二千を挙げた。

この日、長谷堂城の合戦では、最上方の武将志村光安が上杉方の武将上泉泰綱を討ち取った。上泉泰綱は、剣聖・新陰流創始者で上泉伊勢守信綱の孫といわれる武将である。志村光安は最上家譜代の家臣で、この武功により戦後、亀ヶ崎城と改称した東禅寺城三万石を賜った(伊達便覧誌)。

九月三十日、家康からの十五日付け書状で、関ヶ原で家康東軍が三成側西軍に勝利したことを知り、政宗は全軍に撤退を命じ北目城に帰還した。政宗にとっては、上杉勢を追い散らし伊達の旧領を再び回復しようとした計略が、見事に失敗したのであった。

書状の文面には、

——今十五日午の刻、濃州山中に於いて一戦に及び、備前中納言(宇喜多秀家)・島津・小西・石治部(石田三成)人衆ことごとく討ち捕り候、直ちに佐和山迄今日着馬候、大柿(大垣)も今日則捕り(乗取り)候、御心安かるべく候、いよいよその様子、いよいよ御仕置などもつとみに候、恐々謹言、

九月十五日
大崎少将殿

家康(花押)

とあった。

上杉軍は、石田方敗北の報せが到着すると、景勝は直江景続に早々の退却を命じた。十月一日、直江景続は退却を開始したが、最上の軍勢や伊達軍と激戦を繰り返しながら、殿軍を勤めた直江軍は米沢に退いて行った。この時の直江景勝の見事な退却振りは、後世までの語り草になったという。

こうして、東北関ヶ原の上杉氏包囲戦は九月九日から、関ヶ原で東軍が勝利した十五日を超え、十月一日まで続いて終わった。後世、慶長出羽合戦と称された。現代の感覚でいえば、通信手段がないが故に半月もの間、無駄な消耗戦を戦ったということになる。

このあと、戦国武将・独眼竜政宗を彷彿とさせる戦さがあった。

第一は政宗による福島城攻撃。

政宗はかねてから自ら最上へ出馬して上杉景勝と決戦しようとしていたが叶わず、江戸留守居の本多佐渡とも連絡を取り合っていたが無視され、家康側が関東口から会津の上杉を攻撃する様子もないので、自身で攻撃することを決意した。

政宗は十月三日、北目城を出馬し白石城に入り、五日に上杉領の伊具郡国見山に陣を取った。片倉景綱、茂庭綱元・良元父子、屋代景頼、石川昭光を配置した。翌日、本庄繁長の守る福島城攻めにかかり、落城が時間の問題であったが、メリットがないことに考えが及んだのであろう、七日には城攻めをやめて北目城に兵を戻した。

筆者は「今ここに至ってそこまでするか」と、北目城への帰兵は理解し難いことである。

第二は、和賀一揆(和賀兵乱)の画策。

和賀郡の国人領主で小田原に参陣しなかったため、秀吉により改易された和賀忠親が、政宗の保護を受け伊達領の胆沢郡に住んでいた。

忠親は、領地拡大の野望を燃やす政宗の密命を受けて南部領(南部利直)の花巻城を攻め、十月初めには岩崎城を奪って籠城した。

政宗は水沢城の白石宗直(宗実の養嗣子)に命じて和賀氏に加勢させたが、冬が到来し積雪により戦いは一時中断した。

翌六年雪解けの三月、南部軍は攻撃を仕掛け、四月二十六日になって岩崎城を陥落させた。政宗の謀略が、南部利直、最上義光の知るところとなり、家康に訴えられた。

政宗の気概と器量を認めた家康は、既に伊達氏と姻戚を結んでいたこともあり、改易などの荒療治の手段に出ずに、忠親を召し出して質そうとした。

忠親は上洛の途中、仙台国分寺において政宗の手の者により暗殺された。

忠親がありのままを申告してしまえば、折角これまで手に入れてきた所領を没収されてしまう、それを避けるには忠親を殺すしかない、と、政宗は決したと言われている。

「治家記録」では、政宗の勧めにより自害したとされるが、死人に口なしである。

慶長六年八月廿四日の条に「南部領和賀先ノ領主和賀主馬、宮城郡国分尼寺ニ於テ自殺ス。是今度主馬ヲ伏見へ差登スヘキノ旨、大神君ヨリ仰下サルニ就テ、相登セラルヘシト思召サルノ處ニ、今日自殺ス。因テ此旨、大神君へ言上シ玉フ。」と、淡々と記しているのみである。

和賀忠親はまだ二十六才の若さであった。忠親と家来七名の墓は、国分尼寺(仙台市白萩町)本堂の裏手にある。

暗殺、自刃のいずれの場合でも、事ここに至っても領地拡大の野望を燃やし続けた政宗の面目躍如といったところであるが、相変わらず薄氷を踏む際どい賭けに出たというべきであろう。通説では、政宗が忠親に詰め腹を切らせたと言われている。

○徳川の天下、政宗の新しい国造り

関ヶ原の戦いが家康の勝利に終わり、天下は徳川の手に戻ることになった。

政宗は、これまでの知行地に、白石城を中心とした刈田郡二万石が加えられ、後に近江国蒲生郡など飛び地二万石を加え、結局六十二万石を領するだけに終わった。

いわゆる「百万石のお墨付き」は反故にされてしまったのである。

この微禄の加増は、家康がやはり政宗の不正を許さなかったのである。

この論功行賞に政宗は、和賀一揆騒動の失敗に負い目を負っており、「百万石のお墨付き」の履行を、この時点では要求しなかったようである。

戦国大名の野望は野望として、自分の犠牲になった和賀忠親のような家臣ではない武人や、多くの家臣の霊を弔う人間のところが、武人政宗に残っていたと信じたい。

この論功行賞は、直近に起きた和賀忠親の反乱が政宗の謀略によることを、家康が知悉していたからであろうと思うのだが、専門家の見解を引用する。

反故にされた理由について、元仙台市博物館館長の佐藤憲一氏は、「和賀一揆騒動が理由とは考え難い。それは反故にするための家康の口実に過ぎない。反故の理由はただ一つ、家康の政宗に対する警戒心であろう。覚書の実現によって百万石の大名になったときの政宗は家康にとって脅威に他ならなかった」と、著書『素顔の伊達政宗』で述べておられる。

また、政宗は決して泣き寝入りしたのではなかった。
少し長くなるが氏の著書から引用して要点を紹介させていただく。
——政宗はその後機会あるごとに家康に対してその代償をもとめていく。一回目は慶長七年五月の相馬氏改易事件のとき、二回目は慶長十九年の大坂冬の陣のとき、最後は家康没後の元和八年九月の最上氏改易事件のときである。（途中略）

相馬氏改易事件の最中、政宗が家康側近(本多正信・正純父子)に働きかけ、没収された相馬氏の領地を手に入れるべく画策したことを示す書状が残っている。
改易中止が決まった直後のもので、仙台にいる側近・仙台留守居の茂庭綱元に宛てた手紙から、自分の領地の近くに覚書の不履行分の代償地を手にいれようとして動いたことが知れる。

慶長十九年の大坂冬の陣のあと十二月に、長男で侍従の秀宗に宇和島十万石が与えられた。今回の恩賞か覚書の不履行の借りを返したものと云われる。
この背景となった、政宗が本多正純に宛てた書状(同年十一月)によれば、長年無禄で奉公している長男秀宗の待遇に触れ、知行の下賜を求めている。——

「治家記録」慶長五年十一月十三日の記事によれば、政宗はこの年の七月末に家臣山岡志摩重長を家康への使者として江戸に派遣していたが、この日に帰城した。
本多佐渡守正信を通じて家康の許に、宮城郡国分の千代城を再興し伊達の本城にしたい旨を申し入れたのであった。

——宮城郡国分ノ内千代城ヲ再興セラレ、公御居城ニ成シ玉ヒタキ旨、
本多佐渡守正信ヲ以テ大神君へ仰上ゲラル。——とある。
これは、使者を出したのが七月末であるから、仙台城の築城を天下分け目の戦いの中で決意したということになる。
状況をよく見究め、天下の覇権を握りつつある徳川家康に了解を求めたのは至極当然のことである。

しかし家康からはなかなか返事がなかった。
この間、八月二十二日に家康から、「百万石のお墨付」の判物を得たことになる。

九月十五日には東軍勝利したという書状を半月後の三十日に受けた政宗は、十月十九日、今井宗薫を介して家康の回答を催促していたが、十一月、山岡志摩が築城を認める返事を持って帰国した。

こうして、千代城を修築して新しい居城とすることが正式に決定されたのである。千代城が立地する青葉山は、南は竜の口の溪谷、北は沢、西は奥行き深い山林、東の前面は六十四米の断崖で、その前を広瀬川が流れる天然の要塞である。

慶長五年も押し詰まった十二月二十四日、政宗は宮城郡国分の千代城に入り、仙台城普請の縄張始を行い、地名の文字を千代から仙台へと改めた。昔、この城の近くに千体仏があつたので千体と称し、その後、千代と改めたところで、千代城は、国分の前主「国分能登守盛氏」先祖代々の居城であつた。この晩、普請初めのご祝儀を祝い、高砂、田村、野宮、養老、猩々の御能五番が演じられた。

政宗は仙台の文字を、唐の詩人 韓翃の七言律詩『同題仙遊観』の冒頭句にある「仙臺初見五城楼」から採ったというのが有力である。

同題仙遊観

仙台初見五城桜	仙台 初めて見る 五城桜
風物凄凄宿雨収	風物 凄凄として宿雨収まる
山色遥連秦樹晩	山の色は遥かに連なる 秦樹の晩
砧声近報漢宮秋	砧の声は近く報ず 漢宮の秋
疎松影落空壇浄	疎松 影落ちて 空壇浄く
細草春香小洞幽	細草 春香ぐわしく 小洞幽なり
何用別尋方外去	何ぞ用いん 別に方外を 尋ね去るを
人間亦自有丹丘	人間にまたおのずから丹丘有り

この年の暮、石見綱元は政宗公より陸奥国栗原郡二迫文字に於いて、隠居料として知行百十貫文(千百石)を賜わり、翌年、茂庭家の足輕六十人を岩ヶ崎に移した(「綱元君記」)。

これは、茂庭家譜代の二男、三男を自前の武士として召し抱え弓を持たせたもの(松山町史)とされる。筆者の推測であるが、自前の足輕に土地と屋敷を与えて作物を作らせ、道普請、火消し、館ほか領地内の施設の補修などで賃仕事もさせ、自給自足の生活をする中で、有事には出動できる足輕部隊を目指したのではなかろうか。この百十貫文は良元が継いだ赤荻の五百貫文とは別で、綱元の隠居料であつた。

この年、綱元四男が伏見の伊達屋敷で誕生した。幼名は又次郎、通称は又次郎、右近、伯耆。実は、実父は政宗、母は香の前であつたが、のち、綱元の実子として育てられた。

○仙台北城普請

慶長六年(1601) この年、政宗は三十五才になった。

正月、名取郡北目城にて御祝儀あり、仙台北城の普請が始まる。

普請奉行は、惣奉行後藤孫兵衛信康、川島豊前景泰・金森内膳隠岐・原次右衛門・真柳十介らに仰せ付けられた。

仙台北城下の屋敷割りには、政宗自身が絵図を描いて川島豊前、金森内膳に仰せ付けられた。政宗は部下に任せず新しい構想で仙台北の都市計画に着手したのである。

街割、すなわち都市計画の基本は、仙台北城の大手門からまっすぐ東、広瀬川に新しく架けた仙台北大橋の延長線上に設定され、そこを大町通りとして東西の幹線とし、これに芭蕉の辻で南北に直交する国分町から南町へ至る南北幹線が設けられた。

以後、この東西幹線と南北幹線の二つを基準として、それぞれ町と屋敷が割りだされたのである。侍屋敷の街割には「丁」、町人街には「町」で示した。

上級家臣の屋敷は、仙台北城近くの川内、片平丁、中島丁に配置され、広瀬川を挟んで仙台北城がある川内を防御するような配置である。

中級家臣の屋敷は、奥州街道の東側に南北に走る東一番町から東六番丁までと、城下の北部の奥州街道の西側で東西に走る北一番丁から北七番丁までの各番丁に配置された。

下級家臣や召し抱え職人などは、城下の周縁部に配置されている。

また、寺院は北部の北山、東部の国分寺跡に集中して配置された。光明寺、東昌寺、輪王寺、覚範寺、資福寺、定禅寺、松音寺など伊達家由緒の寺が、米沢から、或いは岩出山から、さらにはもっと古い伊達郡から移された。

北部の北山には、臨済宗の北山五山といって、光明寺、東昌寺、覚範寺、資福寺、満勝寺が薨を並べた。満勝寺(伊達家の始祖、伊達朝宗の菩提寺)は、六十年後には現在の柏木(北八番丁の通り)に移転している。

町人街のうち、大町三、四、五丁目から荒町までの六町は、特に「御譜代町」と呼ばれ、仙台北城下の中枢を担っていた。すなわち、政宗が城を米沢から岩出山へ、さらに岩出山から仙台北へ移す過程で、常に政宗に従って町を移動させてきた、いわゆる譜代町人の町々なのである。

「正保二・三年製作奥州仙台北城絵図」と現在の地図を並べると、街割は殆ど変わっていないように見えるのが驚きである。

九月に政宗が上洛する際には、綱元はすでに普請が進んでいた仙台北城留守居を命ぜられ、政宗上府中の藩政を委任された。

文禄四年、嫡男の良元に家督を譲り隠居していた綱元の現役復帰である。

これまでは、屋代勘解由景頼が岩出山御留守居を勤めていたのに替えて、綱元へ仙台北城留守居が委ねられることになった。

十二月、川島豊前景泰が監督・造営していた、大手門と城下の大町を結ぶ広瀬川大橋(広さ五間、長さ五十間)が完成した。
擬宝珠の銘には、政宗の都づくりの理念が高らかに謳いあげられている。

仙台橋

津梁大哉 直昇仙台 虚空背上 車馬往来
仙人橋下 河水千年 民安国泰 孰与堯天
慶長六年臘月吉辰 藤原政宗

架橋を祝し仙台の末永い繁栄を読んだものであるが、この銘文は政宗が覚範寺の高僧虎哉宗乙に作らせたものであった。
江戸時代初期に洪水で流されたが、大正十三年に広瀬川下流の畑で発見された。青銅製高さ六十糎で、銘文がはっきりと読める(「仙台藩物語」)。

慶長七年(1602)

政宗は正月を伏見屋敷で祝い、大坂にお出ましになり、秀頼公に謁見した。

三月、仙台城廻りの普請が進み、綱元は政宗公より仙台城下大手西脇に仙台屋敷を、また、川内山下に下屋敷を賜わった。

家督の良元は片平丁大町頭に仙台屋敷を賜わった。

大手門の東側には、仙台に駐在した幕府の「国目付屋敷」が二区画あった。

三月十六日、石見綱元屋敷の前、仙台城御堀普請場に於いて、仙台城建設に携わらせていた小者の者どもが普請奉行金森勘平を撃殺する事件が起きた。
その発端はその朝、綱元の屋敷前の溝に寝ていた小者を金森勘平が召し捕らえたことから、小者が蜂起したのであった。

この騒動を鎮めるために「切り殺せ」と命令したのが茂庭綱元であったとされる。

「治家記録」は、「御小人騒動」として

——小者達は愛宕神社の崖下にあった覚範寺に逃げ込んだが、窮地に追い込まれた小者達は寺に火をつけ、駆け付けた近くの片倉備中景綱の家臣らは長道具或いは鉄砲を以って攻撃し、一人残らず追捕し、凡そ首百三十一を挙げた。

(覚範寺は政宗公の父輝宗公の菩提寺であり、政宗公の若き日の学問の師であった)住持の虎哉和尚が、偶々此の日は留守中の騒動であった。覚範寺は、この時節は北山へ移管前のことで、愛宕別当誓願寺の境地にあった——とだけ記している。

「治家記録」ではこれ以上の仔細は記していないので真相は不明である。
後世には、綱元のシナリオであったとする説が流布されている。

たとえば、「城の抜け穴などを造る作業に当たった者たちを口封じに抹殺するために、騒動のきっかけも、それに加わるようにけしかけたのも、密かに紛れ込んでいた黒巾木の者の仕業だった」と。

黒脛巾(巾木)組とは、伊達政宗が創設したとされる忍者集団であり、『伊達秘鑑』によれば、「政宗公かねて考えあつて、信夫郡鳥屋の城主安部対馬重定に命じて、鼠になれたる者五十人を選び、扶持を与え、これを黒脛巾組と号す。柳原戸兵衛・世瀬蔵人という者を首長とし云々」とある。

その実態は、ことの性格上ベールに包まれているが、新井白石の『藩翰譜』では、天正十八年(1590)の小田原征伐で、政宗が豊臣秀吉の動向を探索するために太宰金七なる忍びを小田原に潜入させていたという記述がある。

また、仙台藩の「御小人」とは、戦国時代の百姓徴発が次第に常備兵の職制に組み込まれてきたものといわれており、起源については不明である。鎧術に優れた者達の集団で、伊達家四代の時代になると目付の支配となり平時は、雑務や警備を主な任務とし、仙台城の工事にも携わった。職制上は、平士、組士の下位で、足軽らと同じ「卒」に組み込まれた、一応身分のある者で、禄高は低いが殿様から直接指示を受ける仕事もあった(仙台藩歴史事典)。

九月、本多佐渡守正信より、諸大名が証人を江戸に差し上げるよう通達があり、政宗は「侍従殿(秀宗十二才)を江戸に相下さるべく内意」した。

十月、政宗は江戸屋敷に戻った。

十二月、片倉備中景綱に居城として刈田郡白石城、采地一千三百貫文(一万三千石)を下された。

同月晦日には、伊達成実(実)に片倉備中の元の在所(亘理要害)を居城として下さり、亘理郡のうち二十三ヵ村、六百十一貫文(六千百十石)を下された。

この年は家臣や町人・職人も岩出山からどんどん移住して来た。東西の大町筋、南北の奥州街道筋を始め、町人・職人町に町屋が増えて賑やかになって来た。綱元(綱元)の大手門西脇の仙台屋敷が完成すると、四男又次郎は母・香の前に連れられて姉・津多とともに伏見からそこに移って来た。このとき又次郎三才、津多五才で、形の上では茂庭家の子として成長することになる。

この年、片倉小十郎景綱の嫡子・重長に笑えない事件が降りかかった。綱元(綱元)の僚友片倉小十郎景綱の嫡子・重長十八才が、この七月京都で、「金吾中納言殿、重長の容色の美なるをご覧ぜられご恋慕」したことが大げさになり、政宗公を煩わせる事態になってしまったが、重長は忠言も聴かずに出奔するという事件であった。

『片倉代々記』に載っているが、幕引きの仔細は不明である。

金吾中納言とは、秀吉の養子から小早川隆景の養子になった小早川秀秋のこと。当時としては珍しいことではなかったろうが、二十一才で男色家の秀秋が、相当な美男子であった片倉重長を恋慕するという事件が起きたのである。奥州武士として育った片倉重長にはさぞかし気味悪かったのであろうか。

上手く執り成して上げようとの政宗公の忠言を聞かずに出奔してしまったのであるから、余程錯乱状態に陥ったのであろう。

その後、小十郎重長は、片倉二代目として正室亡き後、関ヶ原から伊達家が匿ってきた真田信繁(通称、幸村)の娘・阿梅を継室として、片倉家を現代に繋いでいる。仙台北山にある青葉神社宮司の片倉家がそれで、ご当主は十六代になる。

七 仙台藩奉行・茂庭綱元

○政宗の仙台入城

慶長八年(1603)

正月、政宗は江戸に、嗣君虎菊丸は大坂屋敷に滞在していた。虎菊丸は五才であったが、伏見において家康公に御目見えした。その後、政宗夫人田村御前(愛姫)と虎菊丸は江戸に下り、初めて秀忠公に謁見した。なお、愛姫は公式文書では、田村御前、田村夫人、田村氏、と表示される。

二月十二日、徳川家康は征夷大將軍に任じられた。

八月、政宗は江戸より帰国し、完成なった仙台城に入城した。政宗三十七才での城持ち大名(江戸幕府)の誕生である。彼が築いた仙台城は、本丸と西の丸からなる本格的な山城であり、天守台はあるが天守閣は持たなかった。政宗が天守閣を造らなかった理由はふたつ考えられる。一つは家康に対する遠慮。ただでさえ標高が高い青葉山の城に天守閣を造れば、江戸城をも睥睨(へいげい)する規模になり家康を刺激してしまう。もう一つは、他を圧倒する山城に天守閣は不要と考えたのではなかろうか。

これらの点で時代の流行に背を向けたが、結果として仙台城は、ビスカイノをして「日本の最も勝れ、又最も堅固なるものの一つにして、水深き川に囲まれ断崖百身長を越えたる巖山に築かれ、入口は唯一つにして、大きさ江戸と同じくして、家屋の構造は之に勝りたる町を見下し」と言わしめるほど、同時代には比類ない堅城となった。なお、ビスカイノはイスパニア人で、慶長十六年に浦賀に答礼使節として来日し、家康、秀忠に拝謁し、帰国にあたり船が難破し、政宗の遣欧使節・支倉常長の船に同乗して帰国した貿易商人である。

政宗の居城を仙台城とする一方、名執政の片倉小十郎景綱を一国一城令が敷かれる中、特例として残された白石城一万三千石の城主に配し、領内南端の守りの要とした。

政宗の三重臣のうち、伊達成実は慶長七年に亙理城主になっており、一門衆である彼は藩政には直接タッチしなかった。

残る二人のうち、茂庭綱元が側近ナンバーワンとして、政宗の絶大な信頼と期待を受けて仙台藩の国づくりに当たった。政宗の官房長官と称される由縁である。綱元は五十五才で、当時としては老境にかかっていたが元気横溢としていた。

片倉小十郎景綱は病気がちのため亙理領内の神宮寺村で療養しており、慶長十年の春になって白石へ移った。片倉小十郎景綱を除けば、豊かな経験と力量からいって、茂庭綱元を置いて他に代わる人物はおらず、国家老の役目に就いたのである。なお、国家老(他藩では城代家老とも)職という固定した職能ではなかったようである。この年、綱元は藩の職制整備の手始めに、藩主を補佐する行政の最高機関として「六奉行制」を進言した。

当時の奉行は、茂庭石見綱元、片倉小十郎景綱、鈴木元信、奥山兼清、屋代景頼、大條実頼であった。

○六奉行執行体制

政宗公の時代に六人の奉行による執行体制が始まった。

藩主政宗の独裁とこれをサポートする綱元の強力なリーダーシップにより、仙台藩の施政は指揮・監督されたといつてよい。

綱元が奉行職(他藩でいう家老を仙台藩では奉行という)に在る間は、政宗の前では奉行の中では常に綱元が上座に座し、敷居を隔てて他の奉行衆が控えたという。

また、綱元が仙台留守居にあるときは特に、政宗との間で密かに重要指示書のみに使用する印章までが決められていたという(「伊達政宗の手紙」)。

こうしたことから綱元は、六人制の奉行職の上位に立ちこれを指導・監督したと考えられる。江戸幕府であれば、綱元が大老、他の奉行が老中という力関係であったろうか。

この年、綱元家督の茂庭良元が松山領(志田郡松山)を賜わり、赤荻より移り、千石城(松山城)三の丸に住んだ。

政宗には、正室田村御前との間に五男卯松丸(後の摂津宗綱)、異母弟の六男吉松丸(後の筑前宗信)が誕生した。

後に綱元が守役・後見となる五男摂津守宗綱らの誕生であった。

仙台藩草創期の行政・司法上で茂庭綱元が果たした役割は大きい。

慶長八年師走の二十五日付けで政宗が綱元に宛てた直筆の書状がある。

——自筆を以って申し遣わし候。

一、この度、金山の奉行衆いづれも届かざる義どもにて候えども、取り分け佐々木五郎兵衛こと、沙汰の限り(言語道断)にて候間、すなわち腹を切らせ申すべき事。女、子ともに成敗仕るべき事。

一、氏家新兵衛ことも届かざる義ども候えども、彼身をば家財以下共に闕所仕り、根源追ひ払い申すべき事。(以下、略) ——

内容は、綱元から金山奉行たちの不届きを知らされた政宗が、彼らの厳格な処分を綱元に指示したものである。

江戸時代初期は、全国の主な金山を直轄地とした幕府は勿論のこと、各大名は領内の金山開発に熱中した。こうした折に、仙台藩領内の金・銀・銅などの鉱山を管理する役人の不正が、政宗の逆鱗に触れたのであった。

財政基盤の確立は焦眉の急であったから、金・銀を産出する鉱山は文字通り宝の山であった。

主な金山は政宗のこの時代には掘り尽くされたといってもよく、宝の山の管理者としての金山奉行は厳格な管理と重い責任を負わされていた。

佐々木五郎兵衛以下の役人一人ひとりに、罪の軽重に応じて具体的な処分を命じるこの手紙には、信頼する家臣に裏切られた政宗の怒りが満ちている。佐々木五郎兵衛には極刑としての切腹を申し渡し、その家族には罪がなくても主人が重罪につき罪科に処せられた。いわゆる連座制の適用である。

氏家新兵衛には闕所(土地、家財没収)のうえ、根源追ひ払い(一族追放)すべしと、怒りを込めた申し渡しであった。

この年には、後で岩ヶ崎城主に就いた政宗の五男、六男の誕生があった(既述)。後世に編纂した故か、「治家記録」では以下のように不明点もある。

「北御方(田村夫人)、武州江戸御屋形ニ於テ御産、公ノ五男(第六子)御誕生、童名卯松丸ト称ス。是撰津殿宗綱ナリ。御守トシテ茂庭石見綱元ヲ相附らる。御産の月日等并ニ御守ニ石見ヲ相附ラル年月等不知。

公ノ六男(第七子)江戸御屋形ニ於テ御誕生、童名吉松丸ト称ス。是筑前殿宗信ナリ。御母ハ家女房ナリ、御誕生月日不知」とある。吉松丸の母は後世、柴田氏とされた。

○綱元岩ヶ崎城主後見を兼任

慶長九年(1604)

正月、政宗は新しい仙台城にて初めての慶賀の儀を祝った。

三月、政宗公の五男卯松丸(母は政宗正室)は二才、綱元へ評定役の職に留まったまま守役を仰せ付けられた。

卯松丸(撰津守宗綱)は陸奥国栗原郡三迫岩ヶ崎に於いて知行三万石を領し、初代の岩ヶ崎城主になった。

綱元は仙台藩奉行職筆頭(国家老)として、岩ヶ崎城主伊達撰津守宗綱の後見を兼務し、城主不在の岩ヶ崎と仙台を頻繁に往復するようになった。

岩ヶ崎城(鶴丸城)は、南北朝の十四世紀後半に葛西氏家臣の富沢道祐によって築城されたとされ、そこを普請して移り、綱元は東端に位置する曲輪「蛭子館」を居館とした。城は、この頃には大分朽ちており、大普請がなされたものと思われる。

なお、後年の一国一城制が敷かれるまでは、少なくとも伊達氏二代までは、岩ヶ崎城主と呼称されていた。寛永五年頃、仙台藩地方(じかた)知行制が敷かれると、要害・所拝領の形で拝領を受けてそこに住み、領主と呼称するようになった。

綱元三男の茂庭正次郎実元は、政宗の近習として召し出され百貫文を知行していたが、卯松丸の岩ヶ崎拝領に伴い、十六才で政宗から御膳番(台所奉行)を命ぜられた。茂庭綱元、実元は親子で岩ヶ崎城に勤めることになったのである。

栗原郡三迫岩ヶ崎領は、茂庭綱元にとって生涯にわたり深い関係をもった土地なので、少し詳しく地理と歴史を記しておきたい。

この栗原郡は古くからの地名で、『続日本記』に「神護景雲元年(767)陸奥国栗原郡ヲ置ク」と見える。

また、『吾妻鏡』によれば、岩ヶ崎は古来、「黒岩口」と称された交通の要衝であって、「文治五年(1189)八月、藤原泰衡が源頼朝軍勢の進入を防ぐため黒岩口を固めた」と記され、岩ヶ崎城の付近と比定されている。

岩ヶ崎領は栗原郡の北部にあって、奥州上街道(岩出山～岩ヶ崎～一ノ関)、羽後岐街道(岩ヶ崎～羽後子安)により、岩手、秋田へ通じる交通の要衝であった。現在の宮城県栗原市栗駒岩ヶ崎である。

地方知行制を敷いた仙台藩では、「城、要害、所^{ところ}、在所」と四種類の居館配置があった。城(藩庁の仙台城以外は白石城)には城主が居住し、城下に城下町を配した。要害は中世以来の城館に屋敷を構え、町場を合わせた小城下町。所は居館と小規模の町場を合わせたもの。在所は農村の中に屋敷を置き、周囲を農地が囲んだ。重要な地には重臣・実力者を領主に配した。

岩ヶ崎は、十四世紀後半の鶴丸城を修復して城館にしたので、厳密に言えば「要害」に当るが、綱元を後見に初代城主(二代迄は城主といった)に政宗の実子を配したのである。歴史書には、その後は「岩ヶ崎伊達家は二代城主伊達宗信が寛永四年、無嗣断絶」と記され、これ以降は「所拝領」の「領主」と呼称された。

寛永五年(1628)の頃、三代領主(ここから「所拝領」)石母田宗頼が入城のとき「城は崩壊が始まり、城下の平地に居館を移した」とあり(石母田家文書)、元禄二年(1689)、俳人松尾芭蕉が平泉からの帰途に立ち寄った頃は、『曾良随行日記』によれば、本丸、二の丸、三の丸、蛭子館がなんとか形をとどめていたようである。

なお、城址は町を見下ろせる比高七十米の高台にあり、東西六百五十米、南北二百五十米ほど、城縄張りは東西に細長い稜線を加工した連郭式縄張りで構築されていた。

城址は発掘調査が終わり、最期の領主中村氏を始めとする地権者が土地を寄付し整備のうえ「館山公園(蛭子公園)」として市民に開放している。春は桜の見どころである。

八月、政宗は宮城郡松島の円福禅寺に赴き、自ら方丈再建の縄張りを行なった。円福寺は九世紀、天台宗延福寺が起源とされ、鎌倉時代には臨済宗円福寺に改宗、火災により戦国末期には廃墟同然にまで衰退していた。政宗の師・禅僧虎哉宗乙の勧めで円福寺復興を思い立ったのである。

秋には城下の竜宝寺八幡(大崎八幡の前身)の再興を仰せ出されて造営を始めた。同十二年、成島八幡宮と合祀して遷座し、乾天門(北西)の鎮めとした。彫刻職人の刑部左衛門国次(左甚五郎のモデルの一人)が建立に携わったとされる。社殿(本殿、石の間、拝殿)は国宝に指定され、「どんと祭」の裸参りで知られる。

八 政宗の施政と「吏僚」綱元

慶長十年(1605)

二月十六日、江戸屋敷で正月を祝った政宗は、将軍秀忠上洛の供奉として江戸を駕で出発し、三月二十三日に伏見屋敷に着いた。その途次の駅々で都合十四日間逗留したことが「治家記録」に記されている。

政宗は長旅を何事もなく過ごして上洛できたので満足であり安心するように、国許の片倉備中景綱に飛脚便を以って伝えている。

四月十六日、秀忠は第二代征夷大將軍に任じられた。これより家康は隠居となり大御所と呼ばれ、秀忠が徳川家当主となった。公方秀忠公が参賀で参内したときに政宗は従ったが、この時、「(どういう訳か不明ながら)諸大名が装束を失くして困窮した。政宗公は青山図書殿成重を以って、公方御召しの古し御装束を拝領し給い、鶴喰(つるばみ)の黒の袷を着せらる云々」と、何やらトラブルがあったことが「治家記録」にある。

六月、政宗公は江戸に戻り、七月中旬、国元仙台城に帰着した。

八月、松島にお出掛けして御月見、歌を詠んでいる。
中秋松島ニ於テ「松島ヤオシマノ磯ノ秋ノ空名高キ月ヤ照マサルラン」

十二月、領内の田畑荒地の穿鑿(開墾)を申し付けるについて、検地済みのところ、竿外れ(検地を受けていないところ)を区別して実施するよう、黒印を以って茂庭石見方より役人へ下知した。しかしながら、「今度荒地穿鑿ノ儀、石見ヲ奉行ニ仰付ラレタル歟、又役人許リ仰付ラレタル歟、総テ荒地穿鑿の始末、様子等不伝」と、下知が徹底されずに、その過程・結果は後世に伝わっていなかったようである。

この失敗に鑑みて、後の慶長十二年二月十四日の条に「去る十年十二月の領内検地のうち、不審のある所については此の春に竿打直し(検地やり直し)するように富塚近

江に黒印を以って命じたとある。十一年冬に屋代勘解由に命じたのであるが、十二年正月に改易になったので、改めて富塚近江に担当奉行を命じたということである。

この年、国分寺薬師堂の再建を政宗が仰せ出された。
「朝鮮渡海の時、当寺の薬師如来及び七十二神将のご加護を以って無事帰朝することができた」ので、再興するようにとの命が出たのであった。
慶長十二年落慶した現存する仙台最古の木造建築物の一つで、国指定重要文化財になっている。本尊薬師如来に因み薬師堂と通称されている。

慶長十一年(1606)

正月、政宗は仙台城で、嗣君は江戸屋敷で年賀を祝った。

三月、家康公より政宗へ、常陸信太・筑波・河内三郡のうち知行高一万石の地を賜った。のちに龍ヶ崎村に陣屋を構えて代官を置き、常陸国における仙台領支配の中心地としたため龍ヶ崎は繁栄した。現在の龍ヶ崎市域の一部である。

竜ヶ崎陣屋の大番士の娘で、二代藩主・忠宗の側室となった女性がいた。四才で親を失った「たけ」は、政宗の正室・田村夫人に見込まれて引き取られ、当時は桜田門の伊達上屋敷に住み、姫様同様の処遇で礼儀や教育を受けたという。宗房・宗章の二子をもうけ「小笹の方」と呼ばれた。のちに宗房の子・吉村(宮床伊達氏)が本家の世子となって五代藩主(元禄十六年)になっている。吉村は多芸多才・勇武文才の名君と言われた藩主であった。宮城県黒川郡大和町宮床にある大義山覚照寺は、宮床伊達氏の菩提寺で、吉村が両親と祖母・慶雲院の霊廟を建てたものである。

この年、藩主政宗は、江戸に四つの邸宅を賜わった。
桜田日比谷口、島津殿の隣り、愛宕下広小路、芝浜増上寺寄りであった。
後藤孫兵衛を総奉行として、翌年には普請工事をほぼ終えた。

綱元四男又次郎のち宗根(実は政宗落胤という)は七才にして亘理美濃守重宗の養嗣子となって、重宗の隠居所である栗原郡高清水に移った。
これは重宗の嫡男・定宗が伊達姓を与えられて新しい家(涌谷伊達家)を創設したことによって、亘理家の家督が居なくなったことによる措置であった。

実は、この又次郎宗根が政宗の実子だったと伺わせる政宗自筆の書状がある(登米市歴史博物館企画展、令和元年十月 朝日新聞他の記事)。
書状は政宗自筆で又次郎宗根に宛てたもので、九月十八日付となっている(年不詳であるが、又次郎の元服後のことと推察される)。
内容は、翌日朝に宗根と会う約束をしたが、気分がすぐれずに難しいというもの。
書状の宛先には、確かに「了庵二番ノ子」とある。宗根は系図上では、政宗の重臣、茂庭綱元の子どもになっているが、綱元は出家して了庵と名乗っており、了庵綱元の二番目の子という意味では綱元実子(二男・良元)とは違う。

政宗は出家後の了庵綱元の一子・津多、二子・又次郎と使い分けて、実は自分の子と白状しているのである。

書状の最後に、「しらじらとしらけたるかな月影に雪かき分けて梅のはな折る」という和歌がある。筆者は和歌を解せないが、書状を認めた九月の作でなく、「白々と夜明けを迎える雪降る朝方にしらじらと白状してしまったわい」と、告白しているように読んでしまうのである。

又次郎はのち元服して亙理右近宗根^{むねもと}と称し、高清水亙理氏の四世となる。この時には、実母の香の前を側におき、生涯高清水と一緒に住ませたという。高清水の福現寺に宗根の墓があり、香の前も埋葬されたと云われているが、その墓は不明のまま確定されていないという。

十二月、政宗の愛娘五郎八姫と家康の六男・松平忠輝との婚礼が行われた。伊達家からの御輿の供は伊達安房成実、山岡志摩、鈴木和泉、奥山出羽のほか十人で、貝桶役は原田甲斐宗資が、御太刀目録は今泉山城清信、佐藤勝左衛門重信、御輿副^{こしぞえ}は瀬上丹後時綱、橋本大炊が務めた。御輿副の二人は五郎八姫付けとしてそのまま松平忠輝家に上がった。五郎八姫は京都の聚楽第屋敷にて生まれ、伏見、大坂と移り住んだが、慶長八年伏見から江戸へ移り住み、婚礼を前にしたこの六月に初めて仙台に下向し、政宗の江戸参府に合わせて上京し式を挙げたのであった。

慶長十二年(1607)

正月、江戸屋敷にて年賀を祝った。

同五日、綱元と同僚で奉行の屋代勘解由景頼は、罪により改易となった。この夜、屋代勘解由は神田の寺に立ち退き、妻の兄弟三人が越前結城家に奉公していた縁を頼りに越前に下ったという。政宗のためなら苛烈な手段を取ることも辞さない吏僚として知られていたが、「角田城接收事件」における誤解が発端になっている節があった。

慶長三年といわれる成実の出奔後、政宗は屋代景頼に命じて彼の領地亙理の角田城を召し上げるべく武装包囲したという。留守の成実家臣三十余人が討ち死にし、成実の妻子もその際殺されたというものである。

「治家記録」、「伊達世臣家譜」などを総合すると、成実の正妻はその前(文禄四年六月)に既に亡くなっていたことがわかっているので事実と異なるのである。

実は、角田城接收の時期について明確な記録がないばかりでなく、『仙台志料』によると行われたのは「角田の接收」ではなく「羽田右馬助の誅罰」であったという。その理由は羽田右馬助が成実の出奔をそそのかしたことにあるとしている。

その背景として、羽田の専横が角田の留守居の中でみられ、家臣同士の対立があったようである。羽田と並ぶ留守居役であった遠藤主計が、岩出山の政宗留守居の屋代勘解由にこのことを通報し、屋代は丸森の高野壱岐に命じて羽田を討たせた。

成実の重臣で留守居の羽田右馬助の専横を許しがたいとした家臣の訴えを聞き届けた屋代景頼が、羽田右馬助を私邸で成敗したというのだ。そのときに抵抗した家臣三十名余りが討ち死にしたということらしい。

こうした誤解が改易追放の発端のようであるが、真の理由は不明である。屋代景頼は有能であったが故に政宗の奉公構いに合い、京都へ上り近江を流浪し、そこで翌年に病死したという。ときに四十六才であった。

天正十九年より慶長五年まで、主君政宗公の京都・大坂勤めにより実に十年間も岩出山留守居を仰せつかり、政務を執行してきた吏僚にして武功もあつた重臣屋代勘解由景頼のもったいない最期であった。

その後、成実は景頼の家族を庇護し、後に実子の屋代三郎兵衛が成実に仕えたということから、角田城接收事件は藩側の誤判断に基づくものではなかったかと思われるのである。

二月、領内検地のうち不審のある所について、一年前から進んでいなかったものを、此の春に竿打直し(検地やり直し)するように、検地総奉行に富塚近江を仰せ付けられ黒印を以って命じた。

ここで、政宗の国づくりの考えと、信頼する「吏僚」茂庭綱元の働きについて触れる。岩出山城移封以来、新領地を永らく留守にし、十年余に及ぶ上方生活から仙台城に帰城し、藩政の問題点を把握した政宗は、頼みとする仙台留守居役の奉行、茂庭石見綱元あてに長文の自筆の書状を送り、原因の究明と対策の提案・実施を迫った。

年末詳七月五日付けの「態と(わざと)自筆を以って申し遣わし候。仍って、分領中年来の荒地とも際限なく候」で始まるもので、仙台市博物館の所蔵になっている。

研究者は署名と花押の形から、慶長十二年頃のものだと推定している(仙台市史、資料編十一「政宗文書二」、文書番号一七四〇)。

先の二月の検地やり直し命令(検地総奉行・富塚近江)の、五か月後に発令した総括的な政宗公の命令とすると納得がいくので、ここに記述した。

当面する最も重要な課題である膨大な家臣団の処遇等六ヵ条からなり、その具体策を政宗自ら提示し、奉行らに検討させるよう茂庭石見綱元に指示したものである。「うまくいかなければ、奉行及び算用方(財政担当)の失態であり、今後は仕事がうまく捗るよう適切な指示を与え、きつく監督することが肝要である」と、強い口調で叱咤激励している。

最大の課題は、一万とも二万とも云われる家臣団に分け与える知行・扶持米を確保し、幕府から割り当てられる普請・作事など割り当ての課役費用を捻出する中で、藩財政を初代藩主としていかに確立するかであった。

天正年間から関が原迄は領土拡張一辺倒に見えた政宗であったが、徳川の世になり、自身も奥州を代表する大名になって、家康から一応の安堵を得ている今となつては、藩内の経営に腐心している様子が窺える。

政宗が考えたのは、領内の荒地を希望する百姓に貸し与えて再耕作させ、徴収した年貢を幕府御用の普請費用に当てること、更には、扶持米取りの家臣にも扶持高に相当する荒地を知行地として与え、彼らに耕作させることであった。

ただ、荒地ばかりの知行地では家臣たちは困るので、十人扶持の場合は扶持高は一年で十八石、知行地換算で一貫八百文、その二倍に嵩上げた三貫六百文の荒地を知行地として与えるなど、具体的な数字をあげて奉行達に示した政宗の解決方策であった。

このようなきめ細かい指示は、「年貢の徴収は代官自ら現地へ出張り直接取り仕切るようにさせよ。藩へ年貢米を納めぬうちは一切米の売買をさせてはならぬ」にも見られ、「きりきりと、はかのゆき候ように、奉行どもにもかたく申し付けるべく候」と、役人たちの仕事ぶりに苛立ちを隠さない。「はかがゆく」とは、「はかどる、捗る」の意味。

この政策は、奉行たちによって検討され、これ以降仙台藩の基本的な政策となっていく。後には荒地だけでなく、領内の野谷地も対象にされ、迫川、鳴瀬川、北上川、名取川、阿武隈川など河川の改修整備を手がけながら新田開発を奨励した。江戸中期には直轄地が多いに増え、藩の実高は百万石を突破し、余剰米を石巻から船で江戸に廻送し、これを売って収益を上げるまでになった。

江戸廻米は、初めは家臣らの余剰米が中心であったが、次第に農民から藩が独占的に買い集める制度(買米制)に移行し、その量も増加し、江戸廻米高が年二十万石にのぼり、仙台米が江戸の相場を支配するまでになったのである。この買米制は農民作徳米(六公四民の土地では農民の取り分は四割であり、その部分が作徳と称された)の強制買上げ制度である。初期には買米本金を春に無利子で農民に貸付け秋に強制徴収した。この頃の貸付金は「御恵金」といって農民に喜ばれた。

仙台領の北部一帯は葛西・大崎一揆で荒廃した土地が多かったが、こうした新田開発、北上川の改修工事、貞山運河の開削、河口の石巻港の整備などによって仙台藩を江戸の食料供給地にし、財政基盤をより強固なものにしようと考えていたようで、政宗公の炯眼であった。大崎地域は、後世には仙台平野の中でも大崎耕土と呼ばれる米の一大産地になったのである。

後の享保期には藩財政の窮乏により制度を改め、夫食米^{ふじきまい}(米以外の雑穀が中心で農民の食料)を制限して、米のみに限る占買制(強制買付)として一切の密売を禁じた。

宝暦七年(1757)には無利子前貸し制を廃して以降、米価は安くなり、凶作とともに農民は困窮した。後の天保の大飢饉の頃の仙台藩の江戸廻米高は、最盛期の半分、年十萬石まで落ち込んだことが記されている(仙台藩歴史事典「仙台藩の新田開発」)。

この年、家康は、側室英勝院との間に正月元旦に誕生したばかりの姫君を、政宗嫡男虎菊丸に縁組みする旨を仰せ出され婚約した。
このとき、姫君は一才、虎菊丸は九才であった。

慶長十三年(1608)

正月、江戸藩邸にて慶賀の儀を祝った。

政宗公は陸奥守に任じられ松平の称号を賜わり、大崎少将と称した。

江戸を発ち二月仙台城に帰着した。

九月、家中の知行割り総奉行に鈴木和泉重信、奥山出羽兼清の両名を命じ、十二月には完成した。岩出山治世以来、家臣に与えていた知行を正確に割り直したのであり、知行割りの改訂が行われた。両奉行は交替で花壇の役所に出勤し、(三食)料理人の賄い付きで日夜精励したのであった。

この年、政宗は柳生但馬守の斡旋で、大和国榎森^{かやもり}より雲野又五郎を十両十人扶持で召出し、城内太鼓部屋下(現仙台市博物館奥)に、「城内定詰御酒御用所」を設けた。奈良流の諸白造りを始めたが、藩主の自家用、贈答用色彩の濃い酒造りであった。

慶長十四年(1609)

三月、松島円福禅寺(後の瑞巖寺)方丈造営の上棟が行われた。

この時、「松島ノ松ノ齡モ此寺ノ末栄ヘナントシハフルトモ」と一首を献じた。

今に伝わる桃山様式の本堂などの国宝建築を含む一大伽藍で、寺の名を改めて「松島青龍山瑞巖円福禅寺」と称した。

同時に、先に再建していた九世紀起源という五大堂を瑞巖寺の管理下に置いた。

七月、政宗は、城の懸け造りの座敷から、鉄砲組のつるべ撃ちを視察した。
これ以降、足輕総鉄砲組の一斉射撃訓練を視察しては、整列した兵を馬上から武頭に御意を示しつつ閲兵したという。

慶長十五年(1610)

正月、仙台城にて慶賀のご祝儀あり。

二月廿二日、嗣君虎菊丸に縁組を約していた家康の姫君が早世した。御年四才。

続いて、「或記ニ此月十三日御逝去、御年三ト載ス。誤リナルヘシ」と注記がある。

三月、江戸へ登る。

十月、公方台徳院殿(秀忠)が御屋敷にお成り遊ばし饗膳を差し上げた。

公方より嗣君に名刀来国俊を賜った。この日のために、十四日に古田織部正殿へ書状を以って御数寄道具について照会し、「当日はお供に召し連られるので茶碗などの事は心得ているので心配ない旨」直ぐに返状がきた。

茶人との懇ろなお付き合いも、こんなときのための一つであつたのであろう。

この年、仙台城の大広間の造営が完成した。

「縦十七間半、横十三間半、北に長三間・広二間半、南に長七間半・広六間の曲り屋あり」という、桃山式建築の大広間である。これには、大工棟梁梅村彦左衛門家次を紀州へ差し向け、天下無双の大匠刑部左衛門国次を雇い、大広間造営の指図を取らせたのであつた。大広間の内装(張付・表具)は画工佐久間左京に申し付け、その奉行は茂庭利兵衛定元(茂庭綱元の孫)らに命じた。

慶長十六年(1611)

政宗は正月を江戸で迎えた。

十五日、伊達家の奉行衆、石母田宗頼・鈴木重信・奥山兼清・片倉景綱は、将軍秀忠公より江戸城にてお茶を振る舞われた。翌日には政宗がご招待を受けた。

二月、茂庭石見は江戸詰め奉行にあつて、幕府の手伝い普請である江戸城西ノ丸普請奉行を川嶋豊前、片山外記に申し渡し、国元から足輕や人足と呼び出した。

「治家記録」の日付を拾うと、普請奉行が江戸の普請場で業務を開始するまでの煩雑な挨拶、面会、顔合わせなど当時の慣行(形式)が見えてくる。

在府の政宗公はちょうど鷹野で久喜に滞在中であつた。

奉行に指名された川島、片山の両名は仙台を出て途中の久喜で公に御挨拶、お言葉と雁を賜った後に江戸に向つた。

江戸では、「茂庭石見の長屋に出向き江戸詰め三奉行と打合せ。川島は江戸城に赴き公儀の普請奉行の貴志助兵衛らに挨拶。翌日は本多佐渡守に面会し懇ろな言葉をいただき、その後に普請場へ出向いて、公儀の普請奉行及び各大名家の普請奉行と一堂に会し顔合わせ」に三日かかった。

藩としても普請奉行の出張を労い、翌日の晩に秀宗の御部屋にて川島豊前に饗膳が振る舞われた。鈴木和泉、猪苗代正益がご相伴。後、お茶のお点前を賜う。

天気の良い日には政宗は二日と空けずに現場に足を運び督励し、また公方も本多佐渡守をお供に頻繁に普請場に顔をお出しになった。或る時は「天気好、辰刻、公方御普請場へ御出、本多佐渡守殿御供ナリ。川島豊前ニ川島ト御詞ヲ掛サセラル」。

また、或るときは「公方又御出アリ。川島豊前ニ骨折ノ由上意アリ」と。

公方が大名家の一普請奉行にお声を掛けることは、この時代にあつて筆者には新鮮な感じがしたが、幕府が有無を言わせず従わさせる腹黒い手段なのであろうか。

小説で伝え聞く本多佐渡守の流儀であれば、何の造作もない一呼吸の間の手なのであろう。

この間、国許から足輕・人足を数回に亘り投入し、七月に普請が成就した。

八月一日、公方より羽織一、帷子一重、反物一重を、川嶋豊前景泰に賜わった。

奉書には、幕府普請奉行六名の連名で、上意にして片山外記(川島豊前の代理か副官)にも申し渡すべしとあった。

続いて公方を感激させた事件を追記している。その訳は、「公方が普請場に御出でになった雨天の日、道がぬかるんでいたもので、川島は人足共が着ていた蓑を敷き詰めてお進みいただいた」というのだ。政宗の気遣いが中堅にまで浸透していたのだ。

五月、政宗は江戸を発駕し帰国の途についた。「浅草にて御膳を召しあがり、お見送りの衆にも饗せられた」旨が記されている。

十月二十八日、仙台に大地震・津波が起きた。

「巳刻過ぎ(午前十時過ぎ)、御領内大地震、津波入る。御領内において千七百八十三人溺死し、牛馬八十五匹溺死す」と「治家記録」は記述している。

『武藤六上衛門所蔵古大書』には「大地震三度仕り」とあり、三度大きく揺れたとしている。

ここに、日本で最初に「津波」という語句を用いた災害の記録文献がある。

『駿府記』に、伊達政宗に献上する初鰯を獲るため侍二人を遣わし、漁人らは潮色が異常であるとして難色を示したものの、出漁した漁人らは津波に逢い漁人の生所なる山上の千貫松の傍に流れ着いたが、家は一軒残らず流失したとある。

この『駿府記』にある「松平陸奥守政宗献初鰯、就之政宗領所海涯人屋、波涛大漲来、悉流失、溺死者五千人、世曰津波云々」が、文献に現れた最古の「津波」の記述とされる。

今日、「慶長三陸地震・津波」と呼称される災害であった。

慶長三陸津波の後、仙台平野では塩害で約十年経過しても米が収穫できず、名取郡の農民が仙台藩の奉行に年貢の申上状を提出したとされる。

十二月、政宗の二男、虎菊君は十三才で元服し、伊達藤次郎と名乗る。

秀忠公に拝謁し「美作守」に任じ、諱の一字を賜わり忠宗と名乗った。

三原正家の佩刀を拝受し、その祝賀として太刀一腰、馬一匹、白銀百枚、時服五十着を、政宗からは太刀、馬、時服三十着を献上した。

後に、庶長子で兄の秀宗は大坂冬の陣後に徳川家康から伊予宇和島十万石を与えられて別家を興したため、忠宗が伊達政宗の後継者と定められた。

慶長十七年(1612)

正月、政宗は仙台城にて年賀のご祝儀。十二月には、江戸に登った。

この年、綱元は、栗原郡岩ヶ崎に於いて、作事奉行に日下藤兵衛清重を指名し、浄土宗円鏡寺を造営した。

宗門が浄土宗である政宗側室の香の前のために、浄土寺を開基し寺領として一貫文を寄進したのである。

なお、三迫では真言宗音羽山清水寺、曹洞宗熊野山黄金寺にもそれぞれ一貫文ずつ寄進した。この三つの寺は、仙台藩召出し格の寺院であった。

このあと、石母田氏が領主になった寛永の初期に、岩ヶ崎城が崩壊し始めたので、平地に居館を移す際に、大手門を城下の円鏡寺に移築したといわれている。この門は、円鏡寺の正門として現存している。

政宗公が親しく領国中を巡検し岩ヶ崎に滞在した際に、参詣のため本堂に行って本尊如来の顔を拝した瞬間、五男の城主卯松丸(十才)が「円鏡寺ご本尊の阿弥陀如来の光明かくやくとして思わず「目まつした」旨、申し上げたところ、政宗公より、これからは[目まつの本尊]と申しあげるようお言葉を賜り、霊仏としてお供物料七百文を賜った。[目まつ]とは、「眩しくて目がくらんだ」意味と思われる。この年、綱元は栗原郡二迫に於いて、青雲地藏堂、稲屋敷阿弥陀堂を建立した。

以降の記述について。仙台藩岩ヶ崎領は栗原郡の三迫(岩ヶ崎が中心)、二迫(文字、鳥矢崎)の二つの地区から成る。岩ヶ崎城下町をさす場合は岩ヶ崎、地区をさす場合は三迫、二迫と記す。岩ヶ崎村、文字村、鳥矢崎村などは個別の村名(邑名)。

十月、政宗公は和久又兵衛宗是へ書状を以って、鷹狩りの雉を七羽進呈。「最近鷹野に忙しく取り紛れて音信できずに申し訳ない、昨日の雉をご賞味あれ。近いうちにお茶を進ぜよう」と書き送っている。

十二月、仙台の和久又兵衛宗是より書状あり、例年の通りお歳暮に仙台平の小袖一重を進上されたので、親書を以ってお礼を遣わした。

宗是は豊臣秀吉の祐筆を勤めた能書家にして武人で、秀吉亡き後、政宗に客将として招聘され黒川郡大谷邑に二千石の田を賜り住んでいたのである。子息の半左衛門是安が秀吉の密使として仙台に下るなど、政宗と接触する中で適切な情報とアドバイスにより、小田原参陣遅れなどの危機を乗り越えることができた。こうしたことから、政宗は、和久宗是・是安父子とは昵懇の付き合いをしていた。

九 仙台留守居の綱元、大坂の陣

○国家老として留守を預かる

慶長十八年(1613)

この年正月、政宗公は江戸屋敷にて年賀のご祝儀を祝った。

親しい大名や幕臣・茶人を招いての朝、夕のお茶会、饗応は一月だけでも、十回ほどを数えた。二月も十一回ほど、進物は五、六件に及んだ。

この中には、当時の初代北町奉行で家康の信頼厚い米津勘兵衛田政の名が見える。二月七日に米津勘兵衛を屋敷に招き、四日後には御返しの饗応に与っている。

三月、公方台徳院殿(秀忠)お成りになり、藩邸御数寄屋にて御茶を饗献した。翌日には「御跡見御祝儀(將軍を自邸に招いた後、老中などを饗応すること)」として、本多佐渡守正信、土井大炊助利勝、酒井雅楽頭忠世を始め老中へお茶を進ぜられた。御客百余人、御能ありと記録にある。

四月、国元の茂庭石見綱元へ書状あり。七男・宗高君の病氣本復を悦び、大御所へ御目見のため、五～二十一日に駿府へ出掛ける由であった。大御所への用向きは記されていないが、おそらく、南蛮国への黒船派遣の報告と最終確認のためと思われる。

だからこそ、仙台にいる奉行の茂庭石見に事前に連絡したのであろう。

四月以降は、南蛮への使節派遣の段取りに、南蛮人ソテロ、幕府の御船手奉行向井将監との談合、書状での遣り取りが頻繁に行われた。これだけ大きな未曾有のプロジェクトゆえ、今でいう担当部局のような組織を設けて細部に亘る段取りを分担させていたと推察されるが、ソテロからの書状に対する返書が「治家記録」に見える。これによると、相当具体的なことまで自身が顔を突っ込んでいたことが窺われる。

「一 南蛮へ派遣する使者の事、これ以前に申し付けた者は共に定まっている。

来月は早々に仙台へ下向して協議するようカピタンも承け合い、もう一人相添え(追加)すべきかと思っている。

一 船に積む荷物の事、手前の分は大方用意しており、カピタン手前の他、向井将監手前に三百包ほどある由、その他に、関係先から積みたいと申し入れの分が四、五百包もあると思っている。そのうちにお目にかかり・・・ 恐々謹言

卯月一日 政宗 御書判

ソテロ

」

四月五日、政宗は駿府へ向けて江戸を発駕し九日に到着した。

翌日、大御所へ御目見えし、銀子千両、時服十を献上している。

相変わらず政宗は大御所詣でを続けている。公方秀忠公との関係もうまくいっており、このまま安堵が続くような心境になってきたのか、気持ちがかもった訪問であるのは確かだ。

四月二十五日、大久保長安が駿府にて死去した。政宗は二人の息子に書状を以って弔意を伝えた。

七月、帰国のお暇をいただき十七日に仙台城に着いた。

早速、二十三日から広瀬川川獺、国分薬師堂に鷹狩、国分大倉に川獺にと出かけて、江戸でのストレスをほぐし、二十七日に帰城した。

八月、政宗は茂庭石見宅にお出掛けになり、饗膳を囲み一泊した。

昨年、岩ヶ崎における円鏡寺造営の話と、政宗が領国巡検で城主の五男・卯松丸と交わした久々の親子の会話などに話が弾んだのであろう。
卯松丸君も能を演じられ、この日は御能七番ありと記されている。

この頃から、「治家記録」には、政宗が重臣宅に出掛け談笑し饗膳を囲み、泊る記事が増えている。

将軍では自由にはできない重臣宅訪問であるが、藩主政宗の人徳であろうか。何とも平和で家族的な家臣との付き合いではある。

同じく八月、和久宗是老が御見廻ついでにといいってお城の政宗をふらりと訪ねてきた。御馬代一貫文を進呈した。

後日、「和久宗是老へ御鷹ノ鶉進セラル」とあり、屈託のない付き合いである。

八月二十一日、南蛮人 楚天呂(ソテロ)と城中大広間で対面した。
「楚天呂から進上物あり、語音通事(通訳)を以ってお互いが通じた。白く縮れた手拭いを以って、度々唇を拭う、其長高く、面赤く、鼻高し、年齢六十余と見ゆ、従者何れも年若し、長卑しく鼻高し」と記している。この時、ソテロは四十才くらいであり、いくら外人でも六十余という記述はおかしい。「其長高く、長卑しく」の意味は分からない。

この年の政宗の大きな仕事は、かねて造船していた黒船で家臣支倉六右衛門常長を南蛮国へ派遣したことである。

九月十五日、「月浦より南蛮国へ黒船発す。南蛮人ソテロも同乗して帰国の途に就く」との記事がある。政宗がスペイン人のフランシスコ会宣教師ルイス・ソテロを正使とし、家臣の支倉六右衛門常長を副使としてスペインに派遣し、日本最初の通商外交を展開しようと「慶長遣欧使節団」をメキシコ経由で送り出したのであった。

使節団の副使に任命された支倉常長であるが、伊達家譜代の臣で家禄五百石の中堅の武士であった。この十年ほど前は、政宗の御使番として文禄の役では朝鮮に従軍し、政宗の使役を務めた人物で武功、器量ともに優れていたと思われる。任命される直前には父親の罪に連座し、追放の刑に処せられていた。

前年の八月十二日と思われる茂庭綱元への書状で次のように常長の追放を命じている。「常長の父・支倉飛驒を去年以来蟄居処分として来たが、ますます不屈きの義が見られるので、直ぐに切腹を申し付けよ。子の六右衛門も命は助けるが追放するように。他の子も闕所(知行没収)にし、ただ女子はかまわず追放せよ。」と。

一旦追放した常長を大使に任命した政宗の意図は分からない。大使就任後は没収されていた六百石の知行は元に復されたのである。元々、政宗は常長の能力を高く評価し、異国での交渉という困難な仕事に就かせ再生のチャンスを与えたのであろうか。

この使節には支倉の他、今泉令史、松本忠作ら主だった藩士十数名が派遣された。船に乗り込んだのは、幕府の船手奉行向井将監の家来が約十人、南蛮人約四十人ら、合計百八十人余であった。

この船には、フィリピン前総督ドン・ロドリゴ一行が、帰還のためアカプルコへ向けての航海中台風に遭い上総国岩和田村(現御宿町)田尻の浜で難破し救助された事への答礼使として「サンフランシスコ二世号」で来日したスペイン人のビスカイノも乗船して帰国の途についた。

また、商人も乗船して数百個の荷物を積んでおり、徳川将軍からの進物として、具足、屏風なども積まれていた。

九月十六日、政宗は、茂庭石見宅にお出掛けになり一泊した。

昨日、月浦より南蛮国へ使節団を派遣したばかりで、大仕事を終えた政宗は、信頼厚く気のおけない茂庭石見の邸宅を訪れたのであろう。

初めて経験するビッグプロジェクトの成功を祈ってゆくりと酒を酌み交わしつつ談笑し、翌十七日の晩に帰城した。

「治家記録」には、「今度、公、南蛮へ船ヲ渡サル事、其地ノ様子ヲ檢察セシメ、上意ヲ経テ攻メ取り玉ウヘキ御内存ナリト云々(現代語訳;スペインを偵察した上で幕府の許可を得てスペインを攻撃して乗っ取る)」という記述がある。

この解釈であるが、政宗の使節派遣の意向の中に、実利的な貿易の利益の他に、南蛮を征服するといっては大袈裟であるが、豊臣秀吉の朝鮮出兵と一脈通じるような、戦国武将として領土拡大に殊更に執念を燃やした政宗の動機が存在したと見える。

「上意ヲ経テ攻メ取り玉ウヘキ御内存」を、九十年後に編纂した藩の正式な「治家記録」に残したのである。当時の幕府側の同意を得ずしてなせるものではなかったと推察される。

十月、「和久平八郎是信御目見エ、御礼トシテ太刀一腰・馬代三貫文献上セラル。宗是老ノ孫ニシテ又左衛門宗作ノ子ナリ」と見える。又左衛門は宗是の嫡子であるが病人ゆえに、次子の半左衛門宗友を家督とした。平八郎是信は、祖父宗是老のお見舞いのついでに大坂から下向し、仙台城に立ち寄り、政宗公に拝謁したことになる。

後の大坂落城後の元和年中に仙台に来て、伊達氏に仕え二百石を賜わっている。祖父宗是、父宗作の弟・宗友(是安)に続き、孫の是信と、三代に亘り、政宗公に昵懇の目を掛けられた珍しい家系である。

十二月十九日十時過ぎ、政宗は雪の中を茂庭石見宅にお出掛けになった。

これは、今年三度目の茂庭石見宅へのお出ましであった。

この日は、岩ヶ崎城主で五男卯松丸の元服祝いで、祝宴の饗膳をお出しした。

以後、卯松丸は摂津守宗綱と称した。

席上、政宗公より御腰物大小、御烏帽子、御袴を摂津守に、摂津守より御太刀、御馬一匹(黒毛)、御腰物一腰、御小袖五重を綱元に献じた。

政宗公より石見夫妻に御小袖一重ずつ、石見夫妻の三男正次郎実元(岩ヶ崎の膳奉行)、中島監物貞成にも御小袖一重を賜わった。

政宗公は、五男卯松丸、気のおけない家臣一堂と御能演目三番、ゆるりと楽しんだのち一泊した。翌日午後六時、茂庭石見宅より御帰館。

家臣の邸宅での「能演目三番」には、現代人からすれば何とも優雅なことであると驚かされる。

この年末、和久宗是老より御時服一重、和久半左衛門宗友(号、是安)より、紫革五枚進呈された。この十月に宗是の孫・是信が仙台城来訪の折に、政宗公から受けた心遣いへの御礼の意味であったのだろう。

この年の政宗は、七月に仙台に帰国後、立て続けに鷹狩、川猟に出かけたほか、八月以降は日帰りの鷹狩の記事が頻出し、十二月迄の半年で二十一回を数えた。

慶長十九年(1614)

大坂冬の陣となるこの年正月は仙台城で慶賀を祝った。

嗣君忠宗は江戸屋敷にあったが、一門・一家・一族の年始御礼のお目見があり、宇和島侍従秀宗、嗣君忠宗、夫人田村氏の母からも年始の祝物が献上された。

この月、鷹野に三度、山迫い、家臣宅への饗膳と、久々にゆるりと寛いだ。

また、一門伊達安房成実に加増し一万二百石の禄高とした。

二月、茂庭石見宅にて饗膳を受けた。

政宗長女五郎八姫の夫君、松平忠輝の高田城普請監督に出向くに当たり、腹心の綱元と事前の打ち合わせを済ませたのである。

三月、江戸に参着した政宗は將軍秀忠公に拝謁し、越後高田普請の監督について奏上し御腰物守家を賜わった。

四月朔日、片倉重長、石母田宗頼ら四十五名の家臣を引き連れて越後に向かった。松平忠輝の高田六十一万石の居城として高田城を造営するもので、天下普請であった。城地の縄張りと工事の総監督は政宗が行ったとされ、娘婿の居城造営に力を入れたことが偲ばれる。

五月、仙台留守居の茂庭石見に、政宗より「領内金山のこと、大御所上洛のこと等」書状があった。大御所家康上洛のことは、風評として京都方広寺大仏の落慶法要と合わせて流れていることを、国元留守居に伝えることであった。

出張り中の政宗から仙台留守居の茂庭石見に宛てた書状であり、現代と同様に、出先から部下に中央の情報を伝え、指示をしていた様子が窺える。

六月、茂庭石見は三迫岩ヶ崎に於いて馬市を立ちあげた。

城主宗綱が岩ヶ崎に移られて以降、綱元より提案申し上げていたものが叶ったのである。此の時、馬九百頭余りが競りに出されたが、残らず売れたと云う。

この地は、気候、地形、植生ともに藤原氏の平泉文化圏に含まれた頃から、産馬に適しており、農耕馬、軍馬として需要が多かったと思われる。

江戸中期以降は品種改良を重ね、仙台藩から幕府への献上品にも使われるほどの良馬に改良されていた。

現在でも旧岩ヶ崎城下を東西に走る「馬場通り」があり、道幅が広く「馬場」の名残りが色濃く残っている。昭和の時代までは、馬市には栗原郡内近隣の博労が集まり夜店も出て賑わっていた。

七月、高田城普請が成就した。

五月、六月は梅雨にかかり工事は難航したが、公儀の普請奉行も引揚げ、政宗は病のため暫らく逗留し、二十一日高田を出発し、二十八日仙台に帰着した。

茂庭石見は名取郡増田の御仮屋まで出迎え、帰国慰労の晚餐を開いている。

○大坂冬の陣

十月、老中より大坂冬の陣につき奉書到来し、一門以下を召集して相談した。

仙台留守居に鈴木和泉重信を充て、十日仙台を出発し、途中白石城に宿泊した。

この頃、股肱の重臣白石城主片倉備中景綱は重病であったので、嫡子の小十郎重長に供を命じて、景綱とは今生の別れをなした。

病床の景綱は中風により半身不随の身で、従軍かなわぬ景綱の胸中を察して同行を願った成実らを残して一人で隠居所に見舞った。

従軍医師の高屋宗伯に診察を命じた上、この日に持参した薬湯の蘇鉄の実の麻袋を示し、桑の実に優る中風の妙薬で薩摩から入手したものだとして、処方を書き留めた紙片を看護の者に手渡したという。

政宗は景綱の瞳を見て、叡知と鋭い洞察力を秘めた昔と変わらないことを認め、大坂表の動向について質した。

景綱は、「駿府の大御所の事ゆえ、此度の陣は和睦に相済み来年必ず再乱でるべし、諸事其の心得を以って軍用事申し付くべき旨」と云って、再度の乱を予言したという。さすが、智の景綱の予言した通りに夏の陣へと進んだのである。

十五日、下野小山の旅舎で大坂豊臣の使者和久半左衛門宗友是安に出会った。

是安は秀頼の祐筆を勤めており、家康、秀忠両御所へ政宗から合戦を回避するよう仲介してもらいたいという依頼状を持参していた。

政宗は是安の父宗是から受けた恩義、宗是との親密な関係を思い、是安を拘留・処分などせずに家臣の目々沢源之丞を副えて関所まで送り還す措置を講じた。

江戸に到着した政宗は、翌十七日登城して將軍秀忠に御目見し、二十日、馬上七百余騎、総人数一万八千の陣立てで江戸を出馬した。

江戸留守居として津田民部景康らを当て、宇和島侍従で長男の秀宗も従った。

これより先、政宗家臣の目々沢源之丞と是安らは、小山から引き返し木曾路に入ったがひと改めが厳しく通行困難で、江戸に戻り政宗の指示を受けて箱根の関所で様子を窺うように行動を変更した。

政宗は箱根で是安下向の理由を問われたので、秀頼の口上通りの書付を作成して是安から差し出すように申し送った。三島の陣所でその書付を受け取ったが落字があり書き直しを指示、同時に政宗から土井大炊頭宛の書状を副えて是安に返送した。是安は三島代官に一旦預け置かれ、二十六日秀忠公は三島に到着し、そこで是安の手から口上書が公の許に進上されたらしく、口上書が治家記録に収録されている。

政宗は是安の身の危険に配慮して慎重に対処した。是安は三島代官に預けられ拘留されたが、その後政宗は是安釈放のためいろいろ奔走している。

十一月五日、大坂に着陣し、陣所を仙波、茶臼山、住吉と移した。

綱元は嫡男良元と共に政宗の長男・秀宗の陣に属して転戦した。

陣中の政宗の動静で興味深い点を「治家記録」から拾った。

- ・今井宗勲が下賜の奈良酒一樽、蜜柑二籠を持参しての陣中見舞い。
- ・ある朝、歩小姓組はじめ足軽まで三千余人に御料理を下され、政宗も小袖黒地に裁付袴で、その場で振る舞った。
- ・政宗は陣中で、家康股肱の藤堂和泉守高虎を饗応した。

十二月二十二日、豊臣秀頼との和睦が整い、翌日から大坂城石垣崩し・堀の埋め立て工事を開始した。「石垣を崩し堀を埋め、三の丸まで平地となす」とある。

政宗は、城取崩し工事の監督のため、仙波陣所にて越年した。

工事は一月末には請取分は完成し、二十四日京都三条の屋形に帰った。

政宗の客将として大谷邑に住していた和久又兵衛入道宗是は、大坂の役が起こるや太閤の恩に報じたいとして、政宗公に暇乞いをして許しを得て、従っていた若い従者を連れて大坂に入城したという。

一旦和議が整うと、一時的なもので再び乱が起こると察し、大坂に留まったとされる。夏の陣には一人で参戦し、徳川勢に突入して見事に討死した記録がある。

○秀宗君の宇和島入部、綱元が藩政補佐

慶長二十年(1615)、夏六月改元し元和元年。

二月、政宗の嫡男・遠江守秀宗に、伊予宇和島十万石を賜わり大名になった。

大坂冬の陣に政宗・秀宗親子で参陣し初陣をかざり、家康から参陣の功として与えられたものである。

秀宗の宇和島への初入部にあたり、政宗は家臣の山家公頼(筆頭重臣・千石)を藩惣奉行として付けた。このとき、秀宗公の老臣として桑折左衛門景頼(後の石母田景頼)、志賀右衛門が付けられ、この他、桜田玄蕃を始めとして騎馬三十騎、家臣総数五十二人が添えられた。

二十八日、秀宗が宇和島に向けて京都を発駕した。

綱元は嫡男良元とともに藩政補佐を命じられ、京三条の屋形から宇和島へと赴いて、藩統治機構の立ち上げに尽力した。

また、藩政整備のための初期資金として仙台藩から六万両の借財をした。

和久半左衛門是安の釈放絡みの進展であるが、三月三日、父の宗是より政宗に書状あり、「近日先ず駿河まで下向せらるべし、是安殿のこと少しも油断なく心安かるべし」と返答した。昨年冬の陣の和議で大坂に留まったとされる父・宗是、この時代に、息子の是安の安否を気遣い政宗に確認の書状を送るなど、親子の情愛が現代以上に強いことに感心させられる。

翌日は偶然にも是安から進物があつた。「其の方のこと、ゆめゆめ疎意に思うことなく幕府御年寄衆へも申しているところだ」として、是安の釈放について心掛けている由を返信している。

その後の和久是安釈放の運動については「治家記録」によれば、五月に土井大炊守へ山岡志摩重長を使者として丁重な詫びを入れ釈放を依頼し、本多上野介へも相談している。更には、是安にも進捗を直に書状で知らせているのである。

○大坂夏の陣、真田幸村子女との遭遇

三月、政宗は越年した大坂から一旦帰国の途につき二十一日江戸に到着した。途中駿府における家康との会見で、東西再手切れが近いことを知った政宗は、江戸から大坂に引き返す予定を立て、冬の陣にお供した将兵は既に国許に帰っていたので、一門の涌谷邑主伊達定宗に「去冬の如く、鉄砲の者どもを召し連れ、馬上四十五騎の体にて早々罷り登らるべき旨」、出兵の指図をした。

冬の陣に出陣できなかった嗣君忠宗は、今回は初陣の意志を表明し、政宗は老中土井利勝の許しを得ていた。しかし今回の戦いが野戦中心で、大坂方の死に物狂いの突撃で激戦が予想されたので、忠宗の身上を心配して土井利勝に断り、忠宗の出陣を中止させてもらったのである。政宗の子弟への細心の配慮を見ることができる。長男秀宗は冬には参戦したが、今回は藩を立ち上げた直後でもあり、上意により宇和島の在所に在留することになった。

茂庭綱元父子は宇和島藩の統治機構を立ち上げている最中であつたが、大坂夏の陣の書状を受けると、宇和島から出陣した。

京三条の屋形には、仙台より石母田大膳亮宗頼、亙理宗根、原田宗資ら家臣が続々参着していた。「五月二日、仙台より新田式部義親・秋保長門頼重ほか三十六名参着す」という記述があり、茂庭綱元の親族で義理の甥、駒ヶ嶺領主の新田義親は夏の陣に参戦したことが分かる。

国許で出兵指示を受けた家臣団は波状的に仙台から駆け付け、夫々の屯所・宿所で合流しては大坂を目指した。

政宗は、奈良口御先手を仰せつけられ、五日奈良を出陣した。

政宗の軍列は、「鉄砲三百挺、槍百棹、弓百張、馬上三十騎、続く片倉小十郎重長は、槍五十棹、・・・、伊達安房成実、石母田大膳、・・・、政宗公旗本本備馬上百五十騎、・・・、」とある。

伊達主力は奈良口の先手として、片倉小十郎重長は千余人を率いて道明寺口岡山麓に着陣し、激戦、転戦した。

片倉勢の軍装について「馬上は金の愛宕の札の立物に面々の指物を指す、歩小姓は朱の尖笠を冠り、白布の単羽織、後に愛宕山大権現守護の所と大字に書付け、・・・鉄砲弓鎗足輕は紺地に白九曜の羽織を着し・・・」と、兵士の軍装が目につく。

○真田幸村と子女との遭遇

道明寺の激闘と伊達軍の奮戦については、本書のテーマではないので触れない。意外に知られていない、片倉家と西軍に参加した真田左衛門佐信繁の接触から始まった仙台真田氏の発祥の話に触れたい。

なお、松代藩の正史では幸村とするが、彼が生きていた時代の直筆は全て信繁であり、幸村の名が使われている史料はない。書状の引用以外は慣用の幸村と記す。

以下は、片倉家文書『老翁聞書』に記されている実話である。

「大坂落城のみぎり、城中より年の程、十六、七ばかりの容顔美麗なる女性白綾の鉢巻し、白柄の長刀を杖つきて、片倉重長の陣先へ出しけり。重長之をつれ帰りて後室とす。誰人の息女たることを語らず。(途中略)。後その家来のもの尋ね来りて臣下となる。真田左衛門佐幸村の息女とす。寄手諸将の中に片倉兼ての英名、殊に此度の目を驚かす、武功の事なれば末繁昌ならん事を予めはかり、容色萬人に勝れたる息女なれば、捨てたまふべきにあらずと幸村申し置き、重長の陣の前へ、差し出したるならんと、皆いへるけりとなり。」

これは、大坂城炎上直前の元和元年五月七日、戦場の片倉陣営の前に、後で真田幸村の娘と判明する女子が現れて(保護を申し入れ)、片倉小十郎重長が政宗の承諾のもとに保護して仙台に連れ帰り、のちに重長正室死去のあと、後室にしたことが書かれているのである。

片倉家文書によれば、片倉小十郎の陣先に幸村の長女阿梅を送り届けたとされる。

幸村は道明寺の戦いにおいて片倉小十郎と一戦交えており、その男ぶり、果敢な雄姿を認め、伊達家の中でも将来性に着目し、容色優れた長女阿梅を安心して託せる漢と踏んだうえで、送り届けたということであろう。

一言でいえば、幸村は片倉小十郎に惚れ込み、そして賭けたのである。

終戦後、京都に駐屯中の仙台藩屋敷に、六女おかね、七女阿菖蒲、八女(名前不明)、そして次男大八が送り届けられた。ここに来て、片倉重長は全貌を把握し、デリケートな問題を孕むだけに政宗公と十分に協議し、藩としての対応を固めたのであろう。

阿梅はじめ幸村の子女五名を軍列の中に匿い九月に仙台到着後、子女たちは片倉重長の保護を受け、四人の姫は白石城内にて養育された。後、三女阿梅は片倉重長の後室となり、六女おかねは京の茶人石川宗雲に、七女阿菖蒲は三春城主田村氏の末裔である片倉定広(伊達家臣)に、それぞれ嫁したとされている。

一方、幸村の次男大八は名を片倉久米介と改め、片倉氏から一千石の食客禄を与えられ客分として白石城外で養育され、元服後は四郎兵衛守信と名乗ることになる。その後、伊達家臣として三百石を与えられ、二代辰信のときに真田を名乗ることを許され、仙台藩家臣として明治維新を迎え、現在の十三代当主に至っている。

上田市立博物館蔵の「真田信繁像」の初代信繁の頬と目元がよく似た好々爺とお見受けする方が現当主である。

夏の陣での、政宗・綱元それぞれにゆかりの漢のエピソードを以下に紹介する。和久又兵衛入道宗是であるが、冬の陣和議の後、再び乱あることを見通し大坂に留まっていたが、夏の陣が到来するや、「若い従者に別れを告げ、甲冑の替わりに白綾を着て、兜を被っただけの姿で槍を手にし単騎で徳川勢へ突入、敵大勢取り巻き鎗数十本を以って心腹を貫き、終いに首を獲られた。年八十一なり」と、治家記録は記している。この壮烈な戦死は討死と言うよりはむしろ、故太閤に対する恩義の殉死といった方が適当であろう。義烈の士であった。

綱元三男正次郎実元二十七才は、この大坂夏の陣では政宗の御膳番として陣所に在ったが、抜け駆けして敵陣に入って馬上の一騎と組み打ちして首と旗を取って引き返して来た。どんなはずみか間違って敵の旗を差し上げたので、先手の片倉小十郎重長の陣から一斉射撃を受けてしまった。

実元は旗を差し換えたけれどもなお射撃は止まない。

政宗これを見て「正次郎の指物だ、鉄砲を揚げよ」と下知して納まった。

政宗は実元を召して、敵兵の首と旗を見てその働きを褒めた。

それからのちは陣中での働きを許されたという(栗駒史談会編『栗駒物語』)。

祖父良直、父綱元の血を引いた実元は、御膳番では飽き足らず戦闘に出たくてうずうずしていたのであろうか。それとも、栗駒史談会編集氏の創作であらうか。

六月、政宗公は、軍功により正四位下参議に任ぜられ、「仙台宰相」と称した。

八月、大坂夏の陣を終え江戸に帰着し、九月仙台に帰城した。

○綱元盟友・片倉小十郎景綱の死

十月、綱元の盟友・片倉備中景綱(小十郎景綱)が、白石城にて中風のため五十九才で死去した。政宗の三傑で「智の景綱」と称され、政宗少年時代の教育係であった。景綱自身が開山に関わった白石の傑山寺に葬られた。

江戸屋敷で備中景綱の訃報を聞いた政宗は、「金の鎖にても、ならばこの世に繋ぎ止めたかった」と言って涙をこぼしたという。

名補佐役であった片倉備中景綱の死は、政宗にとって大きな衝撃であった。

死後、景綱の人徳を慕った家臣六名が殉死した。

片倉代々記によれば、制野下総高義、氏家藤左衛門直通、作間與惣右衛門義直、岡和田太郎左衛門昌真などである。

晩年は大層に肥満しており、『伊達世臣家譜』によれば十年以上も前の慶長七年、政宗公より「年を取って太ったその体では重い鎧は身に合わないであろう」と、公の軽い鎧を賜わり、忠告を守って天命を全うするよう諭されたことが載っている。

世臣家譜の記録としては珍しい内容の記述と思われる。

戒名は「傑山常英大禅定門」、後に「傑山寺殿俊翁常英大居士」と贈り名された。

敵にばれないよう墓石などの墓標は一切造らず、一本杉を墓印にしたと伝わる。

愛宕山に改葬された後は、片倉家十一代以降の墓地になった。

境内本殿の前には、片倉小十郎景綱公の銅像が建立されている。

自身の墓標でもある一本杉の切り株に腰を下ろし、甲冑姿ではなく、鎖帷子に陣羽織・烏帽子姿の銅像である。笛の名手でもあり戦場でも愛用の篠笛「潮風」を手放さなかったとされたその笛を手になっている。

三代景長は、片倉家代々の城主の墓所を、白石城の見える愛宕山山麓に決め、初代景綱と二代重長の墓を、延宝八年景綱の命日に傑山寺から改葬した。

石畳を敷いた床面の上に十体の大きな石像と一基の墓碑が、苔むした花崗岩の玉垣の内に整然と並んでいる。初代景綱から十代までの廟所になっている。

余談になるが、景綱の異母姉・片倉喜多は、慶長七年に白石城主の景綱を頼り、廟所近くの愛宕山に庵を結んで生涯独身を通し、七十二年の生涯を終えたが、墓はこの庵近くにある。

同月、仙台城中にて政宗六男吉松丸の元服を祝い、以後、筑前守宗信と称した。

十一月、片倉小十郎重長に、父備中景綱の遺城・白石城をそのまま差し置き、千三百貫文(一万三千石)の知行相続を賜わった。

○綱元 元和偃武で多忙な日々

元和二年(1616)

正月 仙台城にて久方ぶりの新年慶賀であった。

二月 大御所御不例(病気)の由、江戸から注進あり、十日駿府に上るべく発駕。この月末には駿府に着き大黒屋某所に旅泊し、三月まで度々大御所にお見舞い。四月四日には急に登城の上意があり「大御所御布団の上まで召し寄せられ、公方(秀忠)の御事を御頼み思し召さるの由上意あり、公(政宗)落涙したまい、大御所も御落涙と云々」とあり、形見として御掛物清拙墨蹟を賜った。山岡志摩重長を御付人(連絡方)として残し、政宗は一旦江戸に帰った。

四月十七日、大御所徳川家康公は駿府にて七十五才の天寿を全うした。神式を以って久能山に埋葬し、東照大権現と勅賜された。

五月、かねてから申し入れていた和久半左衛門是安を仙台藩に引き取る件に付き、本多正純・土井利勝より書状があり、詫びを認め政宗に賜る旨のご下命があった。飛脚を以ってこの旨を是安に伝え、早々に仙台に参るように書状を送った。

以下に抜粋したように、大名から宛てた書状にしては懇ろな文面で、政宗の人柄を感じさせる。

「急度以飛脚申入候、其方身上之義、連々本多上野殿・土井大炊殿頼入候処、今度 公方様御前相済之由、……早々此方仙台江御下待入候、……」

赦免後の八月には仙台領三迫沼倉邑に千石を与えられ、家格着座に列した。この半左衛門が初めて政宗に謁したのは十一才の時といわれ、政宗から短刀で肱を刺すよう試みよと言われた時に顔色を少しも変えず、政宗を驚かせたと伝えているから、単なる多芸の士ではなく、父宗是に似て胆力もすわった武人であった。是安は書道を中心とした多芸多趣味で、祐筆を中心に吏僚として政宗に仕えていくことになるが、父宗是同様に政宗の信頼厚く、昵懇の間柄に遇された。

是安は三迫沼倉邑に居住し、寛永十五年六十一才で没し、栗原郡宮野村妙円寺に葬られた。

子孫は、村長・教育者の一家で、本家は現在の宮城県栗原市沼倉、分家は同鶯沢に健在である。

七月、娘婿の松平忠輝が家康の遺命により、伊勢国朝熊に移され、越後高田六十一万石は没収された。ここに至るまで、政宗は忠輝救済に積極的な手を打っていない。「治家記録」には、「忠輝は大坂表の義に就いて大神君の御勘当あり」として、勘当の原因を徳川実紀と同様、淡々と記しているだけである。

娘婿のためにかくも冷静に対処したのは、政宗が家康の心をよく理解していたからだ、識者はいう。

連枝を意識した忠輝の驕慢な行為の中に、徳川家を崩壊に導く危険要因があると、政宗が認めたからであるとしている。

十月、嗣君忠宗が正五位下、侍従に任ぜられた。

十二月、茂庭石見は江戸屋敷にて岩ヶ崎城主で政宗公五男、伊達摂津守宗綱(十四才)に同行し、政宗公にお目見えした。

更に、この十日後、伊達摂津守宗綱、伊達河内守宗清(政宗三男十七才)は、江戸城に登城し将軍秀忠に拝謁した。

将軍には良馬を献上し、将軍からは佩刀を下し置かれた。

宗綱は三迫岩ヶ崎の城主として、宗清は黒川の城主として、心意気を新たにした。

この年、綱元嫡男の良元三十八才が、奉行職に就任した。

当時の奉行は、石母田大膳亮宗頼、奥山大学常良、茂庭周防良元、遠藤式部少輔玄信、山岡志摩重長、大町駿河義頼であった。

この頃から、岩ヶ崎城の宗綱家中の指揮は評定役にして奉行の茂庭石見に替わり、古田伊豆重直が執るようになっていた。

岩ヶ崎城主の宗綱は三年前に元服しているので、超多忙な茂庭石見が仙台との往復で岩ヶ崎城に在館する機会も少なくなっており、当然の成り行きであったろう。

元和三年(1617)

正月、ここ三年は大坂越年をはさみ、久々の江戸での正月ご祝儀であった。

二月末、政宗は仙台に帰国したが、慌ただしく五月には参勤で江戸へ出立した。

江戸到着後、茂庭石見に宛て、将軍秀忠公上洛の供奉を仰せつかった旨の書状を送った。これにより政宗は六～八月、上洛にて江戸を留守にした。

十月、江戸に帰着した政宗は、仙台の私邸にて腫気で療養中の岩ヶ崎城主の宗綱の症状を気遣い、「摂津守腫物の様子、心許なく候処……江戸で名声のある医師津軽殿を近日中に仙台に下向させるので、それまで養生するが肝要」と、茂庭石見へ書状を送っている。

初めて長患いの子弟をかかえた、政宗の子煩悩な性格を感じさせる書状である(『仙台市史』伊達政宗文書収録)。

十二月、将軍秀忠の養女振姫十一才が嗣君忠宗に興入れした。

振姫は播磨宰相池田輝政の娘で、母は家康の次女督姫(良正院)であり、まさしく家康の外孫で、当時としては最高の身分の女性であった。

振姫には、慶長十二年に忠宗と婚約していながら十五年二月に四才で夭折した叔母清雲院 市姫(家康五女)がいた。慶長十二年、姫路城で生まれた振姫は、この身代わりの形で、今回将軍秀忠の養女として忠宗に下嫁することになったのである。

元和四年(1618)

政宗、仙台に戻り、四、五月に領内巡見に出た。

一関で一泊の後、奥州上街道を南下し、子息筑前守宗信の三迫岩ヶ崎城に六連泊した。六連泊など滅多にないことであり、病気の子息宗綱と、その養子に入り二代目を継いだ宗信のことが余程気掛りであったのであろう。

前年から初代城主で五男摂津守宗綱が病気により、側室柴田氏との間に生まれた六男で筑前守宗信が兄・宗綱の養子に入り二代め城主に就いたが宗信も若年であったので、増田宗繁、堀越重治が付き人になり岩ヶ崎筑前家中の指揮を執っていた。

政宗は岩ヶ崎に着くなり、増田、堀越兩名を筑前守宗信の後見役に任命し、家中の仕置きについて、御下知の黒印を下賜した。

なお、政宗が岩ヶ崎城に立ち寄ったときは、随行した家臣とともに、城の西に位置する曹洞宗黄金寺を宿舎としていた。

記録によれば、この黄金寺は越後村上の曹洞宗の古刹耕雲寺本山二世の中積が、嘉吉元年(1441)に開山したと伝わる古刹で、文明年中の火災で七堂伽藍を始め全て焼失してしまった。

城主の摂津守宗綱により再興され、客殿(本堂)、庫裏、禅堂、衆寮(修行僧の自習寮)、山門の普請が、丁度この年に成就されたばかりであった。

本堂の裏の池・庭園は伊達の抱え庭師清水道寛の作と伝わる。

滞在中に使用したと伝わる桃山風の椀と菓子器が、寺宝として今日に伝わっている。

十 綱元 高野山にて宗綱君の菩提を弔う

元和四年五月、仙台の茂庭石見より書状を以って、仙台で療養中の宗綱の治療、医師のことなど、政宗公に仔細を報告し指示を仰いだ。

現存しているだけでも、五月六日、八日、十四日の三度にわたり、政宗は守役の茂庭石見に書状を送り指示したことが分かる(『仙台市史』伊達政宗文書収録)。

同二十八日、宗綱、病気治療の甲斐なく、仙台の私邸において病死した。

十六才であった。法名は華屋浄蓮。墓は、仙台の松音寺にあるが、領地岩ヶ崎の黄金寺を位牌所としたので、黄金寺にも位牌が残っている。

「政宗卿さしもの御寵愛なるにかくまで、御昇進の上いまだに御年もわずかにて、かようにならせ給えば、御哀傷限りなく、御嘆き浅からざりき。多年恩顧にあづかりし近習、外様の侍臣、御別れを悔み奉る者いくばくぞや。其の中に、高橋三吉と申す者、其の別れを慕いまいらせ殉死をぞ致しける。ご遺体は、松音寺にて一片の烟となり奉るぞ悲しけれ」と、政宗及び家臣の悲しみ・嘆きが「伊達便覧誌」に見える。

政宗は五男宗綱の夭折を悼み、次の句を詠んだ。

「幼いけなき 人は見果てぬ 夢かとよ 現に残る 老いの身ぞ憂き」

政宗としては、忠宗の同母弟である宗綱を大切に、特に勲功拔群の茂庭綱元に養育を依頼したのであった。政宗は宗綱の将来には、或いは独立大名に取り立てて貰おうというような期待を抱いていた節が見て取れる。

六月、将軍秀忠公より飛脚を以って宗綱死去のお悔やみ状が届いた。
政宗五男の宗綱の死に対するお悔やみ状を将軍より頂いたことは、政宗はもとより宗綱の後見役の茂庭石見にとっても悲嘆は増幅されたことであろう。

茂庭石見は悲嘆のあまり剃髪して僧籍に入道し了庵高吽こうんと称し、宗綱公菩提のため高野山に赴いた。

政宗公は百か日を過ごしたら帰れと命じ、次の和歌を贈った。

「行くととも 茂る木陰の涼しくば なつきにけらし 主帰りこし」

政宗は、夏から年末にかけて、松浜での鮑漁、白石での川猟、鉄砲狩、鷹狩に遊び、獲物を贈進物として関係方面の交際・外交に使った。
宗綱夭折の悲しみを忘れようとするがごとく、大いに城外の山野・河川に遊んだが、併せて常に外に目を配るのに怠りなく、獲物を贈進物として配っている。
政宗の趣味と実益を兼ねた心憎いばかりの外交気配りであった。

十二月、かつての豊臣秀頼の祐筆、和久半左衛門是安が、栗原郡三迫沼倉に屋敷を拝領したお礼に仙台に参上した。慶長年間に大谷邑に住んでいた政宗の客将、同じく元秀吉の祐筆、和久又兵衛入道宗是の子息である。

和久是安は、政宗への秀吉密使として仙台に下るうち、同じ栗原郡二迫文字に隠居領を持つ茂庭石見には面識があったが、石見が高野山に菩提を弔いに赴いて留守のため、いまだに会えずじまいであった。

政宗の吏僚石見綱元と秀頼の祐筆だった綱元より三十才若い和久是安は、これまで大坂陣の前には書状の遣り取りはあったものの、直接には会っていない。
家格一族の綱元が二迫を離れるまでの間に、三迫沼倉に住した家格着座の和久是安が対面する機会があったか否かは不明である。

元和五年(1619)

正月十六日から二十五日の帰城まで、牡鹿半島遠島に鹿猟に出かけた。
遠島は半島一帯と島々の総称で、政宗が好んだ鹿・猪の狩場だったという。
移動しながら長丁場の狩りの旅であり、正味八日間の鹿猟としても、露営の設営・勢子に駆り出される領民の負担は相当なもので、領民に優しいところがある政宗公は領民の負担にどのように報いたのか気になるが、厳然たる身分社会であり記録はないので分かりかねる。

三月、参勤のため仙台を発ち、江戸帰着後まもなく秀忠公上洛に供奉して江戸を発駕し、五月十六日京都着。公式な参内行事などは伝わっていない。

六月、伏見城へ諸大名中より家老一人ずつを差し向けるよう老中より命じられた。
綱元の嫡男で奉行の茂庭周防良元を差し向けることにした。

七月、広島城主福島正則は、前年から城を改修していた事実が幕府に伝わり、武家諸法度に反した行為として改易された。

(本書のテーマではないが、正則側は、事前に本多正信らに説明し許しを得ていたとされる。秀吉旧臣・正則の栄達を快く思わない本多正信の陰謀か、はたまた旧豊臣大名の壊滅を狙う正信の政略かというのが定説になっている。)

福島正信のことについて政宗は、京都から書状を以って嗣君忠宗に「くれぐれも自重し、すきを見せないよう」一層の分別を促している。

十月江戸に帰着したが、京滞在中は、織田有楽斎(茶人)・金地院崇伝(僧)・西洞院時慶(歌人・医者)・石川宗林(茶人)らと交際した。文化人政宗らしい一面である。

元和六年(1620)

二月、江戸城二の丸大手口枡形・石壁の普請を仰せつけられた。

四月に帰国の御許しが有り江戸を発駕後の二十日に普請始めが予定されたが、「政宗参府に及ばず」と、老中土井利勝から書状があったのは仙台帰着後の五月十七日であった。伊達成実を普請名代として派遣する旨を老中土井利勝、柳生又右衛門、江戸藩邸の嗣君忠宗など関係各所に書状を以って連絡した。普請奉行・石奉行各三人、諸役人三十人、工事人夫二千人の派遣であった。

この工事は前々から政宗が志願していたもので、大坂陣に出陣できなかった(差し控えたのが正しい)江戸在住の嗣君忠宗の名誉挽回を意図していた。後に判明した石壁総長は十三町、人夫四十二万三千余人、経費は黄金二千六百七十六枚五両余であったという。

人夫だけで見ると二百日以上の大掛かりな規模の工事であった。

六月、普請名代伊達成実(副名代に大条実頼)は江戸に到着、十日に將軍秀忠公が普請場に出御し、忠宗や成実、実頼を召出し、直々に上意を賜った。

八月二十六日、先に南蛮国に派遣していた支倉常長が帰朝した。出発後に禁教令が厳しくなり、国内情勢も一変し人目に立たないものであった。その一月後、老中土井大炊助へ書状を以って支倉常長帰国について報告した。

九月、政宗の長女五郎八姫が江戸より仙台に帰り、「御城山西の麓に居宅を営み居住することになった。西館と称し、後に天麟院と号した。

越後少将松平忠輝が徐封後に離縁し、始め江戸屋敷に住んでいたが、この年、仙台に帰り城中に一画を設けて居所と定めたのである。

因みに五郎八姫は万治六年八月に落飾、寛文元年五月に死去、享年六十八であった。松島に葬り寺を建てて天麟院と称した。

この秋、元和四年に宗綱公菩提のため高野山に赴いた茂庭石見了庵は、成就院を再興し禄の百石を分附して宗綱の菩提所とし、三年間供養して帰国した。

石見了庵、高野山から帰国し気が付いたら古希の年令になっていた。

その頃、屋敷を宮城郡下愛子栗生(仙台市青葉区下愛子栗生)に拝領した。蕃山の麓にあるこの屋敷には時々猪が出たといわれる地であったが、後に、天麟院(政宗長女の五郎八姫)に差し上げている。

十月、政宗は茂庭石見了庵宅を訪れた。

高野山での宗綱公の菩提供養を謝し、帰参慰労の宴を催した。百か日を過ごしたら帰れと命じて仙台から送り出した政宗であったが、三年にも亘って菩提を弔って帰国した石見了庵に対して、不在中の内政・家中の混乱(成実出奔等)についてどこまで触れたか、今となっては知る由がない。

十一月、将軍秀忠公より、江戸城普請の成就、嗣子忠宗の精励を称える内書を賜った。忠宗には大俱利伽羅広光の腰物を、名代伊達成実は拝謁の上、時服を拝領した。「普請場石壁十三町余、枘形一箇所なり、此人夫四十二万三千百七十九人半、御入料黄金二千六百七十六枚五両三分」と記されているから、かなりの大工事であったことが分かる。

この年政宗は、宇和島十万石で長男の宇和島侍従秀宗を、一言の相談もなく付家老の山家公頼を成敗したかどで勘当した。山家公頼の父は、政宗の生母保春院に従って最上より来て伊達氏に仕え、公頼は秀宗の守役となり、秀宗に従って宇和島に配され、桜田監物とともに国家老を命じられていた。

家臣どうしの対立から監物の讒訴に遭い、秀宗によって誅されたのであった。事前に対立を穏便に処理できなかった秀宗を不快として三年間の勘当としたのであった。

元和七年(1621)

正月、仙台城で祝儀を受けた政宗だったが、二十三日夜半に江戸で紀伊中納言頼宜卿屋敷から出火し、伊達の上屋敷(政宗居住)と本屋敷(忠宗居住)が類焼した。直ちに造営再建のため、造営奉行として軽辺次郎兵衛、石母田安頼ら四名、大工棟梁梅村日向を派遣した。

将軍より合力金として政宗へ銀子五百貫、忠宗へ二百貫を賜う旨、江戸の忠宗から書状があり、政宗は直ちに伊達成実を御礼言上のため江戸へ派遣することにした。

この年、政宗公の十男、千勝丸(後の、伊達兵部宗勝)が誕生した。

後、万治三年(1660)に三万石の分知を受け奥州一関藩主になった人物である。

三代藩主綱宗公の藩主不適格・不作法の儀により、幕命によって隠居を余儀なくされ、その跡を僅か二才の長男・綱村が継ぐと、叔父宗勝はその後見人となって仙台藩を専横することになる。

伊達騒動(寛文事件)で土佐流罪という重罪を受け一関藩は改易となった。

また、嫡男の宗興は小倉に流罪、宗興の正室と子供たちは兵部がかつて縁故のある伊予吉田藩が願い出て預かった。

兵部宗勝は配所土佐の小高坂村に広大な新築の屋敷を賜り、警備は厳重であったものの五百人扶持を与えられて暮らし向きは悪くはなく、延宝七年(1679)、土佐で五十九才の生涯を閉じた。

高知市内の五台山に墓所があり、葬られた墓石は現在から見ても立派なものであった。昭和四十二年五月、「伊達兵部宗勝墓」が、高知市指定の史跡になっている。

十一 政宗公と老臣茂庭綱元

○将軍秀忠公から家光公への時代

元和八年(1622)

八月、山形城主・三代の最上源五郎義俊が内紛を治めきれず、城主の政道よろしからずとして秀忠公から領内五十七万石残らず没収され、改易に処せられた。

元和三年に若年で家督に就いたが、擁護派の松根備前(義光の甥)と反対派の鮭延典膳に分かれて内紛が起こっていたのであった。

最上義俊は、近江の国大森に一万石を与えられて逼塞した。

政宗はこのとき江戸におり、領内諸城の請取り使として人数三千の派遣を求められ、伊達安房成実と伊達安芸定宗(涌谷伊達氏初代)を名代として遣わした。

一方、幕府からの最上領接收使として出張り来た宇都宮藩主本多上野介正純、笠間藩主永井右近大夫直勝の接待を命じられたのは、茂庭了庵綱元・周防良元父子、石母田大膳亮宗頼、山岡志摩重長であった。江戸にあった政宗公から茂庭了庵ほか四名宛の八月二十一日、九月三日付け書状が『茂庭家記録 綱元君記』に残る。

本多・永井両名が最上滞留中に饗応する御肴(海肴・川肴)の心配や、仙台藩自慢の御酒(仙台諸白)がこの時季、質が悪くならないかに至るまで細かい気配りをし、「毛頭油断有間敷候」と指示しているのである。

また、江戸詰奉行の大條実頼を連絡調整のため仙台に派遣するにあたり、具体的指示を「御内用ノ義」とし書状(九月三日付け)にして与えている。

冒頭で、本多正純に上等の諸白(清酒)を十樽、永井直勝には五樽贈ったことに触れて、如才ない政宗の面目躍如といったところ。続いて、「以前、秀宗が伊予に十万石を下賜されたとき、駿河で正純殿を前に大御所様に御礼申し上げたところ、今回は空きがないので少しだけになってしまったが、これで終わりではないと大御所様は思っていると僕は感触を得ている。同席した正純殿も覚えているだろうから、この際よい空き所がでたのであるから、大御所の約束を実現してもらうよう働きかけよ。よきついでのとくに、そなたから申し上げてみよとして、より具体的に政宗の思いの丈を書き記して指示している。

すなわち、「隠居したいが今の領地から隠居分を分ければ、政宗がこれまでやってきたご奉公と同じことを忠宗が務めることが難しいので今少しご加増いただき、それを

隠居分に当て親子とも安心してご奉公できるよう、家中の者どもは偏えにお願いしてみよ」と。但し、今すぐ申し上げるのではなく、機会を見計らって最も良い機会に家中一同の願いとして申し上げるように、と追伸までしている念の入れようである。

接收使の二人に対する直接の対応については、既に、家老職としての第一線を退いている了庵綱元であったが、元官房長官綱元の老練な対応で凌いだことであろう。しかしながら、更なる加増のお願いの件は、そのすぐ後に正純の失脚によって雲散霧消したので、表面に出したのかどうかは不明である。

なお、本多上野介正純が將軍秀忠公によって改易され、出羽国由利へ流罪となったのは、城の接收使として無事に城を接收したこの後のことであった。知行は一千石のみとなり、身柄は佐竹義宣に預けられ、出羽国由利へ流罪となり、後に出羽国横手にて幽閉の身となった。

改易の理由は、家康の生前、駿河にいた頃から秀忠の意向に背くことが多く、加増による改心を期待したが態度を改めなかったことが決定的とされた。

具体的な罪状は宇都宮城吊り天井事件など十数カ条示されたと云われるが、老中井上正就に行なわせた調査では天井に不審な点は確認できなかったという。真相は不明であるが、秀忠公が自分の意に沿わない正純を排除したとも、正純の存在を疎ましく思っていた土井利勝らの謀略であったともいわれる。

九月、改易により実家を失った政宗生母最上夫人(保春院)は山形に在住しており、今度仙台に迎えることになった。政宗を殺害しようとした思い切った行動も伊達氏の存続を願う立場から計画されたものであると理解していた政宗との間に一応の和解が成立していたと思われるが、政宗は片倉小十郎、山岡志摩、茂庭了庵らに適切な指示を与えて、生母を山形から仙台に迎え入れた。

政宗に対する遠慮、自責の念の感情が支配している気の強い、実家最上氏に誇りを抱いていた夫人にとっても、仙台への移住は言語に絶する苦しみだったであろう。

元和九年(1623)

この年正月、政宗公五十七才、嗣君忠宗が侍従に昇進した。

四月 参勤で二十五日江戸へ到着。五月、忠宗が登城して將軍に拝謁。政宗父子に共に上洛の御供を申し付けられ、先発を命じられた。参内公式行事の記録はないが、「治家記録」に石川宗林(茶人)らと交流した記述がある。石川宗林といえば、片倉家の養女(真田信繁の娘おかね)を室とする茶人である。

六月、忠宗夫人の振姫が江戸に於いて女子を初産し、鍋姫と称せられた。後に筑後柳川藩二代藩主立花左近将監忠茂の夫人となった。また同じ日仙台では宿老原田甲斐宗資が四十三才で病死し、後に嫡子雅楽五才が家督を相続した。雅楽は後に元服して宗輔と称し、万治年中奉行に就いた。寛文十一年三月の伊達騒動では、悪名を一身に背負った原田甲斐その人であった。

一方、立花左近将監は伊達騒動では親戚として鎮静化に大きく関与した。

立花左近将監の夫人となった鍋姫の誕生、政宗親戚の立花左近将監を後の伊達騒動で悩ませる元になった原田甲斐宗輔の家督相続が同じ日に行われたことは、偶然とはいえ筆者は何か運命的なものを感じるのである。

七月十六日、仙台に於いて政宗の御母堂、保春院殿花窓久榮尼大姉が卒去した。御年七十六才。覚範禅寺にて火葬し奉った。

禁中から勅使を以って哀悼の意を仰せ下される光栄に浴した政宗は、「立去リテ浮世ノ闇ヲ遁^(ノガレ)ナハ心ノ月ヤ猶モ曇ラン、鳴虫ノ声ヲ争フ悲シミニ涙ノ露ソ袖ニヒマナキ」と悲嘆の和歌を詠じたという。

徳川家光は父・秀忠とともに上洛し、七月二十七日に伏見城で将軍宣下を受けた。三代将軍は江戸へ戻ると本丸に移った。

九月、政宗父子は京都を発駕し二十日に江戸に帰着した。その後は、京都供奉、母堂の死去など、溜まったストレス解消と思われる、府中、久喜などの御鷹場を巡ったことが記録されている。

元和十年(1624)、二月改元し寛永元年。

正月を江戸で迎えた政宗は、二月には将軍家光公が江戸外桜田の政宗藩邸に初めてお成りになった。御供は甲斐中納言忠長(家光弟)・棚倉宰相丹羽長重などであった。数寄屋でお茶、表で能三番、御膳を差し上げ、将軍より御太刀元重・御腰物貞宗・御脇指志津、馬一匹、銀子二千枚、時服百が政宗へ下賜された。政宗からも御太刀豊後行平、御腰物光忠、御脇差国次、馬二匹、小袖百、虎皮十枚、銀子千枚を献上した。

四月まで、「治家記録」には、政宗の茶席、饗膳、献上品、到来物、贈進物に関する記事が頻出し、十五日江戸を発駕し二十二日仙台城に帰着した。

九月、政宗嗣君忠宗に正室徳川振姫との間に、長男虎千代丸(政宗の初孫)が誕生した。

この寛永元年は天候不順で、領内は飢饉となった。「この年、四月、五月頃より段々寒く、六月土用中天气曇り或いは雨降り、或いは霜降り、七月大風吹き田畠不熟し飢饉す」と伝えられている。

寛永二年(1625)

正月祝儀を仙台城で行った政宗は、この年は無事太平の一年になった。

四月、参勤で仙台を発駕。登城し両御所へ拝謁、嗣君の入国のお暇を申し出た。

当時は大名の参勤に際しては、江戸入りすると使者が来邸して労を労うのが通例であり、政宗の場合は特に老中(今回は将軍家上使・酒井忠勝、大御所上使・土井利勝)が来邸した。

参勤江戸入りの労を労った老中は、大名側の饗膳にあずかり、道中の諸国の様子や見聞した街道の状況などを聞き取り、国の安堵に目を光らせたのであろう。

五月、嗣君忠宗二十七才が、石母田大膳宗頼ほか諸士二百騎を従え初入国した。政宗が元気なゆえに嗣君にとっては遅くなつての初入国であつた。

了庵綱元は、忠宗の弟・三河守宗泰(政宗四男)、筑前守宗信(同六男)、右衛門宗高(同七男)と白石城まで出迎え、二十三日、仙台城に着いた。

「城中に入り給い、五々三(膳)の儀式あり、老臣茂庭石見綱元、山岡志摩重長、侍して其の享礼に預かりける。目出たかりける折柄なり」と、了庵綱元は忠宗君の初入国の誉れに預かっている。

この年は、政宗の諸大名との連歌・詩歌等の交遊、饗応、進物贈与の記事が満載である。

政宗五十八才で嗣君忠宗の初入国を果たした関係か大幅に増えている。

因みに記録を数えると次のようである。

- ・連歌・詩歌等の交遊は、例年と変わりなく一月から三月に集中して六件(年十件)。
- ・饗応は四月から江戸に参勤中とあつて十月からだけで、招待十七件、返礼十八件で計四十件ほど。
- ・進物は、十月以降に集中しており、贈り贈られ状態であつた。身内を除けば江戸参勤中が殆どであり、公方、老中、大名との間で年間、贈与五十件、御返し二十三件ほどであつた。

この年、了庵綱元に五男が誕生した。七十七才にして天晴れであつた。

のち長門盛元と称し、摺上原の戦いで伊達氏に付いた猪苗代氏の十五代越後盛次の家嗣となっている。

寛永三年(1626)

正月を江戸で迎えた政宗は、二十日に久喜の鷹場に赴き、三月六日まで滞在した。嗣君忠宗の初入国を叶えた後であり、家督を譲る構想を練りながら思いつきり長丁場の鷹狩りを楽しんだことであらう。

その後、紀伊中納言(頼宜)邸での能楽、頼宜・水戸宰相中将(頼房)兄弟への茶席饗応と能見物、諸大名への饗応が続いた。

この頃から「虫気・虫気吐逆・腹中気」という症状(胃腸病か)が記録に頻出している。こうした中、四月末の晩には、酒井雅楽頭・土井大炊頭ら老中、大名方十六名を一度に饗応し、「嗣君の進物御鷹の鶴料理し給う、御能あり」と、盛大な宴席が設けられた。ここでも狩りの獲物を料理して振る舞うなど、堅実な政宗を彷彿とさせる。

五月、「將軍家上洛あり、政宗、忠宗は前驅たるべし、宗高は供奉の列に加えるべし、宇和島遠江守秀宗も召して具せらるべし」と、父子四人で將軍家光公上洛の御供を命ぜられた。京では忙しく接待や交際に奔走し、七月の大御所秀忠の参内には政宗も供奉した。

八月、官位昇進があった。

政宗は従三位権中納言に、嗣君忠宗は従四位下右近衛権少将に昇進された。続いて、秀宗は従四位下、宗高は諸大夫に叙せられ、父子四人に叙爵があった。こうした中、宗高が疱瘡に罹り十七日二条要法寺に於いて卒去した(享年十九)。大御所からのかたじけない上意、諸家からの使札が到来する中、遺骸を在所の柴田郡村田に送り、竜嶋禅院に葬った。

十月半ばに都を離れるまで連日のように、宴会・茶会を饗応し、返礼に招かれ、旧知の公卿、高僧、文化人、茶人らと風雅の遊びに思う存分人生を楽しんだ。悲しみの中にも半年余にわたり風雅の遊びに浸った政宗還暦の年であった。晦日江戸に到着、十一月十日に江戸を発駕し、久喜で鷹野を楽しみ二十日仙台城に帰着した。

この年、了庵綱元に六男が誕生した。

次郎兵衛常元、のち五右衛門と改め、軽部隠岐の家嗣となった。軽部隠岐は秀吉の家来であったが、綱元が秀吉との賭け碁で勝ち、侍女のお種(香の前)を下賜されたときに、その付け人として仙台に来たと云われ、慶長十年に政宗に出仕し、虎之間番士五百石取りの家格平士で、二迫文字に采地を得たとある。この軽部氏はこの後、茂庭分家から嗣子を迎えるなどして暫く続いた。

寛永四年(1627)

二月八日、江戸にて嗣君忠宗(室・振姫)に男児が誕生した。

童名万助、忠宗の後嗣に予定された人であったが、正保二年九月十九才で没した。

二月末、土井利勝・酒井忠勝・井上正就・永井尚政連署の奉書を以って、政宗は、後の隠居所とすべく若林屋敷(若林城)の造営を許され、翌年十一月に完成した。隠居屋敷の造営について絵図を添えて請願していたが、老中連署の奉書で「御心のままにせらるべし」と正式な許可を得たのである。

隠居所の造営といえども、どこから横やりが入り問題視されるかもしれず、老中方への丁寧な事前の根回しを怠らなかった。

政宗六男の三迫岩ヶ崎城主筑前守宗信の病気が思わしくなく、在国していた政宗公は、城下広瀬川北岸八幡の曹洞宗竜宝寺実雅法印に病氣治癒の祈祷を命じたが祈祷叶わず、八月八日、領地の岩ヶ崎城にて二十六才で病没。法名は泰窓妙安。その遺骸は在所の三迫岩ヶ崎の曹洞宗黄金寺に葬られた。

責任を感じた実雅法印は寺を退去しようとしたが政宗公はこれを許さず、奉行遠藤式部玄信を派遣して思いとどまらせたという。

この時代にあって祈祷の効き目がなかったことに責任を感じ(実は祈祷で快癒はないと分かっていたかもしれない)、責任の去就を申し出ねばならない法印もいれば、この責任の取り方を許さなかった政宗公の現代で云う「科学的思考」が垣間見えるのは、筆者だけではないであろう。

なお、城主筑前宗信の墓(五輪塔、高さ二米)は岩ヶ崎黄金寺の墓地に現存する。

十二月、綱元の孫(良元の二男)で茂元(のち茂行)は十二才で、証人(大名証人制度に云う人質)として仙台藩の江戸屋敷へ登った。

茂元は寛永十八年、仙台に戻って叔父の茂庭実元(綱元三男)の養子となるまで十四年余りも藩の江戸屋敷で証人暮らしをしていたことになる。

年の暮、政宗は参勤のため江戸屋敷に到着し、嗣君には帰国の暇をいただいた。

政宗の第四子宗泰に対し、従五位下三河守を叙任せられた。慶長八年岩出山城主となり、十九年元服して参河宗泰と称した。政宗の子息で政宗生存中に正式に叙任されたのは、秀宗、忠宗を別格とすれば、宗高と宗泰だけであった。

寛永五年(1628)

正月 政宗は江戸で祝賀。四日、嗣君忠宗が仙台城に到着した。忠宗は二十八才にして二度目のお国入りであった。

三月、大御所秀忠公のお成りあり。伊賀少将藤堂高虎、柳川侍従立花宗成らが相伴し、御茶膳、御能七番を楽しんだ。「大御所終日御座しご機嫌よく還御された」と「治家記録」にある。政宗と北御方(忠宗の室)に贈り物を賜わった。虎千代(忠宗長男五才)には御目見えを仰せつけられ、脇指正恒を賜わった。

同二十六日には公方家光が、駿河大納言忠長を御供にお成りになった。公方より政宗、北御方、虎千代に贈り物を賜り、政宗、虎千代より太刀、馬、銀子、時服を献上した。二十九日には、両御所お成りの無事なる成就を祝い、老中方を饗応している。

徳川幕府開闢以来、家康は奥州の伊達政宗の気迫と器量に脅威を感じ常に気にかかる存在だったが、姻戚関係を結んだ後は共存姿勢に変わり、子息の代になり気を許す存在に変わったように感じられる。

特に、家光公は政宗の病床を親しく見舞いするなど足繁く訪問した記録が残る。

三月末、浅草に於いて金春大夫勸進能があり、政宗は棧敷を仰せ付けられ見物に出掛け、翌日も出掛け、三日目には政宗の棧敷に老中井上正就、永井尚政が見廻に

来て酒宴を開き、政宗も島津家久の栈敷を見廻り「御馳走御酒宴あり」であった。おそらく昵懇の付き合いにある数人のグループで政宗が幹事役になり、江戸留守居役を同道して初日から二日も通って栈敷での観能と酒宴のコツをつかみ、必要な準備をさせた上でメンバーを呼んで、お互いに各グループの栈敷を行き来しては観能と酒宴を楽しんだのであろう。公式なものではなく、おそらく想像するように私的な能见物であったと思われる。

六月、政宗は、柳生又右衛門宗矩の身体の衰弱を心配し、湯治のお暇を賜わるよう、老中酒井雅楽頭に書状を以って進言している。政宗は、宗矩(この年、五十八才)の甥で兄新次郎厳勝の三男、柳生権右衛門を仙台藩の剣術師範として召し抱えている関係で、何かと懇意にしていた徳川將軍家の剣術師範・柳生又右衛門宗矩のために骨を折ったのである。同時に、大名の大目付役に就任した宗矩との関係を、良好に保っておく魂胆も垣間見える。

なお余聞であるが、「柳生新次郎厳勝の三男、柳生権右衛門は、元和二年、土御門左衛門久脩の取次により政宗に知行六拾貫四百拾七文(六百石余)を以って仕えた、とされる(『仙台藩家臣録』)。

柳生権右衛門の仙台藩出仕の経緯として先祖以来の拝領の由緒を、時の藩主に申告させた「御知行被下置御帳」を元にした史料に拠ると次のようである。延宝五年二月、二代目の柳生権右衛門(養子)の申告である。

——亡父柳生権右衛門は、政宗公の元和二年、土御門左衛門佐久脩(徳川家康の公家昵懇衆)の紹介により召出され、六百石を知行された。亡父権右衛門に男子なく、拙者伊藤喜兵衛二男を養嗣子(権右衛門)とし十才より奥小姓として政宗公に仕えさせた。亡父は寛永八年から病気がちで奉公が叶わず、寛永十一年に、拙者権右衛門を家督に願い上げ婿名跡となり、同年末、二十才にて権右衛門の名跡(二代目)を継いだ。同十二年、父権右衛門が病没し、引き続き拙者のご奉公致すことになった。拙者実父・伊藤喜兵衛は、先年、加賀肥前(前田利長公)に仕えていたが、その後に牢人致し京都へ引込み……。——

その後、「三代綱宗公の代、万治三年には七百七十石に増禄なった」ことを記している。

八月、片倉某が磐井郡東山岩入に於いて金山を発見したとの報に接した。政宗は金山の事は国許奉行の茂庭周防良元らに書状を以って指図し、若林屋敷造営に従事していた佐々若狭に命じて、東山の金山御用に役替えを申し渡した。藩財政に腐心する藩主政宗の期待はいかばかりであったろうか。その後の経緯は記録にないので、期待したような産出はなかったと推定される。

十月、忠宗が参勤のため江戸入りし、入れ違いに十一月政宗は仙台に帰国した。十六日、若林屋敷が完成し、移徒(転居)のご祝儀を行なった。

寛永六年(1629)

正月元旦、政宗は仙台城にて御祝儀あり。

席次は数年前から厳格に指定するようになっていた。

御座間には伊達治部宗実(亙理伊達家二代)、同左衛門宗実(涌谷伊達家二代)、同又四郎宗元、茂庭石見入道了庵、原田雅楽宗輔(甲斐宗輔)、大広間は、一番座石川民部宗昭ほか、……とある。

茂庭石見は家格一族ながら一門衆と同じ御座間を指定されている。

二月 父・輝宗の菩提寺、覚範寺清岳和尚が設定した御饗応に出向き、翌日には直ぐに御礼の書状を遣わした。

同二十六日、仙台藩は江戸城廻り石壁普請の町場を指定され、政宗の請取町場は屋敷に近い便利な場所であった。

礼状を土井利勝に送るとともに、名代、副使として一門の伊達安芸定宗、奉行茂庭周防良元を派遣し、三月三日、大御所へ御馬を献上、御目見えを仰せ付かった。

嗣君忠宗が在府中なので万事を忠宗の下知に任せ、古内主膳重広・津田近江頼康ら、次期の奉行クラス(若年寄)が普請御用を勤めた。政宗はこの工事を、大坂の陣で参陣を控えた忠宗の挽回の手柄となるよう配慮したと云われる。

これに答えるかのように、大御所秀忠、公方家光が普請所に数回御出でになった記録がある。六月末に今回の江戸城廻普請の請取場は全部完成し、八月八日、大御所よりの内書を賜り、九日に名代の伊達安芸定宗は公方に御目見えした。『伊達安芸家記』に、「御普請成就ノ日御城ニ於イテ御料理ヲ賜リ御能見物仰セ付ケラル」と記している。

四月 政宗は仙台城下の下愛子栗生の茂庭了庵宅へ饗応でお出掛けした。

了庵はこの年八十一才になっていた。

政宗還暦の年に京都で思いっきり楽しんだ風雅の数々を話題にして、ゆるりと酒を酌み交わしたことであろう。

八月、黒印を以って民政上の定め書き五条を奉行に仰せ出された。当時の奉行は奥山大学常良、茂庭周防良元、片倉小十郎重長らであった。

第一は蔵入地の百姓の身売り、浪散(逃散)を厳重に規制すること、第二は給人の百姓過酷・虐待を監視する体制を敷いて田畑の荒廃を防ぐこと、第三は海岸線が長い領内における自領舟(刻印制度)・他領舟の管理による治安・貢租の徹底策を講じること(浜方支配を農村支配と同一水準に引き上げる)、第四は藩の用材伐出についての規定で「材木代官の不正防止・伐出人足の不利益解消」を指示して、農民、漁民、杣人の管理と保護を通じて民政の立て直しを図ろうとしている。

また、晦日には奉行石母田大膳宗頼に書付を以って、借金対応の指示を与えている。今回の石壁普請を含めて八千両余りの借金があり、今後九年に一度の普請割当て(西国大名は二年)を前提とし、返済と収支計画を策定・実施するよう指示している。

相続した忠宗の施政に支障なきよう、奉行の重要課題として指示した親心とも思われるが、政宗の派手な交際外交の裏で、京都・江戸の商人から借金しなければならない状態は、既に政宗の時代から発生していたことが分かる。

十二月、政宗は参勤で江戸へ到着、嗣君忠宗は仙台への途についた。

寛永七年(1630)

四月六日は將軍家光公の御成り(白河宰相丹羽長重、柳川侍従立花宗茂が御相伴)、十一日は大御所秀忠公の御成り(御相伴は前の二人に加え、藤堂高虎、毛利秀元)と続いた。

秀忠公の能の席では、政宗孫の虎千代が船弁慶を舞ったと記している。

八月、秀忠公の前で元気だった虎千代は六月に病気になり江戸で急逝した。齢七才、仙台北山の東昌寺に葬り、東昌寺の側に寺を建て正眼院と号した。仙台城にいた忠宗は、虎千代の遺骸を迎えて手厚く葬った。

虎千代は、忠宗の正室徳川氏振姫の生んだ長男で、政宗の嫡孫、仙台藩三代の当主たるべき人であった。

「治家記録」に「嗣君より杉浦某へ殉死につき御書下さる」とあり、軽輩杉浦某が殉死した心情に触れることができる。葬礼当日の朝に寺の庭上で殉死したのである。

杉浦某は虎千代の歩行士であったが「御幼稚なれば定めて一人も御供する者なからん、既に七才に成りたまうに(途中略)、我は外様卑列の者なりと云えども申し請うて必ず御供すべし」と云って殉死を願い出て許しを得たのである。

父忠宗はその心意気に感激した。その後、子孫に二百石を賜ったという。

母振姫は家康の外孫、形式的には秀忠の養女として忠宗に興入れしており、虎千代は將軍家と伊達氏を血縁で繋ぐ大切な存在であったのだ。

北山東昌寺の宝物庫恵日堂に、虎千代丸の木像と肖像画が陳列されている。

肖像画は岩佐又兵衛の筆になるといわれているが、父忠宗が愛惜の念やみがたく描かせたものという。

寛永八年(1631)

正月、仙台城にて御祝儀。御座間に伊達一門のあとに茂庭石見綱元入道了庵の名があり、大広間一番座伊達安芸成実(一門)ほか、・・・と、席次の記述がある。

家格一族の茂庭家にとって、石見綱元了庵は未だに特別待遇であることが分かる。

大御所秀忠は春から御不例(病気)であった。

八月になり書状にてご注進あり、政宗は奉行の石母田宗頼を名代として差し向け、南光坊天海に銀子百枚を進じて祈祷を依頼し、御札守護を献上した。

政宗は参勤を少し早め上府の用意をして喜連川で逗留したが、土井利勝から帰国を薦められたので、一旦は帰国した。

九月、更に奉行片倉重長を名代として登らせたが、十月になって嗣君忠宗より快方に向かっている由の書状が到来した。

参勤のために十一月、若林屋敷を発駕した政宗は、二十二日江戸に到着後、登城して本復した大御所秀忠に御目見えした。

寛永九年(1632)

正月二十四日、大御所徳川秀忠公が五十四才で薨去した。

政宗にとって、神君家康公に続いて、(表面上は)ここまで信頼を勝ち取り安堵を得てきた息子ほど年が離れた大御所秀忠公を失ったことは、伊達家の行く末を考えると、如何ばかりの感慨であったろうか。

前年秋に病気の大御所を案じて参勤を早めて喜連川で逗留した政宗の狼狽ぶりからも窺われる。

寛永十年(1633)

四月、政宗は参勤から帰国早々に、宮城郡下愛子栗生の下庵綱元宅を訪れた。

下庵綱元は八十五才になっていた。

政宗公自身も六十七才の身で、饗膳を囲みながら、「入道は益々元気な様子で何よりじゃ。わしも、このところ身体を気に掛けるようになってきた。今日は入道と、ゆるりと酒を酌み交わしたくて、こうして参った」といって下庵宅での夕餉を楽しんだのであろう。

この年、政宗は、秋保温泉、柴田郡砂金、白石城に遊びつつ、寛永五年に完成した隠居所若林城(仙台市若林区)で生活することが多く、饗応の席に外出した記事は四月帰国以来二十件弱に上っている。

政宗は仙台城には公的な儀式で赴く以外は若林城を日常の居所とした。

後年、政宗の死に伴い城は廃され、その建物は仙台城二の丸などに移築された。庭園跡には政宗が朝鮮より持ち帰ったとされる「臥竜梅」が現存する。

寛永十一年(1634)

正月元日、仙台城に於いて御祝儀あり、茂庭石見綱元は御座間にて伊達一門とともに政宗公に御目見えする栄誉に浴した。

三月、大樹家光公、江戸藩邸の政宗邸にお成りになる沙汰があった。

その頃、江戸詰め奉行の茂庭周防良元が重病で病床にあったのを大樹の上聞に達し、「彼の病疾が平癒しないうちは訪問を延引する」旨の台命があった。

周防良元はこれを承り「其の君恩の重さを感じ奉り、起居において未だ全快せざる

中、病床より出仕」したという。

寛永十二年(1635)

了庵綱元は、七十二才で摂津守宗綱の弔いを終えて高野山から帰国後、十五年前から下愛子に隠居屋敷を拝領しひっそり暮らしていた。
この頃は下愛子栗生の隠居所と領地の栗原郡二迫文字村(栗原市文字)を行き来していた。八十七才にして駕籠での往来は苦行であったろうか。
帰国した政宗公が下愛子栗生に了庵綱元をたまに訪れてはお声を掛けていただき、酒を酌み交わし、たまにお泊りされるのを了庵綱元は無上の喜びとしていた。

了庵綱元は、政宗公の命により愛子村(仙台市茂庭愛子)蕃山に諏訪明神を造営して鰐口^{つばぐち}を奉納した。

西風蕃山は別名蛇台蕃山とも呼ばれ、雨乞いの山で、干魃のとき、上愛子の諏訪神社から藁の蛇を担いで登り、雨乞いをしたという。

諏訪明神は狩猟神であり、同時に雨乞いの神でもあった。

鰐口とは、神社神殿の正面軒先に吊り下げられた仏具で金属製梵音具の一種。金の緒と呼ばれる布施があり、これで鼓面を打ち誓願成就を祈念したのである。

○政宗公の健康不安

寛永十三年(1636)

三月、政宗は、入道了庵綱元の嫡子で奉行茂庭周防良元宅での饗膳を囲んだり、宮城郡での鷹狩り、重臣宅での茶席、饗膳に出かけることが多かった。
が、それとなく身体の不調を自覚し始めていたのではないと思われる。

実は、仙台市博物館蔵の『木村宇右衛門覚書』には、政宗の近くに仕えた小姓・木村宇右衛門可親が記録した政宗の言行録に、この年正月の時点で「御気色しかといたさず」と記録されている。

側近は気晴らしにと、政宗が好きな鹿狩に十五浜(牡鹿半島)に誘い出した。
しかも勢子(鹿を駆り立てる人夫)を五千人も集めた大規模なものであった。
ここで政宗は「今回を、ここで行う鹿狩りの最後だと思うから、私にかまわず、皆で鹿狩りを楽しめ。鹿を追い込む勢子たちも頑張ってくれ」と、声をかけたという。

昨年のに了庵綱元の隠居所での気の置けない酒宴とお泊り、狩猟神である諏訪明神の造営に答えるなど、綱元はやはり体調不良を自覚していたのであろう。

四月になり、政宗は北山の覚範寺第四世清岳宗拙和尚を開山として迎え、造営中だった母・保春院の方丈(少林山・保春院、臨済宗妙心寺派)が完成したので出向き、清岳和尚の中食の馳走を受けた。

昼過ぎにホトギスの初音を聴くために仙台北部の北山に赴き、西山に沿って経ヶ峯に到り、城東の経ヶ峯に墓所を自ら見立てて、奉行奥山大学にその旨を指示した。

政宗公は、翌十九日は了庵綱元宅で、保春院方丈完成のお祝いの饗膳に着いたが、了庵綱元は「政宗公はこの節、お顔色衰えさせられ御膳も進みたまわず」と記している。

これ以前から政宗は、よく腹痛を起こしていたが、泰平の時代の饗応、茶事、狩猟と休む間もない接待、遊興の連続で、不摂生な生活が身体を蝕んでいたのだろう。食事がむせて咽喉を通らなくなることがあり、おそらく、胃がんとか食道がんのような難病だったと思われる。

死期を悟った政宗は、大名としての死の作法を全うするため、時期を早めて四月二十日、氣力が残っている間に参府することに決した。

この日、若林城を出て白石城に宿泊した政宗であったが、城主片倉小十郎重長が御膳を用意したが疲労困憊のため到着とともに寢所に入ったという。

翌日、白石城で、六十余年にわたる重臣片倉家との別れを惜しみ、途中二十五日には日光に参拝し、二十八日に何とか江戸屋敷に入った。

日光では、将軍家光の上意で、政宗の到着を待っていた日光廟造営の総奉行伊丹播磨守康勝が案内したという。

奥の院に案内したとき、疲れ切った政宗は上へあと一段というところで前へ倒れ、脇より起こして差し上げられ堂前に至り、「心閑かに拝見致し、……只今倒れたところにて倒れたのは日光へはこの度ばかりとのお告げと見えたりと仰せられ落涙したまう」と「治家記録」は記している。

氣力を振り絞って済ませた最後の参拝を、大神君に報告するとともに伊達のお家安泰を願ったのであろうか。

五月朔日、政宗は登城し将軍家光公に御目見えした。

以下は、「治家記録」に詳細が記されているが、幕府の対応と嗣君忠宗の対応を知る為に、概要をできるだけ再現して紹介する。

御前近く召し寄せられ、政宗の容色の衰えに驚いた将軍家光公からは「幕医半井驢庵の薬を服用すべし」との上意があった。

半井驢庵は将軍家光公の主治医であり、驢庵が政宗の邸宅に出向いて診察すること頻りであった。

政宗は屋敷に帰ってからは、寝床に伏せたり、たまに調子の良いときは起き上がったりの生活であったが、次第に衰弱が激しくなった。

十日、在国中の忠宗は、病気伺いのための藩士の上府を禁止した。

上府した藩士が江戸の所々に宿泊が目立つようになるにつれ、柳生但馬守より藩邸に注意があり、利根川に人止めを置いて押し返したが、忍んで登るものも多かった。

十三日には酒井忠勝・柳生宗矩が上使として、「半井驢庵に治療を命じてあるが、更に江戸中の医師を集めて相談させ、京都からも医師を下向させる旨上意である」と通知したという。

十六日は今大路道三(曲直瀬三世)調製の薬を服用して少し楽になったが、この頃は毎日二度ずつ見舞いの上使があり、上使来邸の時は上下を着て対面していたが、重態となってからは、二三人で介助して衣装・袴を整えて上使や見舞いの衆に対応した。その疲労は甚だしいものであったが、政宗公は「懇ろの上意は誠に以って有難く、若き上様の御用に立てずして果てるのは口惜しい」と感涙したという。

十八日には公方より、江戸中の寺社へ政宗の病氣本復の祈祷を仰せつけられた。小姓加藤十三郎安次が殉死を願い出て、政宗から許しの書状を与えられた。

二十一日、将軍が東海寺に御成りの時、内密に政宗を見舞うとの内意が伝えられた。政宗は早朝に行水を使い月代を整え、正午に再び行水して髪を結わせる気遣い振りであった。

午後一時頃に将軍御成り、御座の間に入り二重畳に着座すると、政宗は、土井利勝、柳生宗矩、酒井忠勝に、左右・背中を介助され、何とかお見舞いをお受けした。

家光公は座を立てて政宗の側に寄り、懇ろに病氣を見舞い、「家老の者どもを召せ、小十郎は無きか」と仰せになられ、奉行の石母田宗頼、中島監物、片倉小十郎重長及び佐々若狭元綱が御前に罷り出ると、「何れも気を詰めゆめゆめ油断なくお仕え致せ」との上意があった。

次いで焼火の間において嗣君忠宗を召し、「陸奥守は聞き及ぶよりも重態のようであり、治療の術もなく本復し難き様子。近日落命したとしても忠宗の事は少しも疎意に思っておらず、心安らかにすべし。忠宗の跡目相続のことは相違ない。政宗は二十四日(秀忠公命日は一月二十四日)を侍ると見えたり」と仰せになって座を立たれ、やがて江戸城に帰還した。

但馬守宗矩が御座の間に戻り、焼火の間における家光公の仰せを「古今稀なる御仕合せ、此の御仕合せにては追っ付け御本復疑いなし」と政宗に話したところ、政宗は手を合わせて感激し、忠宗に懇ろの上意があったことを聞き、「忠宗への御諚(お言葉)、ひとしお有り難く、この家を受け継ぐ者は一命を軽んじ奉公せずして此の御恩報い難し」と仰せになった。

政宗が病を押して参府登城し御目見えしたことで、政宗は亡き大御所秀忠公の命日に身罷る覚悟であることを、家光公は見抜いていたのである。

こうして、忠宗への跡目相続と六十二万石安泰の言質を家光公から得ることによって、政宗の最期を覚悟した参府の目的は達せられた。

翌日、昨日御成りの御礼使として、石母田大膳宗頼らが老中に参上した。

十二 政宗公の薨去と綱元の隠棲

○政宗公の最期

五月二十四日未明、臨終の場に、政宗公は田村御前の入室を許さず、午前六時頃、嫡男忠宗公、医師らに看取られ、江戸屋敷に於いて薨去した。

田村御前との臨終の対面を許さなかったのは、武士は婦女子の看護を受けて死ぬものではないという武人としての覚悟を示したものであるという。

前日の政宗公の様子は、「治家記録」によれば「夜に入り心静かに沐浴し、明衣(沐浴後に着る白布の浄衣)を着し髪を結って、安楽にしかも従容と臨終の作法を行い、脇差を床の上に置き、死後みだりに人を入れるなかれと遺言し、西方に向い合掌して寝に着いた」とされる。

辞世の句は、
「曇なき心の月をさきだてて 浮世のやみを はれてこそゆけ」とされる。

遺骸は束帯姿で木棺に納められ、防腐処置のため水銀、石灰、塩を詰めた上で駕籠に載せられ、生前そのままの大名行列を仕立て、その日の内に江戸を発し、六月三日、仙台へ戻った。

将軍家光は政宗の遺骸が江戸を発した日に、仙台藩邸に使者を遣わし、上意として殉死を禁じ跡取りの伊達忠宗によく仕えるように命じた。

奉行は殉死を断念したが、近習の石田与純、茂庭兼綱らは上使の老中酒井忠勝に、謝意を述べながらも強く殉死を願ったため、ついに殉死が許可されることになった。

葬儀に先立ち、石田将監与純、茂庭采女兼綱、佐藤内膳吉信以下家臣十五名、陪臣五名が殉死した。

石田将監与純の辞世の句は、
「曇りなき月のあととふ山のはの道も涼しき松風の音」として残されている。

六月四日、経ヶ峯に搬送されて埋葬され、二十三日に清岳和尚導師のもとに葬儀が営まれた。法名は「瑞巖寺殿貞山禅利大居士」で、貞山公と呼称される。

死因は癌性腹膜炎あるいは食道癌(食道噴門癌)と推定されている。

将軍家は、江戸で七日、京都では三日、人々に服喪するよう命令を発した。これは御三家以外の服喪では異例のことであった。

二十六日には、土井大炊守、酒井讃岐守を上使として、嗣君伊達忠宗への遺領相続が伝達された。

○了庵綱元の隠棲

六月末、了庵綱元は、政宗公が薨去すると一切の政務を離れ、下愛子栗生(仙台市青葉区栗生)の隠居所を政宗公長女の五郎八姫に譲って、隠居領のある栗原郡二迫文字に退いて隠棲した。

このとき、家臣の遊佐道海、斉藤孫左、土屋孫右衛門の三人が従った。

綱元は二迫文字の隠居所から、嫡男の奉行茂庭周防良元へ書状を以って、貞山公の御命日、御位牌の儀に遺漏のないよう命じた。

書状に金剛寺とあるのは、二迫文字村の南方、同郡鶯沢村にあり、室町時代中期に現栗原市鶯沢北郷に建立された鶯沢山金剛寺で、「五輪塔」が残る古刹である。

—— 一書申入候然者於爰元二七日之御茶等金剛寺東当申入候、明後三七日も同申入候御茶等をも上可申候左様に候へば、三十五日御茶等上申ために誰そ頼入、御位牌板江成共為書申二十五日に、五郎介に為持指越可給候、而家をたて御位牌をも立可申候。其間之事に而候恐々謹言

六月十三日

了庵綱元 御書判

茂庭周防殿

七月、忠宗公は、兄の遠江守秀宗(宇和島藩主)、弟の駿河守宗泰(一門岩出山)、宗時(秀宗世子)らとお揃いで大樹家光公に拝礼し、遺領相続の御礼をなした。

左文字の佩刀、驊の毛馬、時服五十着、白銀五百枚を献じて貢物とした。

この外に、秀宗、宗泰、宗時及び伊達安房成実(一門亙理)、伊達安芸宗重(一門涌谷)らはそれぞれ馬一匹を献上した。

このときには、伊達の老臣十八人も拝謁奉り、政宗の遺物「備前三郎国宗」の佩刀を献上奉った。

栗原郡二迫文字の隠居所に落ち着いた綱元の家老格というべき遊佐道海は、もと二本松城主畠山氏の家老の家に生まれたとされ、故あって畠山家を出奔、流浪した後、奥州戦国の大崎・葛西両氏の抗争時代に、葛西家臣で岩ヶ崎城富沢氏の客将となり、五代・富沢日向守直景(貞連)の軍師として功をたて、富沢氏の勢力を大いに振るわせたと伝えられているが、詳細は不明である。

富沢日向守直景(貞連)は、天正十九年の豊臣秀吉による奥州平定のあと、富沢幽斎と名を変えて、慶長六年頃に伊達政宗に召し抱えられた(「治家記録」、岩手県史「系胤譜考」)とあるが、よく分らない。

同書によれば、遊佐道海(采女)は慶長年中、茂庭綱元の家臣になったといわれている。道海の旧主富沢日向守直景が政宗と昵懇の間柄だったので、富沢日向が道海と茂庭綱元との橋渡しをしたのではなかろうか。

○二代藩主忠宗公の治政

寛永十三年八月、忠宗公三八才は二代藩主として仙台に初入部した。一門・一家・一族は名取郡中田河原、総士は柴田郡槻木に出でてお迎えした。帰国御礼の使者として古内伊賀義重を江戸に遣わした。

忠宗公は早速、藩政の執行体制を決定した。まず、奉行に毎月寄合日を定めた。二日、八日、十四日、二十日、二十六日である。次に、綱元が慶長八年に進言した「奉行六人制」に、「月番制」を採り入れた。中島監物意成・古内主膳重広を老臣に登用し、他藩の家老にあたる奉行職六人のうち石母田大膳亮宗頼・茂庭周防良元・奥山大学常良の三人は留任させ、津田近江頼康(景康の子)を新たに加えて六奉行とし、国務を委ねた。さらに月番制といって、二人が江戸詰め、四人が仙台詰め(うち二人は非番として自分の在郷領地で執務・休養)とし、輪番で廻す形にした。

さらに、これまで単任制で奉行を指導・監督する立場にあった評定役を複数人制に改めて奉行の補助機関へと役職内容を変更し、津田景康・遠藤玄信・片倉重長・古内義重・鴫田周如の五名を任命した。

評定役は後には裁判を行う評定所の責任者の役職名となる。このほか、監察を担当する目付役七名を任命し、翌年には家中における私成敗を禁止するなどの条項を含む法度を制定して藩内の統制を強化した。

藩主の跡目相続が完全に叶い、執行体制が整備され、国中の安堵これに勝るものがなかったという。

寛永十四年(1637)

五月二十二日、松島瑞巖寺に於いて貞山公一周忌御法事あり。名代は伊達安芸成実が務めた。

これより前、名代として中島監物意成を紀州高野山へ派遣し、貞山公の石塔を安置し、一周忌中三昧の御法事を終えた。和歌山県高野山奥の院二十三町石の北東に、伊達政宗供養塔は現存する。

なお、伊達家供養塔は、同奥の院十八町石西にある。三つの鳥居があり、一番左が二代藩主伊達忠宗、中央が三代藩主伊達綱宗、右側が宇和島初代藩主伊達秀宗である。

六月中旬から領内では梅雨の大雨が続き、ついに広瀬川が洪水に見舞われ、田畑、百姓家、牛馬に至るまでが流された。

この旨を幕府に報告し、明年、飢饉救済のために十万両の黄金を賜わり、これを二百五十一駄馬に背負わせ、二十貫目を一駄として領地に運んだ。

十月、貞山公の遺命を受けた忠宗公は、奥山大学常良を奉行にして昨年秋より経ヶ峯に伊達家の御霊屋を造営していたが、二十四日落成した。
御廟を瑞鳳殿、寺を正宗山瑞鳳寺と号し、群臣参詣して供養が行われた。
保春院清岳和尚が行導を勤め、後に瑞鳳寺住持に任ぜられ開山の祖となった。
殉死した十五名の家臣と、五名の陪臣の墓は瑞鳳殿の敷地内に建っている。

瑞鳳殿は、桃山様式の遺風を伝える豪華絢爛な廟建築として昭和六年国宝に指定されたが、昭和二十年の戦災で惜しくも焼失した。
現在の建物は昭和五十四年に再建されたもので桃山様式を余すことなく伝えている。

寛永十五年(1638)

正月、仙台城にて慶賀の御祝儀あり。

十二日、台徳院(秀忠公)七回忌法事について、使者として奉行茂庭周防良元を江戸に派遣した。

四月、公儀より昨年の領内洪水対策費用に銀子五千貫目拝借の許可を得た。
参勤で先月末日に江戸に着いた忠宗は早速御礼に登城した。

公方から「特別の思し召し」と告げられた秀忠は、早速、国許の伊達安房成実(七十一才)に書状にて藩の一門、総家の御礼惣名代として上府するよう命じた。

亘理領主の伊達成実(七十一才)は、惣家臣を代表して御礼言上に罷り出で、公方に拝謁し時服十・羽織二を下賜された。

御礼饗応の席で、将軍家光公から奥州での軍談を所望された成実は、五十三年前の人取橋の戦いのことを語り、武士の誉れと称賛されたという。

この拝借した金子の貸与であるが、侍・町人・農民を問わず広く貸出し、年内は無利子・年を越せば三割の利息付、返済は米に限らず何でもよいと定めた。
単純明快な返済ルールであり、トラブルもなく大いに当座の役に立ったというが、洪水対策の侍・町人・農民への貸し出しであって、僅か年内の無利子では相当な無理な事態が出来たのではなかろうか。

五月、忠宗公は幕府大老の許しを得て仙台城二の丸造営に着工した。
居城は平時の政庁としては青葉山の頂上では場所が不便であり、城山下の屋敷、即ち二の丸の政庁の設営は、内政に集中しようとしていた忠宗にとって是非必要な施設であった。

石母田大膳、古内主膳らの国奉行には、地形絵図、屋敷絵図と坪割など、細かに書き付けて、幕府への説明・協議に臨むよう申し付けている。

城の重要施設の増築に当たり、改易などの厄災に吞まれぬよう、幕府との関係に慎重を期して事を運んだ様子が窺われる。

寛永十六年(1639)

忠宗四十一才の年頭祝儀は江戸屋敷にて執り行われた。

四月、忠宗と嗣君亀千代が登城し、将軍家光の御前において元服、一字を賜い名を光宗とし、越前守に任ぜられた。十三才であった。忠宗は陸奥守に転任した。

十二月、仙台城二の丸が落成した。

昨年五月二十五日より今日まで、御蔵・大手御門・大書院・大広間・舞台・御歩行間の上棟あり、この日を以って落成なった。

その後は文化元年(1804)落雷により焼失し同六年に復興したが、明治に至るまで藩政の中心であった。

二の丸の正門である大手門を入りその奥の詰門を抜けると、藩主が住む屋敷、能舞台などがあつた。二の丸の規模は東西三百十米、南北二百米であつた。

十三 了庵綱元の晩年

○隠棲地文字での弔いの日々

政宗公薨去の一年後、寛永十四年、了庵綱元は栗原郡二迫文字村に於いて寺を創建した。山号普門山、洞泉院と称した。

同郡鶯沢村鶯沢山金剛寺の綾南統異和尚を開山の祖として招聘して住持とした。

造作を終え次第、貞山公の御位牌が安置されたが、綱元没後の寛文年間に、茂庭家菩提寺の松山村(大崎市松山町)竜門山石雲寺へ移されている。

寛永十五年九月、了庵綱元は貞山公菩提のため、文字村に阿弥陀堂を建立した。瓦葺き三間四方のお堂で、立像二尺八寸の阿弥陀二尊を安置した。

此の地は洞泉院の寺領内であつたが、阿弥陀堂の別当は山伏の縁覚に命じた。

此の時より毎年五月二十四日(祥月命日)には、阿弥陀堂の前に於いて神楽を奏すべきことを命じ、阿弥陀堂へ石燈籠二基を献納した。

神楽は現代の子供たちに受け継がれ伝統保存されている。

寛永十六年、了庵綱元は、初代岩ヶ崎城主摂津守宗綱菩提のため、妙覚堂を建立した。

洞泉院本堂より六十間の回廊にて阿弥陀堂(政宗公)と妙覚堂(宗綱公)とをつなぎ、日参しては読経に明け暮れる毎日を送ったという。両堂とも今は面影も残っていない。

○茂庭了庵綱元大往生

寛永十七年(1640)

五月二十四日、貞山公の祥月命日(四周忌)であるこの日、茂庭了庵綱元は文字の隠居所に於いて病没した。

この日の「治家記録」には、
「貞山公御木像を瑞鳳殿に安置せらる」と、政宗公の祥月命日に開眼供養を執行した記事のあとに、
「同日、茂庭石見綱元入道了庵、在所栗原郡門地(文字)邑に於いて死去、九十二歳。貞山公の時、甚だ値遇(知遇)あり」と特記されている。

貞山公の没後四年後のことで、政宗の誕生から薨去までを見届けた唯一の重臣、茂庭石見綱元入道了庵、九十二才の大往生であった。
法名は「了庵々主前石洲籌外全勝大居士」。

墓所は阿弥陀堂の側にあり、自然石を以って大仏を刻したものであった。
高さ九尺五寸の座像で、洞泉院の「綱元仏像」と称せられ、現在も残っている。
小高い丘にある荒砥石作りの座禅像(膝廻りが一丈五寸)がその墓である。
了庵は臨終に際し固く殉死を戒めたが、家臣の土屋孫右衛門は一年後の一周忌の法事の日殉死し、その十日後には斉藤孫左も殉死した。

『綱元君記』の記録の中に、「土屋孫右ヱ門、妻子は奥方へ御機嫌伺いに出し後にて切腹す」と記されている。老いた綱元をお世話した家臣には妻子がいた、つまり男所帯ではなく女手があったことになる。
また、奥方と称する人が居た事が分かるが、しかしこの奥方とは誰の妻であるか、明確ではない。綱元の分家で当時の文字に領地があり住んでいた茂庭正次郎実元(綱元三男)は、この年五十二才で無嗣であった。
このことから、この奥方とは茂庭実元の妻、つまり綱元の息子の嫁女であったと筆者は推察している。土屋は自分の妻子を奥方の元へご機嫌伺いに送り出し、留守にした上で自害したというのであるから、妻子が伺った先は主君綱元に身近な実元家であると推察するのは自然な流れではなかろうか。

余聞であるが、文字に於ける茂庭家の記録として脱線することをお許し願う。
洞泉院の近くの丘に高さ五尺余もある大きな自然石の墓碑が建っている。
碑の表面には法名が「真如院定巖禅慈大姉」と刻まれ、側には立派な石燈籠が六基ほど今も現存している。

一方、洞泉院に保存されている古文書『茂庭了庵様御記録』の中に「真如院定巖禅慈大姉」の位牌の記録とともに、綱元の位牌と同格の位牌が現存するという。
このことから、茂庭家の中でも相当地位の高い方であった事が想像され、了庵綱元の奥方が正次郎実元の奥方かと考えてしまうのだが、筆者には分からない。

遊佐道海は十年一日の如く勤行し、慶安四年(1651)の了庵綱元の命日に没した。
土屋孫右衛門と、最後まで綱元に仕えた遊佐道海の墓は綱元墓の側にある。

茂庭了庵綱元の隠居所での生涯を『綱元君記』により回想してみる。

領地三迫岩ヶ崎での主君宗綱公が十六才という若さで病死すると、宗綱公の菩提を弔うため高野山に登り、成就院を再興し入道して名を了庵と改め、宗綱公の三回忌法要を済ませて仙台に帰った。

政宗公が江戸屋敷に於いて薨去されてから、茂庭了庵綱元は直ちに仙台の隠居所(愛子村栗生)から、隠居領地である二迫文字へ隠棲した。

普門山洞泉院を開基して、阿弥陀堂と妙覚堂とを建立し、貞山公と宗綱公のために綱元自身の終焉まで四ヶ年間に涉って菩提を弔った。

寛永十七年五月二十四日、貞山公の祥月命日に文字の地に於いて逝去した。

奇しくも、貞山公、了庵綱元、綱元家臣の土屋と遊佐の命日は同じ日となった。綱元家臣の土屋孫右衛門と斎藤孫左は意志を以って自裁したが、貞山公に遅れること四年後の病死(老衰か)という綱元、さらに、十一年後の自然死(老衰か)という綱元家臣遊佐道海の死は、偶然であったのか。

筆者には、戦国武士の見えざる強い意志による所謂「自律死」とでも表現すべき武家精神・武家作法が存在していたように思われる。

なお、了庵綱元の隠居領は三男・正次郎実元(着坐・文字茂庭家)が相続した。岩ヶ崎、文字と茂庭了庵綱元との縁は深く、当時、綱元が岩ヶ崎城と仙台城や領地文字とを往復した道筋の町民が思慕して付けた岩ヶ崎茂庭町は現在も町名として残り、文字の洞泉院は今も曹洞宗の古刹として現存している。

十四 その後の茂庭綱元周辺の情報

○綱元三男実元家(文字茂庭氏)

寛永十八年(1641)

綱元三男正次郎実元(五十三才)には子がなかったので、忠宗公の命によって兄の茂庭良元の二男茂行(茂庭大蔵茂行)二十六才を養嗣子とした。忠宗公からは知行百貫文を与えられた。

実は、茂行の兄・長元(周防良元の長男)が三十八才で鉄砲暴発により盲目となって家督から除かれたので、二男茂行が家督に立てられるべきところ病身で手も不自由であるから家督にかなわないとして、三男の大隅定元がすでに片倉小十郎重長の家嗣となっていたのを良元家(松山茂庭本家)に戻し家督相続としたのである。

然るに茂行は「病身といえども証人として江戸詰を立派に勤めた。兄を差し置いて弟を以って家督にするのは甚だ不審千万なり」と主張して父子互に不和となった。

忠宗公がこの事を聞き込み、もつとも事だとは思ったが、奉行を勤めている良元の家督には成し難く、ちょうど叔父の正次郎実元に子がないので実元の家督に立てるように忠宗公から知行百貫文を与えられたのであった。

その上、兄の良元からも百貫文を分知され、正次郎実元の本知と合せて都合三百貫文の知行とするから堪忍するように忠宗公から仰せられたのである。
この三百貫文の加増は栗原郡文字を中心とした領地であり、茂庭大蔵茂行は二迫文字に住んだ(文字茂庭氏)。

○綱元僚友成実の死

正保三年(1646)

六月四日、一門の伊達安房成実(亶理領主)が七十九才にて逝去した。
七日に仙台からの飛脚を以って江戸藩邸に注進があった。
四日午前八時、亶理の館にて病死の由、仙台城經由江戸藩邸まで三日の早飛脚便であった。

天正十三年の人取橋の戦い以来、藩祖政宗の片腕として抜群の武勲を立て、また『成実記』を著して政宗一代の武功治政を後世に伝えた、政宗の三傑のひとりで「武の成実」と称せられた漢であった。

法名は「大雄寺殿久山天昌大居士」。

辞世の句は「古来より稀なる年にこのつ(九つ)のあまるも夢の中にぞありける」。

墓所は大雄寺(亶理郡亶理町)にある伊達成実霊屋に現存し、成実の武装した木像が安置されている。

県内に現存する霊屋としては、松島円通院霊屋(正保四年)と、この成実霊屋が最古のものであるという。

脱線するが、前者の円通院は仙台藩主二代忠宗の嫡男光宗の霊廟である。
光宗は文武両道に優れていたが、正保二年(1645)に十九才の若さで江戸で亡くなり、その死を悼んだ忠宗公により円通院が同年に開創され、霊屋(三慧殿)は正保四年に完成した。

成実には実子はなく、養嗣子宗実君(政宗九男)が相続した。
明治維新後、家臣と共に北海道胆振国有珠郡に移住し、現在の伊達市の礎を築いた伊達邦成は、亶理伊達氏第十四代当主である。

明治十二年(1879)には、遺徳を慕う亶理郡民の呼びかけにより、亶理要害本丸跡に建てられた亶理神社に武早智雄命として祀られ、成実は今もなお亶理において深く敬愛されている。

○二代藩主忠宗公の卒去

万治元年(1658)

七月十二日の暁、二代藩主忠宗公が享年六十才にて仙台城で卒去された。
仙台藩の地位と基盤固めに大いに功績を残したため「守成の名君」といわれた。

この六月には、実兄で宇和島藩主伊達秀宗公が江戸にて卒去しており、その後を追うように亡くなられたのであった。

同日、遺骸を瑞鳳寺に葬り、弔いは東昌寺(仙台市青葉区北山)にて行なわれた。法名「大慈院殿義山崇仁大居士」、墓所は瑞鳳寺内「感仙殿」。

古内主膳重広、遠藤九郎兵衛直元、笹原鹿之助吉定ら都合十六人が殉死した。葬送の儀は八月七日、茂庭周防定元(綱元の孫)・富塚内蔵重信・山口内記重如を葬礼奉行とし、雲居禅師を導師として行なわれた。

忠宗公の嫡男・光宗が先に早世していたため、家督は六男の綱宗十九才が相続した。九月三日、綱宗は登城した。彦根中将直孝、会津中将正之、厩橋少将忠清らにより公方の命を奉じて、「忠宗の遺蹟領知相替らず安堵する旨」仰せ渡された。

三男の宗良は母・愛姫の遺言で田村氏を再興し、第四代藩主綱村の代に岩沼に転封され、内分分家大名として寛文二年初代岩沼藩主となった。三代藩主綱宗公と兄田村宗良は後の伊達騒動「寛文事件」で知られる。

十五 その後の茂庭家

○茂庭綱元の本家は、良元、定元、姓元、・・・と続き、奉行職を輩出した家柄で、仙台藩伊達家の家格「一族」、一万三千石、綱元嫡男・良元の代に松山領を所拝領して十二代茂庭敬元の明治維新まで続いた。子孫の十五代当主は健在である(宮城県姓氏家系辞典)。

○綱元三男の正次郎実元に始まる家格「着座」の文字茂庭氏を継いだ茂庭大蔵茂行は、その後、万治元年(1658)六月、宇和島藩主伊達秀宗公(忠宗公の兄)が江戸にて逝去した際には、弔慰のため、忠宗公の使者として伊予宇和島に遣わされた。茂庭本家の相続では忠宗公を煩わせた茂行であるが、信頼は厚かったと見える。

忠宗公は仙台城にあったが老年のことなので、茂庭大蔵茂行四十二才を遣わしたのだという。その忠宗公も間もなく七月、仙台城で逝去している。

この茂庭大蔵茂行は、番頭を務めていた頃、四代藩主亀千代君(綱村公)後見人である伊達兵部宗勝(政宗十男)の専横による恐怖政治の中で、「番頭召放逼塞知行替」として逼塞させられている。谷原係争での彼の判断を捻じ曲げて解釈され責任を追及されたのであった。

○文字茂庭氏は、延宝三年(1675)には二代大蔵茂行の子の三代大隈が継ぎ、のち大蔵恒真(常実)と改め、延宝九年(1681)、祖父実元及び外曾祖父綱元に縁の深い栗原郡三迫岩ヶ崎村に三千石の所拝領を賜り、六代めの領主となった。

貞享二年(1685)、一門の涌谷伊達氏・伊達安芸宗重(寛文事件で落命)の孫・村元が藩主綱村公の二女類姫を正室に迎える婚儀の記事に、「貝桶添、茂庭大蔵恒真」の名がある(亙理家譜)。

当時四十五才前後で、綱村公家臣にして岩ヶ崎邑主であった茂庭大蔵恒真が、藩主家婚礼に当たり、大名の婚礼行列では先頭を飾り家老や重臣が勤めるとされる、貝桶添いの役を勤めているので、藩主の信頼が厚かったと思われる。

元禄七年(1694)、恒真は、岩ヶ崎領で他藩からの御預かり人が逃亡した責により改易となり、伊達上野(伊達一門、水沢)にお預けとなり、その地で病死した。

養嗣子の万五郎元実も佐々主計にお預けとなったがのち赦免されている。

こうして、綱元三男の茂庭正次郎実元に始まる家格「着座」の文字茂庭氏は、綱元孫の大蔵茂行、曾孫の大蔵恒真と続いたが、運命というか、綱元とは違って表舞台には出ずに、最後には改易となってしまった。

○綱元五男の常元は大番組五百石の軽部氏を継いだ(養嗣子)が、常元の孫(次郎三郎)の頃には岩ヶ崎領で領主茂庭恒真の許で勤めていた。

曾孫の軽部六右衛門は、三迫川から分岐・開削した十軒に及ぶ金成までの農業用水路(軽部堰)を築き、大崎耕土の米作増産に寄与した。

茂庭綱元の頃の企画といわれるが、天和四年(1684)の完成とされる(宮城県土木部年表)。現在、三迫川取水口近くに軽部六右衛門広場が記念公園として整備され、記念碑、顕彰碑が移設されている。

現在の軽部堰は都市計画により岩ヶ崎町内では暗渠化されて昔の清流の面影は一部区間でしか見られないが、金成耕土に入ると、側面はコンクリート補強とフェンスによって囲まれた水路が、今もその機能を果たしている。

あとがき

茂庭綱元の周りを彩った人物を列挙すれば、主君伊達政宗を筆頭に、異母姉の片倉喜多、喜多の異父弟・片倉小十郎、三傑のもうひとり伊達成実、外交担当の家老時代に知遇を得た豊臣秀吉、豊臣祐筆の和久宗是・是安父子、徳川家康、秀吉から賜ったお種(香の前)、彼女が生んだ子で綱元の実子として育てた政宗の落胤・津多、後に津多女が原田甲斐宗資に嫁ぎ産んだ寛文事件の当事者・原田甲斐宗輔、等々がいます。

これらの多彩な人々と織りなす人間模様の中で生きた私人としての茂庭綱元、江戸初期の仙台藩家老として藩政の基礎固めに注力した公人茂庭綱元を、主君政宗公と同じ表舞台に引きだし、事跡に限らず登場人物の関係(茂庭一族とその縁戚)にも焦点を当てて書きました。

言い換えれば史伝とはいえ、藩主伊達政宗公とその子息、茂庭綱元とその一族に関する物語の体裁をとりました。

最期に、本文では触れることができなかったことで、筆者が拘って調べ、考察した話題を記して終わります。

○風流人としての茂庭綱元 (松山町史を参考)

茂庭綱元は、文武、政治に長じたが、詩歌も好んだとされる。

「宮城百人一首・仙台風藻」に次の三つの作品が収録されている。

- ・初花 サヘカヘリ 雪ハフレドモ 時ゾトテ 軒端ノ梅ハ 花咲キニケリ
- ・江戸霞 ウラ山ヤ カスム光ノ 長閑サニ イリ江ノミヅノ 波ノシヅケキ
- ・夏日遊城北天神社 (漢詩)
 残花映緑夏山天 数里相携開雅筵
 題句举杯興難尽 繫馬夕陽聞杜鵑

○時代とは言え、本人の意思が及ばない運命に関すること

- ・綱元は没後に改名されている。「延元」という。

その訳は、寛文九年(1669)亀千代君がわずか二才で四代藩主を相続し、元服して綱基(後、綱村)と称したことから、綱の文字を禁忌とし、以後、藩への正式の書状には「綱元」と書かず、「延元」と書いた。

綱元が没してから二十九年後のことであり、本人は生前には知りえぬ名であった。

- ・綱元の孫、茂庭大蔵茂行は、十二才から十余年も江戸証人として過ごした。長兄が廃嫡されたとき、二男ゆえに家督相続を主張したが、病身で手も不自由であるから奉行家の家督には向かないとして、父良元の跡を継げず藩主の裁定により叔父実元の養嗣子になったひとである。

宇和島藩主秀宗公の死去に当たり、藩主忠宗公の弔意の使者として役目を果し、番頭時代には谷地係争の処理を巡って伊達兵部の難癖によって逼塞させられるなど、家と藩とに逆らえず犠牲になった人生ともいえる。

○茂庭了庵綱元と岳父新田遠江景綱とをめぐり縁

仙台藩岩ヶ崎領の六代目領主は、綱元の三男実元の孫・茂庭恒真(綱元の外曾孫)が就き、他藩からの預かり人逃亡の責を負って改易されたことは本文で触れた。元禄六年に七代目領主として磐井郡東山から中村日向成義が転封してきた。

実はこの中村氏、清和源氏新田氏流を称し、新田氏を名乗ってきたが、元禄三年、将軍家に憚り、四代藩主綱村の命により伊達の本姓である中村に改姓したとされる。徳川家康が「自分は新田一門の徳川(得川の得を徳に換えた)である」と、清和源氏の末裔であると主張したことを受けての措置であった。

実は、中村日向成義は『仙台藩家臣録』によれば、茂庭綱元の岳父である新田遠江景綱の子孫であることが分かる。

新田惣三郎成義は、家臣録の元になった『御知行被下置御帳』で、「拙者先祖新田遠江儀 輝宗様御代米沢之内舘山之城に被差置、御奉公仕候由承及候。・・・中野常陸逆心之砌、遠江方より申上四郎義直に切腹被仰付候。其以後次男私高祖父左衛門義綱に家督被仰付候。・・・」と、藩に申告している。

中村氏の系図では、新田遠江景綱を初代として、義綱、義親、義延、義彰、成義と続き、成義の代に中村に改姓している。

成義の高祖父は四代前だから二代義綱であり、景綱は紛れもなく初代先祖に当る。奇しくも、綱元の外曾孫・茂庭恒真の後を次いで岩ヶ崎領の領主になった中村日向成義は、綱元の岳父・新田遠江景綱の五世孫である。

筆者は、世代をまたいだこの関係に不思議な縁を感じている。

○「自律死」？とは

筆者は茂庭綱元の死を「自律死」と表現したが、国語辞書には見当たらない。**“自らを厳しく律して成し遂げた計画的な後追い死(殉死)”**という意味合いで付けたのだが、どれだけ共感していただけるか。

政宗公の薨去(寛永十三年五月二十四日未明、江戸屋敷)と、茂庭了庵の死去(寛永十七年五月二十四日、文字の隠居所)の出典は、夫々、二次史料の「治家記録」、『茂庭家記録・綱元君記』なので、問題はないと思う。

茂庭了庵の家臣遊佐道海の死去は「最後まで綱元に尽くし、自身は慶安四年の同じ命日に死去」という三次史料に基づくので、信憑性は低いかもしれない。

「奇しくも、政宗公、了庵綱元、綱元家臣二名の命日は同じ日となった」と表現したのは、史実と異なるかもしれないが、政宗公と了庵綱元の祥月命日が同じであるのは確かであると思っている。

更に、政宗公の場合も、自身の死期が近いことを悟るとすぐに行動に移した行為も同様な自律死の範疇に入るものと筆者は考えている。武士の死生観とはこういうことだったのかと感じ入る。

即ち、公方へ最後の御目見えをすべく仙台を發ち江戸へ向かい、途中日光では氣力を振り絞って大神君家康公に別れを告げ、江戸城にて家光公に御目見えをした後二十四日の死に至るまで、病状が進行して意識混濁状態の日々に於ける自身の挙動を律した生活と、他者への労わりの言動を知るとき、自身の「死する日」を決めて、その日に向って(自身の毎日を)律した生き方は、やはり「自律死」といいいのではないだろうか。

○仙台藩の家臣団について

慶長十二年の藩財政の項で、よく調べもせずに「一万とも二万とも云われる家臣団」と表現したが、貴重な研究成果に出会えた。宮城教育大学堀田幸義教授の論文から抜粋して紹介する(平成二十九年、宮城教育大学紀要五十一巻)。

五代藩主吉村期の享保十三年(1728)に家格と役職序列とを統合し一列に並べた「御役列」が制定された。史料の中から家臣団を三つの階層ー平士以上・組士層・凡下御扶持人層(卒)ーに分け発表している。

	A:平士以上 (%)	B:組士層 (%)	C:卒 (%)	家臣総数 A+B+C	士 分 A+B	士分の 割合
寛文 10 年 (1670)	2,742 人 (30.1)	1,379 人 (15.1)	4,995 人 (54.8)	9,116 人	4,121 人	45.2%
寛政 10 年 (1798)	3,458 人 (34.3)	995 人 (9.9)	5,616 人 (54.9)	10, 069 人	4,453 人	44.2%
幕 末	3,549 人 (35.9)	860 人 (8.7)	5,469 人 (55.4)	9,878 人	4,409 人	44.6%

家臣団の規模は、十七世紀後半に九千人を超え、十八世紀後半には一万人に達し、十九世紀直前の寛政十年における惣家中の人数は一万六十九人となっている。その後、幕末まで九千人台後半で推移し、明治二年七月に藩が「弁事役所」に提出した「陸前国仙台藩籍調」の控えによると、「家中の惣人頭」は九千九百六十五人で、うち千九百九十三人に暇が出されたという。

寛政年間以降に成立した『伊達世臣家譜』から、寛政十年の階層構造を解析すると、門閥(一門以下召出格迄)は 190 家(1.9%)、平士は 3268 家(32.4%)、組士は 995 家(9.9%)、卒身分(凡下御扶持人)は 5616 家(55.8%)になる。

仙台藩では単純に言えば、家臣＝士分(武士身分)＋卒身分(足輕以下)、士分＝門閥(侍)＋平士(侍)＋組士(徒士)と定義されている。

家臣に占める武士身分の割合約45%は、他藩より低いという。また他藩が侍(平士以上)と徒士(組士)が1対1であるのに対し、仙台藩は侍(平士以上)が徒士(組士)の3～4倍と多いのが特徴であるという。

嘗ては平士＝大番組所属の武士という理解であったが、平士全員が大番士になる訳ではなく、「番外士」であっても家の由緒により「大番組以上の格式」を与えられたという。「大番組以上之列」の序列は、①大番組召出②御膳番③御小姓組④御祐筆⑤江戸番馬上⑥定御供⑦大番組⑧御次医師⑨茶道頭⑩厩頭であったという。

故に、家の由緒が高ければ⑧～⑩の者でも大番組に推挙され、番外士でも平士に格付けされた例があるということを、堀田教授は報告している。

■参考文献■

- ・「貞山公治家記録復刻版」第一～四巻、仙台藩史料大成、宝文堂
- ・「仙台藩歴史事典」仙台郷土研究会、平成十四年
- ・「仙台叢書 復刻版」、仙台宝文堂出版、収載の下記の記事。
「政宗年譜」、「伊達略系」、「伊達便覧誌」、「義山公年譜」、「仙台人物史」、
「成実記」、「亙理家文書」、「葛西大崎盛衰記」。
- ・「仙台領の戦国誌」 紫桃正隆、宝文堂、昭和四十二年
- ・「伊達家の秘話」 伊達泰宗・白石宗靖、PHP 研究所、平成二十二年
- ・「宮城県史」 宮城県史刊行会、昭和二十九～六十二年
- ・「仙台市史」 仙台市史編さん委員会、平成八年
- ・「仙台市史 資料編 伊達政宗文書」 仙台市史編さん委員会、平成十七年
- ・「米沢市史」 米沢市編、米沢市役所、昭和十九年
- ・「栗駒町史」 宮城県栗駒町、昭和三十八年
- ・「栗駒町の文化財(第十四集)風土記御用書上」、栗駒町教育委員会、平成元年
- ・「栗駒物語『綱元君記よりの抜粋』」、栗駒町史談会、昭和四十九年
- ・「鶯沢町史」 宮城県鶯沢町、昭和五十三年
- ・「松山町史」 宮城県松山町、昭和五十五年
- ・「茂庭家記録 綱元君記」 東北大学図書館マイクロフィルム No.1
- ・「片倉代々記」(白石市史4 所収)、白石市、昭和四十六年
- ・「伊達世臣家譜」 田辺希文ら修纂、仙臺叢書刊行會、昭和二十一年
- ・「仙台藩家臣録」 相原陽三編、歴史図書社、昭和五十四年
- ・「私本 仙台藩士事典」 坂田 啓、創栄出版、平成十三年
- ・「伊達政宗の手紙」 佐藤憲一、新潮社、平成七年
- ・「伊達三代記」 小川由秋、PHP研究所、平成二十年
- ・「宮城県姓氏家系大辞典」 角川書店、平成七年
- ・「仙台藩ものがたり」 河北新報社編集局、平成二十八年
- ・「ふるさと宮城の栗駒の風土記」 佐藤正喜、東湘印版(自費出版)、令和二年

■茂庭綱元略年表■ 卷末資料

■関連地図■ 卷末資料

■近世 茂庭氏系図■



■ 登城人物 略記 ■

【あ行】

浅野長政 豊臣五奉行筆頭、1547－1611。織田、秀吉、秀頼、徳川家康と、主君を変えた。
甘粕景継 越後上杉氏家臣、上田衆。1550－1611。上杉二十五将のひとり。伊達の旧城白石城代を勤めた。
石川昭光 伊達晴宗四男、陸奥石川郡三芦城主・石川晴光の養嗣子に、25代石川家当主。1550－1622。
家格一門筆頭として伊具郡角田城を賜わる。
石田与純 伊達氏初代朝宗の二男・為家の末裔。政宗に仕え、近習。殉死。1589－1636。
石母田宗頼 越前出身で小早川家の客将であった旧名・浦山景綱。政宗の命により石母田景頼の婿養子になり宗頼と改称。三迫岩ヶ崎 5400 石から家格一家に列し、高清水五千石を領した。
今井宗薫 安土桃山・江戸時代の茶人。今井宗久の子、1552-1627。
遠藤基信 1532－1585。不入斎。伊達輝宗の宿老。外交手腕に優れ輝宗、政宗の外交交渉を担当した。
遠藤宗信 1572-1593。父・遠藤不入斎殉死後、家督を継ぎ政宗に仕え宿老となる。
遠藤玄信 、生没年不詳。兄遠藤宗信が病没し家督を継ぐ。宿老。
大内定綱 1545－1610、小浜城主、後に伊達成実の誘いに応じて、弟の片平親綱と共に伊達氏家臣に。
大久保忠憐 譜代大名、相模小田原藩初代藩主、1553－1628。父は徳川十六神将の一人で忠世。
大崎義隆 奥州探題・大崎氏 13 代当主。1548－1603。秀吉の小田原征伐に参陣せず改易・滅亡した。
奥山常良 伊達氏重臣、家格着座、1571－1649。政宗近習から奉行(1616～1649)に。2500 石。
鬼庭良直 斉藤別当実盛の後裔といわれ、後年伊達氏初代の朝宗に仕え、伊達群茂庭村を領して鬼庭と称し、代々伊達氏に仕えて戦国時代の当主、茂庭綱元の父。1513－1786、享年 73。

【か行】

葛西晴信 陸奥国人領主・葛西氏 17 代当主。1534－1597？ 登米郡寺池城を本拠地とした。
片倉景綱 白石片倉氏初代当主。異父姉に政宗乳母の喜多がいる。1557－1615、享年 59。
片倉意休斎 輝宗、政宗に仕えた。片倉小十郎景綱の父・景重(米沢八幡宮神職)の兄。
片倉重長 伊達氏重臣片倉氏2代当主、小十郎景綱の嫡男、1584－1659。白石城主。
蒲生氏郷 1556－1595。六角氏、織田信長、豊臣秀吉に仕え、最後は陸奥会津黒川城四十二万石城主。
木村伊勢守 ？－1598。丹波・亀山城主内藤如安の家臣・明智光秀の家来。本能寺の変後に秀吉家臣へ。
九戸政実 南部氏家臣、1536－1591。九戸城主。天正十九年、南部家当主・信直、豊臣政権に対して反乱。
桑折政長 伊達氏重臣、1561－1593。奥州仕置後の江刺郡岩屋堂城城主、朝鮮出兵、釜山浦で病没。
国分政重(のち盛重) 晴宗五男、幼名伊達彦九郎。国分氏の代官、転じて相続した。

【さ行】

酒井忠勝 徳川譜代大名、家光・家綱政権で老中、大老。1587－1662。酒井忠世は従兄。
酒井雅楽頭 三河以来の徳川譜代、雅楽頭系酒井家宗家四代で酒井忠清。1624－1681。酒井忠世の孫。
佐々元綱 政宗の小姓頭、のち江戸屋敷中老。着座佐々氏初代当主、丸森所拝領。
白石宗実 伊達輝宗の代から伊達氏に仕えた。1553－1599。養子・宗直は登米伊達氏の祖となった。
鈴木元信 1555－1620。出自に諸説あり。行政・財政能力に優れ信任厚く、政宗留守中の国家老。

【た行】

伊達政宗、伊達忠宗、伊達成実、伊達宗綱、伊達宗信、伊達兵部宗勝は省略(本文参照)。
伊達輝宗 政宗の父。
伊達晴宗 政宗の祖父。
伊達植宗 政宗の曾祖父。
田村大膳大夫清顕 陸奥田村郡を支配した戦国大名。一人娘の愛姫は政宗の正室に嫁がせた。
豊臣秀次 秀吉の姉の子で養子になる。1568－1595。秀吉の恣意で関白、その後、追放・出家・切腹。

【な行】

中島意成 仙台藩家格一族、上口内中島氏初代当主(1,880 石、江刺郡上口内要害)。
半井驢庵 医師。徳川幕府の御典医として、家康、秀忠、家光に仕えた。半井家は代々朝廷の典薬頭。
南部利直 南部氏第27代当主、陸奥盛岡藩初代藩主、1576－1632。元和元年、盛岡城を築城した。

【は行】

支倉常長 伊達氏の家臣、6百石。慶長遣欧使節。ローマでは貴族に列せられた。1571－1622。
畠山義継 室町幕府管領のひとつ畠山氏の嫡流、二本松畠山氏15代当主、**1552－1585**。
原田宗時 藩重臣、1565－1593。文禄の役中、対馬で病没。原田甲斐宗輔の祖父にあたる。
原田宗資 仙台藩重臣、伊達家臣の桑折宗長の子。1582－1623。原田宗時の養子となり原田氏を継いだ。
古内義広 伊達晴宗の子・国分盛重の二男。1589－1658。古内実綱の養子。藩主忠宗の奉行。殉死。
本多正純 江戸幕府老中、本多。本多正信の長男。1565－1637。宇都宮藩主。

【ま行】

松平忠輝 徳川家康の六男、幼名は辰千代。越後高田藩主。兄秀忠の手で改易された。1592－1683。
最上義光 出羽・最上氏 11 代当主、**1546－1614**。出羽山形藩初代藩主。
茂庭綱元、茂庭良元、茂庭定元、茂庭実元、茂庭茂行、茂庭恒真は省略(本文参照)。

【や行】

柳生宗矩 徳川将軍家の剣術師範。大和柳生藩初代藩主。1571－1646。
屋代景頼 祖父の代から伊達の宿老・屋代修理の子、政宗の側近。1563－1608。
山岡重長 伊達氏家臣、1553－1626。輝宗、政宗に仕え、朝鮮出兵では釜山の皇女を生け捕り。

【ら行】

留守政景 植宗嫡男、留守顕宗の養子となり奥州の名族留守氏 18 代を継いだ。

【わ行】

和賀忠親 和賀郡の国人領主の子で小田原の役に参陣せず改易。
亘理元宗 亘理氏 17 代当主、陸奥亘理郡亘理城主、伊達氏重臣、1530－1594。
亘理重宗 元宗嫡男、18代当主。父を相続し涌谷城主に。嫡男・定宗は涌谷伊達氏の初代。
亘理宗根 政宗の庶子で高清水亘理氏(後の佐沼亘理氏)初代当主、1600－1669。
和久宗是 武将・能書家で秀吉の祐筆。出家して自庵宗是。1535－1615。
和久是安 和久宗是の二男、秀頼の祐筆。1578－1638。大阪落城後、伊達家家臣・千石。祐筆。